
Mystic Lady ~邂逅編~

DIVER_RYU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mystic Lady ～邂逅編～

【Zコード】

Z2630U

【作者名】

DIVER_RYU

【あらすじ】

表面積の約九割が海に覆われた世界。謎の美女“ロッサ”を護り、海の漢“琉”が今日も行く！物語の舞台を南国オルガネシアから砂の国アルカリアに移し、二人を待ち受けるのは新たな出会いか、襲い来るハルムか、垂涎の砂漠グルメか、はたまたあの邪教集団か！？男の口マンを描くSFファンタジー第二段！！相変わらず誤字脱字が多いです。変なところを見つけたらご報告ください。

『琉が飲むソーティアの水は熱い』序（前書き）

オルガネシアを旅立つた琉とロッサ。今、アルカリアでの冒険が始まる。

前作『Mystic Lady 第一部「復活編」』の続きとなっています。未読の方はこちらへどうぞ <http://code.syssetu.com/n7922s/>

『琉が飲むソディアの水は熱い』序

カレッタ号船内。明かりのついた部屋で一人、パソコンを打つ姿があつた。

『航海日誌：月×日 アルカリ亞を目指し、オルガネシアを出て4日が経つた。明日の朝にはアルカリ亞の玄関口、ソディア島に着くだろう……』

アルカリ亞。日誌に出てきたソディア島に加え、リチウム島、ポタス島、カルス島の4つからなる国である。ソディア島以外は小さく、あまり人は住んでいない。

海底遺跡エリアは、ソディア島の沖に存在する。比較的島から近いので、基地から直接通つて調査するということが可能である。難点と言えば、ここに古代文字はまだ解読が成功していないというところだけだろうか。

『まずはソディアのラング基地に話を通しておこう。それからまずは街の探索。ロッサにまた色々と見せてやる必要があるだろう。それにしても久しぶりのソディアだ。またサソリで一杯飲みたい所である……』

キーボードを打ちながら感慨にふける琉。

「まあ、まずは着いてからだな！ 今日はもう寝よう」

（翌朝）

「ロッサー！ 着いたぞーーー！」

操舵室から響くアナウンス。部屋の中、ロッサは田を擦りつつ布団の中からもぞもぞと出て来た。

「起きたか。今日は外で飯にするぞ、行こうつか！！」

田をこすり、操舵室に向かったロッサに琉は言った。窓からはこれまでよりも強烈な日差しが降り注いでいる。彼女は窓の外を見ると、そこには今までとは違う砂と岩で構成された世界が広がっていた。

「（ロ）ジがソディア……。何て言つか、島全体が黄色い……」

「アルカリアが熱砂の国と呼ばれる理由はこれだ。ソディアに限らずどの島に行つてもこんな感じだぜ」

辺り一面砂景色。強烈な日差しが道行く者に突き刺さる。この環境を好む種族であるティアマンを除けば、他の種族はオアシスと海辺付近以外にはほとんど見られない。これまでの島とは違う環境を目の当たりにし、ロッサは夢中になつて眺めている。

「港の付近にちよつとした街がある。調査は明日だ。今日は一日、街の散策とでも洒落てみないかい？」

カレッタから降りた二人。早速ロッサが街に歩こうとした時だつた。

「待つた。そつちじゃない、こつちだ」

琉の指差す方向には大きな建物があった。

「ソディアのラング基地さ。先に手続きを済ませて来る」

琉に連れられ、ロッサはラング基地まで歩いた。基地の入り口には大きな看板が立てかけてある。

「やれやれ、『女性装者募集!』か。見るたびに大きくなってるな、この宣伝」

「ねえ、琉。どうしてこれが大きくなるの?」

ラング装者は現在の所ほとんど男性しかいない。強大な力を必要とするせいか、女性が志すことがまずないのだ。男女格差をなくすべく、この業界は女性用アーマー（因みに普通のアーマーは30kg）を開発したり、トライデントの軽量化（普通のトライデントの重さは2kg）に努めたりして積極的に女性装者を増やそうとしているのだが、現状は大して変っていない。

おまけにソディア基地の装者はほとんどが赤銅色の肌をしたマッチョな猛者ばかりなため、まず寄りついてもくれないと現状があるのだ。因みに女性用アーマーを使用しているのは琉の知る限りは一人だけ。しかしそれも、種族の特性上筋肉量の少ないジャックが身につけているモノだけである。

カウンターに向かい、手続きを済ませた琉はロッサを連れて出た。そろそろ一人にとつての朝食の時間であるが、ここの中には訓練施設や食堂と言つたモノがない。待ちきれないとばかりにロッサは琉の手を引き、街の方に引っ張ろうとした。

「慌てるなつて。そうだ、せつかくだからアレ使おつぜ」

笑いながら琉が言つ。彼はパルトネールを取り出すと、カレッタ

号の方を向いて言った。

「アーディー！」

海面に影が浮かびあがり、琉のサポートメカであるアーディーが姿を現す。

「チョインジ！ マシン・アーディー！」

たちまちアーディーはバイク形態であるマシンアーディーに変形した。琉がハンドルを握ると、ロッサがその後ろに乗つてがつちりと組みついた。当然のことだが琉の背中には柔らかいモノが押しつけられる。

（やべえ、心拍数が急上昇してやがる……。落ち着け俺、この間一緒に飛んだ時はどうもしなかつただろう！）

「琉、どうかしたの？」

琉の耳元に、不意にロッサの声がした。

「ひやあっ、何でもない！ い……行こうか……」

琉がハンドルを握り、アクセルを鳴らす。踏み固められた砂の道を、青の機体が駆け抜ける。一部の島をのぞいて道路が作りにくいこの世界に、オントロード車は存在しない。

「ちょうどこの奥に古い飯屋がある。朝早くからやつてゐるし、そこにはじつか」

早朝、まだ人通りの少ない街中でアーデラーを飛ばす琉。ロッサはその背中で、アルカリア独特の熱気をはらんだ風を肌に感じていた。

「琉、ここって美味しいモノ、ある?」

ロッサが聞く。琉はハンドルを握つたまま答えた。

「旨いモノね。ここには他で食えないモノが色々あるぜ。例えばサボテンのステーキとか、オオトカゲの丸焼きとか。ここは環境が厳しくてね、元々生き物が少ないんだ。その数少ない食材をフルに活用するためにね、料理そのものは色々と発達してるんだぜ。個人的お勧めはサソリの唐揚げかな……。あれ、ビールの当てに最高なんだよね」

琉はあちこちの島に行くせいか、中々の食通でもある。旨いモノには目がない一方、嫌いな食べ物はほとんどない。彼にとつて、食べられないモノはイコール食中毒を起こすモノか調理に失敗したモノである。

「サボテン? オオトカゲ? ……サソリ?」

ロッサにとつては新出単語のオンパレードである。それもそのはず、これらの生物は皆この世界ではオルガネシアでは見られず、アルカリアにしかいないモノばかりだからである。目覚めて一ヶ月では世界を把握しきれない。琉はぽかんとなつてているロッサに言った。

「まあ、食つてみれば分かるさ。どれも旨いモノだぜ。……お、そろそろ着くな」

『琉が飲むソティアの水は熱い』序（後書き）

ついに始まりました第二部！ 感想、評価、レビュー、ツッコミ等、お待ちしております。

『琉が飲むソディアの水は熱い』 破（前書き）

アルカリアの領地、ソディア島に着いた琉とロッサ。二人は早速地元の飯屋に向かつたのだが……。

『琉が飲むソティアの水は熱い』 破

一人が着いたのは小さな露店であった。この島は日中が暑いため、建物の外に店を構える所が多い。ちょっとした屋根の下にある店内には、実に様々な食材が置いてあり、実際に販賣そうな匁いが立ちこめている。琉は店の外にアーチドラーを駐車し、席に着いたのであった。店で中年と思われる男が一人で切り盛りしていた。

「いらっしゃい、注文が決まつたら呼んでくれ……ー？」

「どうかしましたか？ ひょっとして、何か付いてる？」

店主の男は琉とロッサを見るなり驚愕の表情を浮かべ、すぐさま建物の中に駆け込んで行つた。

「一応、頼むモノは決めとくか。あと、チャリンも用意しないとな

この世界の飲食店は先払いが基本である。因みに通貨はどこにいっつてもCで通じるようになつていて。

「琉、あの吊るされてるモノは何？」

「あれ？ オオトカゲだ。流石に朝からこいつは重たいな……」

ロッサの指差した先には大きなトカゲの尻尾を結んで吊るしてある。他にも、サソリの入ったバケツや適当な大きさに切られたサボテンが置いてあつた。

「何か、お勧めはある？」

「うーん、 そうだね。 朝だし比較的あつさりしたモノが食べたいかな……。 」Jの砂豆のスープなんてどうだい？ 味は塩味が良さそうだ

砂豆とはこの島で育つ独特の豆の事である。 少ない栄養分でも育ち、 かつ栄養分が豊富なのでアルカリアでは主食として食べられている。 元々は野生のモノだが、 品種改良して大粒かつ大量に実るモノが栽培されているという特徴を持つ。 因みにこのスープ、 塩味の他にオオトカゲの肉の入ったモノや魚のつみれダンゴを入れたモノ、 香辛料を多く入れたモノまで色々ある。

「すいませーん！ー」

琉は店主を呼んだ。 建物の奥から先程の男が慌てて走つてくる。

「ええと、 砂豆のスープを二つ。 一つは大盛り、 味は塩味でー！」

「は、 はい、 かしこまりました。 250チャリンです……」

この店主、 今度はロッサをじっと見ている。 それも睨みつけるかのような鋭い目つきで。 ロッサは首を傾げた。

「どうしたんです？ …… やつぱ、 気になりますか？」

そこに琉が自分の両手を胸に当て、 おどけた口調で悪戯っぽく聞いた。

「あ、 いや、 何でもありませんー！ いや、 何か見覚えのある顔だな、 と思つただけで……」

「わたし、この人知らない」

妙に慌てる店員。彼の顔を指差し、冷静かつバツサリと否定するロッサ。その様子を笑って見ている琉。

「そ、そうですよね。ははは……」

店主は逃げるように店の奥へと走つていった。

「何だ人違いだつたのか。まあ良くある」とさ

琉はロッサに言った。そう考えれば腑に落ちないこともない。一方のロッサは店内に置いてある大きな赤い果物を手に取つていた

「琉、この、ゴッゴッしたのは何？」

「そいつはドラゴンフルーツ、サボテンの実だ。そうだな、そいつデザートに頼んでみるかい？『いいんだぜー、これー……すいませーん、追加注文したいのですがー！？』

一方建物の奥では。

「良いかアヤ、よく見る。あいつらだ。例の二人がよりもよつてうちの店に来たぞ！」

「お父さん、どうする？ やつつけるの？」

先程の店主が、自分の娘に言い聞かせている。店員の手に持つているモノ、そこには琉とロッサの顔写真が映つたポスターであった。

『WANTED！ 賞金：男は10000000、女は3000000
C. 独立宗教法人メンシエ教』

そう、琉達が寄つたこの店はメンシエ教徒の持ち主だったのである。

「アヤ、あの棚から例のアレを持って来い」

娘は棚から何やら白い粉を持って來た。店主はその粉をコップに入つた水に入れる。粉は瞬く間に水に溶け、跡形もなくなつた。

「お父さん、念のためにこれも持つてつて」

娘は大きなナイフを店主に手渡した。店主はナイフを懐にしまい、コップの乗つた盆を持つた。同時に店から琉の声がかかる。

「ふつふつふ、丁度良い時に追加注文か。意外と馬鹿な奴らだ……。はいはーい！」

店主は琉の元に向かつた。テーブルに水を置き、琉とロッサの顔を見ると、彼は追加注文の内容を伺つた。

「あーすいません、ドリンクフルーツを一つ。お願ひできますかね？」

「はいがしこまつました。120チャリンです

店主は琉からチャリンを受け取ると、そのまま店の奥まで逃げるように入つて身を隠した。

「どうしてあの人、慌てて奥まで行くの？」

「本当に謎だよな。何でこう慌てて店の奥に行くんだ？ まだ朝早いし、客なんざまだ俺達含めてまだ3組しか来てねえぞ？ まあでも、これからどんどん忙しくなるんだろうな。……そんなことより水来たぜ水！ ここにいると本当に喉が渴くんだよな！！」

そう言いながら琉は水を口にしようとした。が、

「ん！？ ロッサ、飲むの待った。ちょっとそのコップ貸してくれ」琉に言われ、ロッサもコップを琉に渡した。琉は水の匂いを嗅ぎ、言った。

「ロッサのもだ。おかしいぜ。何で水からトラ電池の匂いがするんだ？」

トラ電池とは、「トライデント用電池」の略である。第一部の第六章で、琉がオキソ島のラング基地で買ったアレである。この電池は、中に特殊な液体燃料が密封してあるのだ。しかしこれは非常に危険な物質で、一般家庭にあるモノではない。

「まずい、感づかれたか？ くそ、相当鼻が良いみたいだな……」

琉はコップを持つて立ち上ると、真剣な顔でロッサにこうつぶつと話した。

「一応調べを入れる。ちょっと離れてくれ」

ロッサがそこから数歩下がるのを確認すると、琉は持ったコップを傾けて中の水を地面に少し落とした。するとなんといふことだろう。水が地面に着いた瞬間に瞬く間に炎が上がったのである！

「水が……燃えた！？」

信じられない光景に絶句するロッサ。当然周りの客も騒ぎ始めた。琉は炎を踏みつけて消すと、店の奥に向かつてこう言った。

「アキサミヨー（なんてこつたい）！？……おい、これは何でタイムサービスだい？喉の消毒サービスか……うわッ！？」

店の奥から店主がナイフ片手に飛びかかってきた！刃をかわし、店主の腕を素早くつかむ琉。そのナイフを見て、琉は驚愕した。

「これはメンシェマーク！？　おい、いくら俺が憎くてもこんなことしたら店の評判が落ちて、アンタの家計まで火の車になっちまうぜ！……ロッサ、他の客連れて外に逃げろ！！」

琉に言われ、ロッサは他の客と一緒に外に出た。

「ひいッ、あんなモノ飲まされた口にや、一瞬で灰にされちまうぞ！」

「朝からなんてことが起きるんだ全く！？」

客は口々に言いつつ外に逃げた。

「貴様、よく気付いたな！　しかしメンシェの裁きから逃れられると思つなよー！」

「説教なんぞじりじりも良い、表に出ろーーー！」

琉と店主が組みついたまま、店の外まで飛び出て来た。静かだつた通りはたちまち騒がしくなる。店主は琉を振り払つて、そのままナイフで斬りかかった。

（ちつ、速いな。パルトを抜く隙がない。よし……）

相手のナイフをしゃがんでかわし、そのまま足払いを掛ける。ナイフを持ったまま、相手は転倒した。つかさず琉はナイフを握った手を掴み、指を立てて強く握りしめた。

「ぎゅああああーーー！」

穴が開くほど激痛が店主の腕に走る。悲鳴とともにナイフは落ちた。

「お父さんーーー？」

悲鳴を聞きつけ、店から店主の娘が飛び出で来る。

「俺の握力は80kgある。リングを握ればつぶれるじゃつか穴が開くぜー！」

台詞と共に琉は腕を放した。ナイフに手を伸ばす店主。しかし琉がナイフを蹴飛ばし、額にパルトネールの先端を押し当てると言つた。

「しばらへ寝つてな。パラライザーーー！」

『琉が飲むソティアの水は熱い』 破（後書き）

第一部連載中！ 今回もまたノッケから飛ばしますよ！ w 更に第一部以降は一章を序・破・急の三部構成にしようと思います。四部構成だと後の管理が大変だったので……。

『琉が飲むソーティアの水は熱い』 急(前書き)

食事をとつに行つた琉とロッサは、その店の店主に命を狙われた。
メンシェ教徒は忘れた頃にやつて来る……！

『琉が飲むソティアの水は熱い』 急

引き金を引く琉。パルトネールの先端から至近距離で、オレンジ色の閃光が店主の額に突き刺さった。娘の見ているすぐ目の前で、店主は動かなくなつた。

「ふつ、やれやれ。世話が焼けるぜ」

琉は店主を店の中に放り込むと、トリガーパーツを外して上着にしまいこんだ。パルトネールを腰のサッシュに差すと、そしてロッサの方を向いて言った。

「ロッサ、飯は船で食つ」とじよつ。今日は一端帰らつか……つておわッ！？」

その場を離れようとした琉の背中に衝撃が走る。ロッサの目の前で地面に倒れこむ琉。そこにいたのは低めの身長に短めの黒髪の女であつた。女はポケットからスタンガンを取り出すと、今度はロッサに迫つた。地面から起き上がる琉。女の持つスタンガンを見るなり、琉はその場から女の腕に飛びついた。

「ロッサ、今すぐ逃げる！」

ロッサの体は電気に弱く、例えスタンガンでも彼女にとつては凶器である。琉はロッサをその場から離すと、スタンガンを強引に取り上げて踏み壊した。すると相手は先程のナイフを取り出し、店主よりも格段に速い動きで斬りかかる。このままじゃやられる、そう思つた琉は一端距離をおいた。

「お父さんの仇……！ よくもやつてくれたわね……」

女は店主の娘であった。ナイフを握る手が小刻みに震えている。彼女にとつて、すぐ目の前で父親を撃たれたるところはトラウマになりかねぬショッキングな出来事と言えるだらう。

「お父さんを撃つたのは悪かった。だが安心してくれ、撃つたのはパラライザーだから一時的に眠つてるだけだ」

「それでも、撃つた事実は変わらないわ。貴方は悪魔をかばうためなら他人を犠牲にすることもいとわないのね。それにお父さんが生きていよつといまいと、アタシが今やるべきことせーつー 例え刺し違えてでも貴方を倒すーー！」

女はそのままナイフを逆手で持ち、琉に飛びかかった。琉はパルトネールでナイフを受けた。

「悪いことは言わん、ナイフをしまつて撤退しなさい。こんなこと、中学生のやることじやないー！」

「あら、誰が中学生ですって？ この期に及んでふざけるんじやないわよ、これでも22だからッー！」

パルトネールを押し切り、女のナイフが琉の上着とサッシュを切り裂いた。上着が地面に落ち、琉は黒い半袖の開襟シャツと白いベストを羽織った姿となる。

(ちつ、やりやがったな！ ただでさえ俺は射撃苦手なのにさうこまか動き回るんじやねえよーー)

琉は女のナイフをかわし、前転すると共に上着を拾い上げ、トリガーパーツを取り出そうとした。

「そうはさせんか！」

女は琉の肩を蹴った。仰向けにひっくりかえる琉。女は流に組みついてナイフで首を搔こうとする。しかし女の表情は途端にこわばつたモノとなり、握っていたナイフは地に落ちた。

「考えもなしに組みつくとな、こうなるんだぜ、お嬢さん？」

パルトネールの先端が、女の鳩尾を捉えていた。そう、琉は組みつかれるのと同時にパルトネールを構え、相手の飛びつく勢いを利用して真っ直ぐに突いたのである。琉は女を払いのけると上着を回収し、そのままアードラーに向かつて走った。

「琉、大丈夫だつた！？」

「俺は大丈夫だ、早く船に戻ろー！」

ロッサを後部に乗せ、琉はその場から走り去りうとした。

「待て……逃げるのか卑怯者……！ 殺すならやつと殺しなさいよ……」

女が鳩尾を押さえたまま琉達に迫る。

「……俺に前科は不要だぜ、特に婦女暴行はな。そつだ、こいつはトラ電の燃料代な」

1円詞の後、琉はポケットから硬貨を取り出した。

「釣りはいりんよ。とつときな」

琉は女に向かつてその硬貨をシコシ、と投げつけた。硬貨はすねに当たり、女はそのまま足を押さえてしゃがみこんだ。その隙を突き、琉はアクセルを鳴らして走り去つていったのだった。

「なんて屈辱……つてこれ、1チャリンじゃないの…？」

因みにこの世界における1チャリン硬貨は1円玉と違つて四角いという特徴がある。更に少し重いため、こいつ風に銭型 次みたいにぶつけられると非常に痛いのだ。アードラーに乗つて走り去る一人の背中に、女の恨めしそうな視線が突き刺さつていた。

「つ、喉が渴いたよお……」

「こには乾いてるからね……。待つてろ、船に着いたらたっぷり飲ませてやるからな！」

カレシタ号に急ぐ一人。アードラーを船底に戻すと、琉とロッサは我先にと食堂に走つて水を飲み、そのまま遅い朝食を取つたのであつた。

「くつそー、あの女……。俺の服を台無しにしゃがつたな！」

食事の後、琉は自室で女にやられた上着を広げていた。ナイフで斬られた上着は真つ一つに裂かれており、戦闘の激しさを物語つている。

「服、直らないの？」

傍りで見ているロッサが言つ。

「このままでは直らない。ロッサ、君が着ているモノと違つて、俺のは体の一部じゃないんだよ？まあ、幸いここには腕の良い知り合いがいる。後で修理に出しに行け。まあ、しばらくな……」

そう言いつつ琉はクローゼットを開けた。すると何でことだらう。中には同じ上着がずらつと並んでいたのである。

「一応ここからここまでが夏用。あとは冬用だ」

琉は一着、夏用のモノを取り出して羽織ると、裂かれた上着からポケットの中身を移した。中には替えの電池、メモ帳等の筆記用具、財布、ライセンスの入ったカードケース、パルトナーのトリガー パーツと、大小様々なモノが入っている。その一つ一つを琉は移したのであった。

「ねえ琉、何で同じ服ばかり持つてるの？」

ロッサの疑問ももつともである。

「決まってるだろ、めんどくさいからだ！」

琉は服には無頓着である。いつも来ている服は作業着であると同時に礼服でもあるという、ズボラな琉にとつてはまたとない便利なモノなのだ。因みに彼のベストはいざという時に膨らんで救命胴衣になる。彼にとって服とは道具であり、機能性こそが最も大切な要素なのだ。因みにどれも同じ柄なのは其の柄が好みだからである。

「ロッサ、夕方になつてから裏通りに向かう。それまでは休んでなさい。……やれやれ、こつちは何も食つてねえのに食事代とられちまつたなあ……」

まあ、命を買つたと思えば安い買い物だつたか、と琉は考え直した。果たして一人は無事にこの国で過ごせるのか、そして垂涎の砂漠グルメを口にすることは出来るのか？ ロッサをめぐるアルカリアでの物語は、まだ始まつたばかりである――

「覚えてらつしゃい……！ いつか、貴方の首はアタシがもりい受けるから――！」

『琉が飲むソーティアの水は熱い』 急(後書き)

今回は色々と変なことが判明しましたねw 更に新レギュラーも登場しました。あと、今回から次回予告は後書きでやるつもり思います。ではどうぞー。

♪次回予告♪

「久しぶりだな！」

「琉、さつから何を慌ててるの？」

『硬い』ことは良いことか　序（前書き）

（前回までのあらすじ）

謎の美女ロッサの記憶の手掛かりを求め、アルカリアまでやつて来た琉。翌日に潜水調査を控え、市内観光と洒落ようとした二人を待つていたのはメンシェ教の罠だった！ 何とか退けた琉達であったが、果たして二人は無事に調査することが出来るのであろうか！？

『硬い』ことは良いことか　序

交番。あの後琉は、朝の騒ぎの中心人物の一人として警察に呼ばれたのだった。今、琉の目の前には警官服に身を包んだティアマンの青年がいる。

「……なるほど、周りの証言とも一致しますね。ということは、一方的に命を狙われた、と。そつそつ、あの店主から例の薬物の反応が出ました」

琉は襲われた時のことを見官に話した。幸いにも目撃者が多く、琉がとった行為はいわゆる“正当防衛”であることが証明された。

「ところで、いつこいつとは過去にもありましたか？　何か、彼らから恨みを買つようなことでも」

「過去も何も、何度かやられてます。どうも奴らに、メンシェ教に目を付けられたみたいで……。心覚えと言つたら他の人種の知り合いが多いのと、以前に私の故郷にいた教徒を警察送りにしたのが原因ではないかな……」

琉はなるべくロツサに触れないように警官に話していた。オルガネシアでメンシェ教に破防法が適用されたという情報はアルカリアにも入つており、特にティアマンが多く住むこの国では警戒されていたのだ。

「分かりました。また何かあつたら、いつまでも連絡して下さい」

琉が交番を出ると、すでに外は夕焼け空となっていた。

「琉、どうだつた？」

「ああ、無罪放免だ。ま、いつも言つてゐるけど、俺に前科は不要だぜ。さて、裏通りに行へか」

そういうと琉はアーデラーに跨り、ハンドルを握つた。一人は、今朝通つた道のすぐ裏側……通称裏通りを通つていた。店が立ち並んで賑やかだつた表通りと比べ、裏通りには生活感が溢れている。

「ここにはちよつとした穴場あるんだが……その前に寄つておきたい場所があるんだ。ロッサ、自分の入つてた棺を覚えていいるかい？」

ロッサは海底遺跡の棺の中から発見された。しかしその棺は田覚めたロッサには不要となり、琉はある知り合いの所へこれを宅急便で送つたのである。

「覚えてる。でも、あれがどうかしたの？」

「ロッサ、君にとつては使い捨てのベッドかもしれんが、俺達にとつては当時の事を知るための貴重な資料なんだ。だから調べてもらうことにした。今日向かつてるのはそれを調べている工房さ。実はわざと連絡があつてね」

「この国は主にティアマンとトヴェルクが住んでる。あとは海端とオアシス付近にヒトが少しくらいか。逆に森林を好むアルヴァンは全くと言つて良いほど見掛けない。ティアマンは鉱石等の“素材”に詳しく、一方トヴェルクは高い技術力を持つてゐる。故に、このアルカリアは砂漠の国であると同時にモノ作りのメッカでもある

のだ。

「話によれば棺のことが少し分かつたらしい。そして丁度俺がここにこると来た。……行くしかないよね？ それにここで食える料理はほとんどがディアマンとトヴォルクの伝統料理が入り混じったモノでね、こう言った工房が発祥だつたりするんだぜ」

やがて二人はある建物にたどり着いた。その壁と屋根には様々な生物を模したレリーフの見られ、中からは石を削る音やマジのキー ボードを叩く音等が聞こえてくる。

「さて、到着だ。ちょっと待つてな」

琉はアーデラーにヘルメットをしまうと同時に座席から一升瓶を取り出した。そして玄関に向かい、扉に付いているチャイムを押した。

『オキヤクサンダヨ～！～』

明らかに分かりやすく、かつウケ狙いとしかとれないチャイム音が響く。数秒して、扉は大きな声とともに開いた。

「はいはい、どちらさんですか……おお！ 琉ちゃん！～」

中から現れたのはディアマンの男であった。顔に石で出来たタイル状の鱗が生えており、額にはこれまた大きなダイヤモンドがはまっている。肘から手の甲にかけてゴツゴツとした殻状の石に覆われていた。ゴツい外見とは裏腹に、その喋り方はどこかのんびりしていた。

「久しぶりだな、アル！　お土産もあるぜ」

アルと呼ばれた男は扉を開け、琉達を出迎えた。

「早速上がつてよお！　……おや、彼女が例の棺の？」

「ああ、そうだ。彼女がロッサだ、よろしくな。ロッサ、彼はアルベール。俺の昔からの知り合いだ」

アルベール・デュランダル、通称アル。ディアマンの男性で、琉がこの業界に入つて以来の知り合いである。ディアマンは長生きでかつ成長が遅く、彼も見た目は若いが実は今年で50歳になる。しかしこの年齢、ヒトでいう25歳弱に相当するため、おやつさんと呼ぶにはまだ若かつたりするのである。

「皆、今日はもう上がりつてえ！　大事なお客さんなんだあ！」

工房内で作業していた者は、次々に作業を止めて帰り始めた。

「何か悪いね、邪魔しちゃつたみたいで」

「良じよ良じよ、こつちは商売だしい。そうだ、ちょっとここに座つてねえ」

琉とロッサは事務室に案内され、席に着いた。

「おう！　琉ちゃんじやないか！？」

そこにもう一人、トヴェルクの青年が入ってきた。

「ゲオ！ 元気にやつてたかい！？」

「ああ、もちろんだ！ ってあれ、彼女は？」

ゲオはロッサに気が付いた。

「彼女はロッサ。例の棺に眠つてた子だ。……ロッサ、彼はゲオルク。ここの中人だ」

ゲオルク・ハインツェル、通称ゲオ。これまた琉の知り合いである。因みにここの中房の図面を引いたのは彼である。

「そうだ、せつかくだしお土産持つて來たぜ！」

琉は持つていた一升瓶をテーブルにドン、と置いた。途端に彼の目が輝きだす。

「ヒヤツハー！ 泡盛だアーー！」

「そうだ、俺の故郷、ハイドロ島の泡盛だ。好きなんだろ？？」

そこにアルが入ってきた。

「お待たせえ。そうだ、御飯作らなくちゃねえ。琉ちゃんも食べてくれかい？ 良いオオトカゲがあるけど」

「あ、良いかい？ じゃあ手伝つよー！」

意気揚々と工房のキッチンに向かう琉。こつしてやつとアルカリアの料理にあり付けることとなつた琉とロッサなのであつた。

「聞いたぜ琉ちゃん、今朝は散々な田に遭つたんだって？」

ゲオが琉に聞いた。

「ああ、水ん中にトラ電の中身へれられたぜ。あれ飲むと死ぬの通りすぎて火葬まで出来ちまうからなあ……」

「あれは危ないよお。ヒトだつたら丁度コップ一杯で灰になるからねえ。まあ、オイラ達ならその半分でも十分危ないけどれあ、それだけあつたらうちのP.J.がフル稼働で1週間使えるよお」

つまり琉とロッサの分を合わせると一週間分である。工房で最もかかるのは食費と燃料費なので、この話はあまりにもつたいいことだといつのがお分かりだらうか？ 要するに琉を殺すのに使うくらいなら、彼らの所に持つて行けばむしろ感謝されるところだったのである。

「どりせなら持つてきてよお」

「ダンナ、地味に無茶をおつしゃる……。密封しないんですぜ？」

『硬い』とは良いことか　序（後書き）

新キャラ登場！ それも、ディアマンのメインキャラが初登場致しました。彼らの活躍にも、期待下さいw

『硬いことは良いことか』 破(前書き)

棺について分かったことがある 連絡を受け、琉とロッサは工房に向かった。

『硬いことは良いことか』 破

オオトカゲの皮を剥ぎ、肉をぶつ切りにするゲオ。そこに香辛料を加え、大量の油で炒め始めた。皮はなめして使うことが出来る。その横で、琉はサソリを揚げていた。

「琉ちゃんの料理は久しぶりだなあ。今日は腕が鳴るねえ」

アルは素手でサボテンを引きちぎり、皮を剥がして焼いていた。のんびりとした口調で、やつてることとは中々豪快である。

「やついやあの棺桶のことで来たんだよねえ？　まずオイラの目からすれば、あれば中々良い大理石で出来てるよお。色々くつついてボロボロだつたけど、あれば是非ともオイラの鱗に欲しいんだなあ。一片食べたんだけど、中々旨かつたよお」

ディアマンは鉱物を食べ、骨や体表の鱗、髪の毛や爪等に変えている。そして鉱物以外にも、有機物から摂取した炭素が年齢とともに額や首筋といった場所に蓄積され、大きなダイヤモンドが出来るという特徴を持つ。アルの額には一枚、棺から取つたと思われる大理石で出来た鱗が生えていた。

「あともう一つ、あの棺は埋葬するためのモノではないぞ。いわゆるゴーラードスリープ装置つて奴だ。それも封印解除の際にエネルギーを『』え、目覚めた後はすぐに活動できるようにするモノさ。碑文からしても恐らく、彼女は何かから逃れるためにこの処置をされた可能性がある」

ゲオが言つ。確かにこの棺は最初にこれに群がるハルムの血で字

を満たし、その上で一杯の清水を『与える』ことで蓋が開いた。ゲオの推測ではハルムを集めてその血からエネルギーを棺に集め、清水を掛けることで水分を補給させるのが目的ではないだろうかということであった。

「そして最後に指定したモノを口に直接入れることで封印が解ける。しかし彼女の場合は液状だったようだな。おれたちでも流石に対象を溶かして封印する技術は聞いたことがない。ということは恐らく……」

「まさか液化した姿の方が本来の姿、てことかい？」

琉は驚愕した表情で聞いた。

「それしか考えられないよ。つまり彼女はヒトじゃない何かってことさ。流石にそこまではオイラ達の専門外だ。そういうや、聞いた話じゃあ彼女は母ちゃんになるのが使命なんだってえ？　だとしたら、何処かに同胞がいるかもしれないよ」

アルが答える。つまりロッサの姿は、長身かつ豊満な胸を持ち、腰に達するほど長いブルネットの髪、端正な顔立ちのあの姿はいわば、世を忍ぶ仮の姿ということである。

「いや、ヒトじゃないのは明らかだ。こっちも色々と見て来たからな……。まあ、続きは事務室にしようか。サソリ揚がつたぜ！　ロッサ、ちょっと手伝ってくれ」

ロッサの手伝いで皿を運ぶ三人。テーブルには様々なアルカリア料理が並ぶ。大皿に豪快に盛り付けられたオオトカゲ炒めに、琉の揚げたサソリの唐揚げ、サボテンのステーキに切り分けられたドラ

「ゴンフルーツ。どれもこの世界ではアルカリアでしか食べることの出来ない珍味である。

「開けるぜ！」

琉が自前の泡盛を開けて杯に注ぐ。久しぶりのご馳走に舌鼓を打つ琉に、初めて見る料理に目を輝かすロッサ。見た目は大人でも、無邪気にはしゃぐその姿はまさに子供そのものだった。

（ふつ、相変わらず可愛い子だな……）

そつと心の中で呟く琉。ロッサは喋るのも忘れて夢中になつて食べていた。

「いつもそんな感じかあい？　まあ、食べ物が美味しいのは幸せな証拠だよお」

杯を片手にアルが言つ。相槌を打つ琉。

「そうだ、棺の話の続きといこつか。あれ、一体何年前のだつたんだ？」

「ああ、あれねえ。おおよそ三千年前に作られたモノだねえ。三千年前といえばいわゆる“大洪水”と時期が被るんだよねえ」

大洪水。遺跡の調査によれば、三千年前のある時期に大きな洪水があちこちで起こり、これで陸地の大半が沈んでいったといつ。同時に、この時期には大規模な戦争があつたらしいことまで判明しているのだ。

「といつことは戦火と洪水から逃れるために……」

琉は考える。といつことは、メンシュ教の聖典に書いてあるのは見事な『テタラメ』だといつことになる。

「それに母になることが目的なら、どこかに男の同胞がいるはずだと思つんだ。しばらくは棺探しを中心になると良いかも知れないな？」

「棺探しも良いけどもつと大事なことがあるよお……」

アルが何だか悲痛な声を上げた。

「早く水位を下げる方法を開発しないといけないんだよお！ 知つてる？ この一年でソティアは5cmも水位が上がったんだよお！ ？ このままじゃティアマンは絶滅だあ……」

説明せねばなるまい。約三千年前の大規模戦争と大洪水で、この世界の陸地は約三分の一が一気に海に沈み、推定で四十億人が亡くなつたとされている。更にそこからじわじわと海面は上昇し、約三千年かけてまた更に世界の陸地の半分が沈んだことが調査で分かっているのだ。洪水が起きたために戦争が起きたのか、はたまた戦争が起きた所に洪水が起きたのか。その史実は未だ、深海の闇に沈んだままである。

アルを始めとした『ティアマン』は水に弱い。鉱物が大量に体に含まれる彼らは、水中に入るとなじみなくなるのである。さらに湿気が多いと鱗に苔や藻が生えてボロボロになつてしまつのである。事実、遺跡で見つかる遺骨はティアマンのモノが最も多く見つかっていることからもそれが伺えるだろ。

四種族中最も海への進出が目覚ましいヒトといえども、流石に陸地がなくなつては生きていくことが出来ない。というか、陸地がな

くなつて生きていくれる種族はいないのである。船といつうモノは港がなくなればいつか沈む。それはヒトである琉にはよく分かつてゐた。

「しかも暴徒化した奴もいるしな。……メンシエ教とかさ」

生命の危機に見舞われた生物は、何とか生きようと必死になる。そして中には、少ない資源を取り合い罪を犯す者も出始めるのだ。いわば“ヒヤッハー”な連中である。メンシエ教はいわば、その筆頭といつても過言ではないだろう。

「社会不安が事件を招き、やがて矛先は弱者に向かう。……。その弱者の中に、ロッサも含まれてるワケか」

『硬い』とは良いことか 破（後書き）

新たな事実がまた次々と……。実はそこまでお気楽な世界ではない
んですね

『硬こうじは良いことか』 急(前書き)

ロッサの棺の秘密。それは、葬るためのモノではなく再び田原のためのモノであった……。

『硬い』ことは良いことか』 急

洪水、戦争、封印。かつてロッサを襲つたと考えられる史実。迫害、忘却、使命。現在彼女が向きあわねばならない事実。現実とは非情なモノで、一難去つてまた一難とはまさにこのこと。何故彼女は、この純粋無垢な愛すべき存在はこれほどまでに苦しまねばならないのか。喜々として御馳走をむさぼるロッサを見ながら、琉は考えていた。

「せめて、彼女が今笑顔でいられる場所がある」と。……それが救いつて奴か」

思わず琉の口から漏れた一言。それを聞いたロッサは、琉の方を向いて言った。

「どうしたの？ 何で難しい顔をしてるの？ せっかくの御馳走なんだからもつと食べよつよ！」

はいはい、そう言いながらも琉の顔には自然と笑顔が戻つていた。

「そうだね、ロッサちゃんの言つ通りだあ。このことはまた明日だねえ」

「ま、今は食べよつか！」

アルとゲオの表情もほころび、四人は改めて食事に手を付け始めた。

「それにしてもロッサちゃん、飲むねえ。1升あつた泡盛がもう空

になつちやつよー

ロッサは「」う見えてかなりの酒豪である。以前にもワインボトル（750ml）を一人で一本も空にしており、今回も琉達が話している間に次々と泡盛を飲んではおかわりしていたのだ。具体的には琉達が三杯飲む間に彼女は何と九杯も飲んでいた。

「仕方ない、ビール開けようか」

ゲオが冷蔵庫からビール瓶（小瓶）を取り出した。栓抜きを掛けるとたちまちプシューと豪快な音がする。

「これ、何？」

「ビール。ソディアの酒でね、こここの料理によく合つんだ。……しかしロッサ、本当に大丈夫かい？ というか、今日は泡盛だけで終わらす予定だつたんだが……」

因みにこの世界でビールと言つたら砂豆で作ったモノである。

「やつぱりソソリにはつちだな。キンキンに冷えてやがるぜッ！」

琉達の話題は棺のことから次第に食べ物のことへ移つていった。

「へえ、やつぱり今でも自炊してるんだあ！」

「んじゃあ、彼女にも御馳走しちやつたり？」

へへつ、と笑つた後、琉は言つた。

「もちろんに決まってるだろ？　むしろやんなきや漢じゃねえつての。実際彼女はよく食べるし、俺の料理を気に入ってくれたみたいだし！」

得意気に語りつつ、オオトカゲの身を頬張る琉。普通、この世界の探検家は料理人を雇つて任せるか、外食で弁当を買い込む人がほとんどである。そのため琉のよつたなタイプはかなり珍しいといえるだろう。するとゲオが言った。

「しかし琉ちゃんよ、これだけ食欲旺盛なのに何で彼女は筋肉つかねえんだ？」

確かにロッサは、いかにも女性らしいむっちりと丸みを帯びた体つきをしている。これがハルムに組みついて捕食するなんて考えられないほどに。

「筋肉？　十分付いてるだろ。でなきやこの胸はありえないぜ」

するとゲオはいきなり立ち上がり、ロッサに近づいた。いきなりのことに驚くロッサ。ゲオはロッサをじろじろと見始めた。

「ゲオ？　さては惚れたな？」

「冗談を言いつつ酒を飲む琉。しかしゲオは、琉とロッサには想像のつかなかつたある行動に出たのである。彼はスッと彼女に手をのばし、そして

むにゅうつ

「……え、何？」

何と、大胆にも彼女の胸を片手で掴んだのである。キヨトンとするロッサ。それを見た琉は思わず酒を口から吹き出し、たじろぎながら「」と叫んだ。

「おい馬鹿やめる、つか何やつてんだ！　俺でもまだ触つてねえんだぞ！」

顔を真っ赤にして、あたふたする琉。半ばパニックに陥つてゐる彼にゲオは言った。

「なあ琉ちゃん、おめえこんなにぶよぶよとした胸が好きなの？　これじゃあただの脂身じやねーか」

説明せねばなるまい。トヴェルクという種族には、男女ともに鍛え上げられた筋肉隆々の肉体こそが至高という価値観がある。そのためヒトやアルヴァンからすれば魔性ともいえるロッサの体はむしろ“テブ”の範疇に入り、あまり好まれるモノとはいえないのだ。

「あいや残念、胸筋じやなかつたの？　だつたらもつとカチカチにならなくちゃあ」

またもや解説せねばなるまい。ディアマンという種族の価値観は鱗と筋肉で出来たカツチリした肉体こそが美しいというモノで、トヴェルクのそれとかなり似通つてゐる。因みにヒトとアルヴァンと同じように、トヴェルクとディアマンの間にも同様に混血が生まれるという特徴がある。

「あのなあ、俺達からすりやあこれくらいが良いんだよ！……つてロッサ、どうしたんだ？」

ロッサは飲むのも食べるのもやめて自分の胸を触っていた。びつやつやつわのことを真に受けてしまつたようである。

「ねえ、琉……」

ロッサは琉の手を掴んで言つた。

「「クク……な、何だねロッサ……」

妙な緊張感を覚える琉。すると何を考えたか、ロッサは自分の胸を琉の手に触らせたのである……。

「ひや、ひやあつ……？…………つてあれ？ 硬い…………？」

何といつてだらづ。ロッサの胸はあのふくらした魅惑的なモノではなく、琉やゲオ達と同じ硬くてツルツとしたモノに変わつていたのである。

「ねえ、どうかな？ 硬い方が良い？」

「何、硬くなつただと……？ ちゅうと琉ぢやんぢいと……」

茫然とする琉をどかし、ゲオがロッサの胸を撫でた。

「ヒューッ！ 見ろよ彼女の胸筋を、まるでハガネみてえだ……！」

「ええ、変わつたの！？ やつぱり女も筋肉だよねえ」

驚愕と感心の混ざつたゲオの顔。その様子を見ながら放つロッサ

のドヤ顔。一方、一人酒を飲みつつゲンナリ顔の琉はこう言った。

「ロッサ、一々皆さんに好かれようとしてなくて良いから……。少なくとも俺は柔らかい方が良かつたぜ」

するとロッサはまたも琉の腕を掴むと、やはり自分の胸を触りせた。

「アーリーリーリーのむかつと、かつむかのうとしたこの柔らかい手
触り……って、ええっ!?」

琉はハタと気付いた。さつきから自分らがやつていい」と、それは……。

「あわわわわわー！　ひ、ひ、ひとロッサ、せつきから匂やつて
んのちよ、おい、て、てか俺をつきから、胸、ロッサの触つちま
つてるー。おうおうおうー。」

「琉、何急に慌てるの？」
ワケが分からぬよ

頬を赤らめ、意味不明なことを次々に口走る琉。元々照れ屋でシヤイな性格だった彼に、これは少々刺激が強すぎたようである。

「む、胸、ロッサの胸……ブパアツ！！」

最終的に琉は大量の鼻血を出して引っくり返ってしまった。ロッサの胸を触ったその手は、卒倒してもなおビクン、ビクンと動いていた。

「ロッサだつけ？ あんまり人に自分の胸を触らせちゃ いけないよ。

中には「いつなひちやう奴もいるからね」

「特に琉ちゃんは本当はず『』へシャイなんだよ。だからオイラ達と違つて未だに独身なんだよお」

琉の顔を心配そうに覗き込むロッサ。と、こんなワケで琉の初めてのラックースケベは血みどろな結果に終わったのであった。

『硬い』とは良いことか 急(後書き)

琉ちゃん、ついに鼻血吹き出しちゃいました。では、次回予告です。

「次回予告」

「残念ながら」については“生きて”もらは受けられんぜー。」

「琉、待つてー！」

「前回までのあらすじ」

琉ちゃんはある時海底遺跡でロッサちゃんを見つけました。でも彼女、なんと記憶が一切ないの！だから琉ちゃんは彼女の記憶のためにあちこちの遺跡を回る決意をしたワケ。それでオイラ達『ディアマンの住むアルカリアのソディア島までやつてきました。そこで以前に彼から送られた棺を調べて分かつたことを教えてあげたよ。あれは「コールドスリープ」装置で、ロッサは約三千年前に封印されたみたい。その時期は大きな戦争と洪水があつたんだよねえ。だとしたらロッサはそれから逃れるために？でもまだ分からぬことが一杯あるよお！

『必殺海底仕事人』序

あの飲み会の翌朝。琉はカレッタ号にて準備をしていた。

「やつと俺の日常が戻ってきたぜ。さてロッサ、今日やることだが……」

海図を出し、琉はロッサに説明を始めた。

「今いるのが――。――から――と30分でこの辺に点、エリアに着く」

相槌を打ちながら話を聞くロッサ。エリアの古代文字は解読されておらず、更に入り組んだ独特の地形が特徴である。そのため、ここはかつて大きな町だったのではないかと考えられているのだ。しかしその入り組んだ地形は数々の探検家の行方を阻んできた。

「一応ロッサには……留守番をしてもらおつかな。仮に何かあつたらその装置が鳴るようにしてある。あとは俺の言つ通りにすれば動くはずだ」

琉は準備を終えると舵を握った。発進するカレッタ号。天気は快晴で波もなく、探索にはもつてこいの海況である。海の水は青く、透き通っていた。

「エリア、座標確認。ダイバースイッチ・オン！」

琉の声と共に、舵の中心にあるスイッチが入る。甲板が装甲に覆われ、ロボットアニメを思わせる変形音を鳴らしながら船の形が変

わってゆく。

「すうじー、すうじーー！ 船が海の中に入つていぐーーー！」

ロッサを乗せて潜水するのは初めてのこと。話には聞いても体験まではしてなかつたロッサにとつて、これは忘れられない思い出となるだらう。

「今日はあまり来てないようだな。まあ、気楽だから良いか。アンカー・シユートー！」

水深約80m付近。掛け声とともにスイッチが押され、碇が放たれる。カレッタ号のライトが、遺跡全体の光景を照らしていた。15mはあらうかと思われる、四角い塔のようなモノが乱立した遺跡の地形。本来はもつと高かつたのだろうか、どれも途中で崩れたり倒れたり。多量の付着生物等によつて原形を留めていないが、これはかつて高い建物だつた推測されている。その証拠に内部は空洞で、中から人骨が見つかるのである。しかし何のために大きな建物を建てたのかは依然謎のままである。

「ロッサ。ジャックによれば、君の“目”が見つかったのはこの辺らしい。何か、覚えてないかい？」

「外の風景を眺めるロッサ。しかし……

「駄目、何も思い出せない……」

「流石に、ここまで崩れたら分からぬいか……」

「つむぐロッサに琉は言った。琉はあの“大洪水”により壊滅

したとされており、それもかつての街の姿が分からぬほどに崩壊したのである。

「クラストアーム！」

琉はカレッタ号に備え付けられた装置、クラストアームを展開すると辺りのガレキを取り除き始めた。

「よし、これで入れるぞ！ ロッサ、ちょっと付いて来なさい」

琉はポケットから取り出したライセンスを舵の中心にあるスロットに差すと、背後にある重い扉が開いた。扉の向こうには小さな部屋がある。琉とロッサが中に入ると扉が閉じ、そのまま船底に向かって降りて行つた。エレベーターから出るとそこには巨大な装置と小さな個室があつた。

「ちょっと待つてくれ

（どう言つて、琉は個室に入つて行つた。扉を閉め、鍵のかかる音がする。）

（彼女にこの部屋を見せるのは初めてだな。さぞかし驚くだろうな（…よしあつたと着替えるか…ん？）

琉はある違和感に気が付いた。ここは着替え用の個室である。にも関わらず、何処からか視線を感じるのだ。

「ハハ、まさか…！？ じり、ロッサ！ 着替え覗きはやめなさい…！」

なんとロッサが、扉の上に手を掛けて覗き込んでいたのである。

「琉だつて以前お風呂覗いたじゃん。といひで、その食いこんでる布は一体何？」

「ああ、これ？ ふんどしだ……つて、早く降りなさい！ 全く……つてちょっと待て。この間のジャックと一緒にやつた奴、バレてたのか！？」

顔が真っ青になる琉。その一方で、覗かれるのも覗くのも平気なロッサ。彼女にはどうも“羞恥心”というモノがないらしい。

（落ち着け、今はそんなこと考えてる場合じゃないだろ！ 仕事だ、仕事！）

潜水作業で最も大切なことは“冷静でいること”である。非常に危険を伴う作業だからこそ常に心を落ち着かせ、ゆったりとした気持ちでいる必要があるのだ。興奮状態に陥るとガスの消費が激しくなり、最悪の場合は呼吸が出来なくなってしまう。

「お待たせ。じゃ早速、ラングアーマーお披露目だ」

ウエットスーツに着替えた琉は、備え付けられた装置に向かって背中を向けた。琉の背後には人型のシリエットが両手を広げたポーズで描かれている。その“手”的部分に、スイッチが一つずつ備え付けられていた。

「では、ちょっと離れて。ハアーッ……」

田を閉じ、交差した両手を伸ばしつつ呼吸を整える琉。

「ラングアーマー・セットアップ！」

掛け声とともに両手を広げ、拳で一つのスイッチを押す。すると琉の頭上に傘のような装置が現れ、スポットライトのように彼を照らした。そして琉の体は黒い霧状のモノに覆われてゆく。スイッチを押してわずか1秒。彼の体は漆黒の装甲に覆われた姿となつた。

「す、じ……」

思わずロツサの口から言葉がこぼれる。琉は口元の装備、マウスマウスを力ちつ、とはめ直した。すると独特的の起動音とともに、彼の装甲に紅い縁取りや模様が入つて発光する。

「これで装備完了だ。それじゃあ、行つてくるよ。操舵室で待つてくれ」

田の前の床が開き、琉はそつと海の中に飛び込んだ。床が閉じるのを見届けると、ロツサは操舵室に向かつた。

操舵室に行くと、窓の外に琉の姿があつた。アードラーに乗り、船の中に向かつて手を振つている。ロツサはそれに気付くと振り返した。琉はロツサが振り返すのを見ると、頭にある耳かヒレのよつな装置を触り始めた。するとロツサの近くから呼び出し音が響き始める。

「あー、あー、聞こえるかい？」

「聞こえるよー！」

琉は窓越しに頷いて見せた。

「良いかい、海中と船内での連絡はそいつで行つ。また鳴つたら出でくれ。それじゃ！」

琉はアードラーにしがみつき、そのまま遺跡に向かって行つたのだった。

『必殺海底仕事人』序（後書き）

今日はアルにあらすじを読んでもらいました。
なんか長いですww
そして今更ですがタイトルはネタですww

『必殺海底仕事人』 破（前書き）

ロッサの手掛かりを求め、遺跡に向かう琉。果たして彼を待ち受け
るモノとは？

カレッタ号のライトに照らされる遺跡の光景。所々穴のあいた建造物が、いくつも建ち並んでいる。琉達探検家はこれを“塔”と呼んでおり、探しモノは大抵ここにあることが多い。塔の外には所々クレーターがあり、ここにも戦火が及んだことが伺える。ロッサの“目”はここで発見された。だとしたら、ここで“目”を失う要因があつたはずであり、その要因は恐らく戦争か……と琉は考えた。

「ただ洪水があつただけなら、ここで“目”を失うとは考えにくい。恐らくここで攻撃を受けたんだろうな」

更に目を取り戻した途端に戻った記憶、“母になれ”という使命を帯びたのもここのはずである。琉はアードラーに乗り、更に探索を続けた。

「ガレキ多いな……。その上見る場所も多い。場所を絞ろつ……オセルスレーダー！」

琉の掛け声とともに、額にある三つの単眼を思わせる装置が紅く光かり始める。すると琉の視界にはそれまで見えなかつたモノが次々に映し出された。

オセルスレーダー。ラングアーマーの頭部に備え付けられた装置で、透明度の低い場所や隠れたハルムに備えるために使う。辺りを透視したり隠れたモノを探し出したりすることが出来、面積の広いエリアではかなりお世話になる機能である。

「あの辺りに何かが密集している……。よし、探しを入れるか」

琉は塔の一つに目を付けた。まだあまり探されていないのか、反応物が多い。

「よし、潜入だ！」

琉はアードラーを外に停めると、その尻尾にあたる部分からワイヤーを出し、それを持ったまま塔の中に入つて行つた。以前入ったエリアの時と違い、今回入る所は結構広い。水中拘束を防ぐため、塔の探索には命綱が必須である。琉はパルトネールの先端から光りを出し、辺りを照らしつつ進んで行つた。オセルスレーダーには透視能力はあるが、辺りを照らすことまでは出来ないためである。朽ち果てた建物。これは何のために建てられたのだろうか？ オセルスレーダーの映す宝を求める、琉は塔の内部を歩く。と、その時だつた。パルトネールから音が鳴り始めたのである。

「何、ハルムだと？ 何処にいる！？」

慎重に辺りを探り始める琉。オセルスレーダーにはハルムを発見する機能もあり、琉は額のリボルバーを回してその感度を上げていた。

「キシシシシ……」

独特の鳴き声が閉鎖された空間に響く。間違いない、ハルムは近くにいる！

「パルトネール・サー・ベル……」

剣に変形させたパルトネールを握り、琉は構えた。と、次の瞬間。琉の頭上から謎の粘液が襲いかかって来た。すぐに腰のスクリュー

を起動してかわした琉だが、粘液は壁に絡みついて溶かし始めた。

「チツ、よつにもよつてパントーダか！ こんな時に厄介な奴が出たぜ……」

毒づきながら上を見る琉。そこには、蜘蛛とカニを足して胴体を取りつたような外見の奇妙な生物。即ちハルムが張り付いていた。パントーダ。ラング装者にはある意味一番恐れられているハルムである。特定のエリアに待ち伏せ、自らのテリトリーに獲物が入り込むとそつと死角から忍び寄り、口から粘性の強い毒液を吐いて絡め取り、捕食してしまうという習性を持つ。毒液には溶解作用があり、絡め取られた獲物はその場で消化されてしまうというモノで、ラングアーマーでもこれをまともに浴びると危険である。しかし本当に恐れるべきは、コイツの毒液は塔の壁をも溶かしてしまつことにある。

「生かしておいたら崩壊する……止むを得ん！」

事実、このハルムのせいで探索していた場所が崩され、命を奪われた者もいる。パントーダは天井の割れ目から、ふわりと降りて来た。サーべルを構え、対峙する琉。毒液を吐かれる前に息の根を止め、消滅させねばならない。

壁をつたい、パントーダが琉にせまる。サーべルを構え、柄の先端をひねるとたちまち刀身は光をあびてゆく。迫りくるパントーダを睨んだまま、琉は言った。

「行くぜ……パルトヴァニッショ！」

毒液を吹き付けんと口を開くパントーダ。そこに尽かさず、琉は輝く刀身を刺し込んだ。刺したまま、パントーダを真上に投げ上げ

る琉。パントーダは刺された部分から光を放ちつつ消滅した。

「早く行こう、他にもいる可能性がある！」

自分自身に言い聞かせ、琉は塔の奥まで急いだ。一方、カレッタ号船内では……。

「わたしの田が、ここに……」

ロッサは窓から、外の様子を眺めていた。ライトに照らされ、数々の塔がそびえ立つ奇妙な光景。彼女にはそこはかとなく見覚えがあつた。しかしその瞬間だつた。

「ハツ！？ ここはどこ？ カレッタは？ 琉は？ ……さやあつ！？」

気が付けば見知らぬ光景。海中の船の中にいたはずが、いつの間にか陸上の、それも巨大な建物の建ち並ぶ光景にいた。そして何故だか、たくさんの人達がこちらに向かつて走つている。そしてロッサの目の前で、突如として爆発が起きた。

「ロッサ、大丈夫か！？」

ある男がロッサに手を差し伸べる。ボサボサした長い髪、無精髭を生やしており、ロッサの着ているモノとどことなく似た服を着ている。彼女は彼のことなど覚えていない、しかし何処かで会つたような、そんな感じがした。

「……にはまずい、早くしないと……！」

ロッサは男の肩を借り、そのまま走り始めた。途中で男が何度も話しかける。しかしロッサにはそれが何を言ってるのかよく分からなかつた。ただ突然の恐怖から逃れたいために、必死に走る他なかつた。やがて二人はある船にたどり着いた。

「ここまで来れば大丈夫だ、あとは安心出来る……。奴ら、こんな所に船を隠してるなどとは気が付かなかつたろうな……」

大勢の人々と共に船に乗り込んだロッサ。必死に走った反動か、彼女は船室に入つて椅子に座るとそのまま疲れて眠りこんでしまつた。

どれほど時間が経つたろうか。ロッサが次に目を覚ました時には元の、カレッタ号の船内にいた。

「今のは一体……。それに、さつきの男の人は、誰……？」

夢から覚めたような覚めてないような、妙な気分のロッサ。今のは何だつたのだろうか、そう思いつつロッサは改めて外の風景を眺めた。そびえ立つ塔、あれはかつてもっと高かつた。所々に開いたクレーター、あれは爆発によつて起きたモノだ。遺跡の光景を見るたびに、ロッサの脳裏には少しづつ先程の謎の光景がリンクしていつた。

「じゃあ、あれは……」

そう思つた矢先、突如呼び出し音が鳴り始めた！

「ロッサ、マズいことになつた！ 今から俺の言つ通りにしてくれ、良いな……うわあッ！？」

何かを言い終わらぬうちに、琉からの連絡が途絶えた。

「琉？ 琉ツ！？ 一体、何が……！？」

『必殺海底仕事人』 破（後書き）

さあ、久々にハルムが出て参りました。モチーフはウミグモ、実物は中々グロいですww

『必殺海底仕事人』 急（前書き）

カレッタ号に入った琉からの無線。しかし連絡は途中で途絶えた！？
一体何があったのだろうか！？

『必殺海底仕事人』 急

カレッタ号に走った水中無線。琉の言葉は何かを言いかけて突如として切れた。一体何があつたのか、話は十数分前に遡る。

「全く、ワイヤーにも汁掛けやがつて……。全く、いつものことだが遺跡に長居は無用だな。さつさと見つけ出して帰つちまおつ」

琉はワイヤーに着いた毒液を払うと、レーダーの反応する位置に急いだ。辺りを照らし、周りのモノには目もくれず、ひたすら宝の山を目指す琉。これを入手出来ればロッサの秘密が高確率で見つかるだけでなく、この後しばらく食い繋ぐことも可能である。

「ヒヒかッ！」

パルトネールは依然として反応を示している。それも無視して、琉はスクリューを使って突き進んだ。もはや歩いてなどいられない、宝の場所はもう近い。とうとう琉はレーダーの捉えていたモノを探し当てた。そこには数々の宝石や鉱石、更に当時の調度品と思われるモノが大量に置いてあつたのだ。

「ここには倉庫か何かだつたんかな？ 今までスルーされてたのが不思議なくらいだぜ。では、回収と参りますか……そつはいかないか」

琉はそう言つと背後に振り向いてサーベルの先端を突き付けた。そこには何十体ものパントーダがあり、その中に一体だけひと際大きな個体が混じっていた。普通のパントーダでも足を広げれば3m近くあるモノだが、この個体は実に12mほどの大きさである。

「なるほど、罠つてワケか。案外頭が良いんだな。残念ながら『イツは“生きて”もらひ受けんぜ！ アードラー！！』

琉はアードラーを呼んだ。たちまちパントーダ達の背後からアードラーが突進する。パントーダ達はアードラー目がけてその口を向けた。

「吐かせてたまるか！ アードラー・バックスティング！！」

アードラーの尾の付け根に付いた棘から、無数の針状の光線が放たれた。光線はパントーダ達に降り注ぎ、毒液を吐こうとした個体は次々に消滅していった。その隙に琉はアードラーを近くに寄せるとそのカバーを外し、琉はつかさず宝をいくつか詰め込んだ。そしてアードラーの光線を盾にしつつ、残りの大きなモノを窓の外に置いていたのである。

「さて、後は奴らを外まで誘導すれば……何ツ！？ しまった！…

何と回収している間に、琉はパントーダの群れに包囲されていたのである。どうやらこの外にも伏兵がいたらしい。パントーダ達は一斉に毒液を吹き始めた。咄嗟にアードラーを抱え、バックスティングで応戦する琉だったが時はすでに遅し。琉のいる階層の壁が、天井が、柱が溶けて崩れ始めたのである。

「止むを得ん、ロツサ、マズいことになつた！ 今から俺の言つ通りしてくれ、良いな……うわあツ！？」

ロツサに連絡を入れようとした琉に、巨大パントーダの吐く大量の毒液が襲いかかった。アードラーを使ってかわした琉であつたが、よりもよつて水中無線に使う装置に毒液が付着、溶かされてしま

つたのである。

「キシュシュシュシシシャアアアア！」

巨大パントーダの鳴き声が響く。たちまち無数のパントーダがハサミを振りかざして琉に襲いかかった。アードラーに乗り、あちこちに垂れ下がる毒液をかわしながら琉は応戦した。しかし斬れども突けども相手は無尽蔵に現れる。その上塔は今崩壊の危機。それでも助けが呼べない以上、こうする他はない。

「もう一発だけサービスだ、アードラー・バックスティング！！」

琉はアードラーにしがみ付き、その場で回転しながらバックスティングを放つた。塔を崩さず、複数の相手に決定打を与える技は現在これの他ない。辺りのパントーダを一掃したのを見るや否や、琉は巨大パントーダにバックスティングを放つた。三本の棘を一か所に向け、針状の光線は巨大な影に次々に飛んでゆく。やがて相手は脚を縮こめ、動かなくなつていった。

「やつたか！？」

しかし喜びもつかの間。塔の天井が遂に溶け崩れ、琉の頭上に降り注いだ。

「しまつた！！」

アードラーを外に向け、脱出を試みる琉。しかし脱出寸前に出口はガレキに塞がれた。崩れた衝撃で辺りの水が濁り、急激に視界が悪くなる。遂に琉は腹をくくり、そつと目を閉じた。通信が途絶えて助けを呼ぶこともままならず、ガラガラと崩れゆく塔と運命を共

にし、わずか25年といつ短い生涯を終えよつとしていた。

（カズ、ジャック、ゲオ、アル、そしてロッサ……。すまねえ、俺は一足先にあつちに行くぜ。）

塔の先端が、音を立てて深海の闇に沈んでゆく。突然の轟音に驚いてか、塔の内部にいた生物が次々に飛び出て来た。琉のいたフロアが、ガレキに包まれて消えてゆく。琉にはただ、死を待つ他なかつた……と、思われた。

「琉！ 琉ッ！！ しつかりして、琉！！」

聞き覚えのある声が琉の耳に入り、彼の体を何モノかが振り動かす。

「その声は……ロッサ？ ロッサなのか？ ……そつか、ここはあの世か……」

「何言つてゐる琉！ ここは海の中……」

「海ン中？ そうだよな。俺は塔と一緒に……つてえつー？」

やつと我に返つた琉。気が付けば、別の塔の先端で柔らかい誰かに抱かれている。目を開けば、そこには紅い目の美女がこちらの顔を覗き込んでいた。琉はガバッと起き上がりつて周りを見て、言つた。

「た、助かったのか？ ……ロッサー！？ 一体どうやつてここまで……てか、息は大丈夫か！？」

「わたしなら大丈夫。息ならちゃんと出来てるから。それにどうや

つて来たかつて言つと……」「

途絶えた連絡を受けたロッサ。琉に何かが起きている、そう確信した彼女だが、カレッタ号の操縦は彼女には出来ない。ではどうすれば良いか。途方に暮れた彼女はることを思いついたのである。

（そういうば、琉が飛び込んだ扉、あれを使えば……！）

すぐさまロッサはラング装置の部屋に向かった。飛び込んだ扉は閉じている。しかし、彼女にはどつてことのないモノだった。ロッサは自分の体を液化すると、わずかな隙間から入り込み、海中に出たのである。

（琉、待つて！）

ロッサは額の目を使って琉を探した。すると一つ崩れかけている塔の中に、大量のハルムと一人のヒトを見つけたのである。ロッサは再び体を液化すると、そのまま塔目がけて突き進んだ。途端に崩れだした塔。ロッサは夢中になり、塔の内部に入り込んで琉とアーダラーを抱え、素早く外に引っ張り出したのである。

「ロッサ……よみやつたな……」

満身創痍の琉。しかし喜ぶのはまだ早かつた。崩れた塔のフロアに向かい、無数のパントーダが集結していたのである。

「何だ、仇打ちにでも来たのか？」「

そう思った瞬間。塔のガレキの隙間から、あの毒液が吹き出て来たのである。毒液は塔どころか周りのパントーダ達にまで絡みつき、

瞬く間に溶かしていくではないか！

「共食いか……？」

周りを溶かした毒液が、再び塔の内部へと戻つてゆく。そして次の瞬間、塔のガレキをはじき飛ばしてあの巨大パントーダが現れたのである！ それも、先程の一倍近くの体格となつて。

「琉、気を付けて。あそこまで“融合”した奴は船をも溶かす力がある」

記憶が少し戻つたのか、ロッサは琉にそう忠告した。

「言われなくとも分かつてゐる……。しかし、塔の外なら存分に暴れられるな！！」

琉はアードラーに乗ると再び先程の塔に向かつた。体を液化し、その後を追うロッサ。

「生憎だつたな、塔の外なら遠慮はしないぜ。わつきのお返しをさせてもらおうか……パルトネール・チュイン！」

琉はパルトネールをチエインに変え、分銅を放つた。一方ロッサも狩りの腕を構え、指先を引き延ばして鞭のように叩きつけた。毒液を吐くパントーダ。しかし広大なフィールドを手にした今の琉にそんなモノは通じない。一方ロッサは体を液化させ、果敢にも毒液の中に突つ込み、口の中に突撃した。

「ロッサ！？ 大丈夫か！？」

しかし次の瞬間、ロッサはパントーダの胸を突き破つて現れた。見た所体に別条はなさそうである。一方のパントーダは胸をやられ、悶え苦しんでいるようにも見えた。

「大丈夫、元々溶けてるようなモノだから。しかしあそこまでされると流石に硬すぎて食べられない……」

「……そうか。よし、だつたら後は俺に任せてくれ。奥の手を見せやる」

琉はアードラーに乗つたままパントーダに近づいた。アードラーの上に立ち、琉は手を額の上に掲げて構えた。

「オセルスフラッシュヤー！」

掛け声とともに手を下げる、琉の額に付いた单眼と全身の模様が紅く発光し始めた。琉の視界にはロックオンマークが映り、その標的を相手の胸に合わせた琉は再び叫んだ。

「発射ア――――ツ――！」

琉の叫びが海底に響く。次の瞬間、彼の单眼から紅い光線が放たれ、パントーダの体を貫いた。パントーダの巨大な体格は光線によって飛ばされ、塔の上から海底の闇の彼方へと墮ちていき、一度と上がつてくることはなかった。

「ハア、ハア、ハア……」

肩で息をする琉。残り時間もうわずか。二人はカレッタ号に戻ると海面まで浮上し、こうして長い2時間は終わりを告げたのであつ

た。

『必殺海底仕事人』 急（後書き）

今回は久々に「水中戦」と「遺跡探検」を書きました。いや、本来はこちらをメインにしたいのですが……。さて、予告です。

（次回予告）

「一体何者だつたんだ？」

「これ……ワイン？」

「前回までのあらすじ」

俺はある時、遺跡で女を見つけた。名前をロッサといつ。彼女は記憶を失くしていた。そこで俺はあちこち回つて調べることにして、手掛かりを求めてアルカリアまでやって来た。そして海底遺跡エリアに挑んだんだけど、そこで久々にハルム、それもよりもよつてタチの悪いパントーダに襲われちまた。危ないとこひをロッサに助けてもらい、無事に浮上することが出来たのだが……。

アルカリア領海、ソディア島沖。何とか浮上に成功した琉はラングアーマーの点検を行つていた。ラング装置にPCを繋ぎ、キーを打つ。琉の目の先にはメッセージが表示された。

『アクアイヤーに損傷あり。修復します』

アクアイヤーとは、ラングアーマーのパーツの一つで船との通信に使う装置のことである。頭部に着いた耳かヒレのようなモノで、琉のモノは縁の紅い三日月型をしているという特徴がある。カレッタ号との通信が出来なくなつたのは、この装置を毒液で溶かされたのが原因であった。

『粒子化装置を起動します。原料を挿入して下さい』

海底遺跡から発掘されたロストテクノロジーのうち、最大の発見とされているのが物質の粒子化技術と流体化技術である。特殊な装置と人工触媒を用いて物質の形を自在に変え、制作や収納、変形が自在に出来るようになったのだ。ラング装置には一定量の粒子化した原料がタンクの内部に入っている。ライセンスに書き込まれた情報をもとにして形状化し、その人専用の使用に自在に姿を変えることが可能となつてているのだ。そしてもし今回のように損傷した場合、必要に応じてそこに必要な原料を注ぎ足すことで容易に修復することができるのである。

「ロッサ。悪い、その『イヤー』と書かれた引き出しから、瓶を持つてきてくれないか?」

ロッサは琉に言われた通りに引き出しを開けた。中にはワインボトルが数本入つており、ラベルには『飲むなよ！ 絶対に飲むなよ！』と書いてあった。

「これ……ワイン？」

「ワインボトルの使いまわしだ。中身はむしろ同じ量のワインより高いな……飲めないんだけど。つか飲んだら不味いだろうな、多分」

「冗談を言いつつ、琉は瓶を開けると装置に注いだ。

『燃料残り30%です。補充して下さい』

修復が終わると今度は燃料である。先程の戦闘で大量に消耗しているので、今回は多めに注ぐ必要があった。

「ロッサ、こいつに一杯水を汲んできてくれ」

琉は装置から筒状のモノを出してロッサに渡した。ロッサが戻ってくると、琉は水の中に白い粉を入れた。粉は一瞬にして水に溶け、跡形もなくなつた。

「琉、これもしかして……」

「あの時の水に入つてた奴さ。これが正しい使い方だぜ」

琉は容器に蓋をすると、再び装置に入れた。

『メンテナンス完了』

画面に映った文字。ラングアーマーは再び使える状態となつた。作業の後にはメンテナンス、ラング装者の常識である。

「さて、腹も減つたし飯にするか！」

修理を終えた二人は食堂に向かつた。単純計算で、水中での運動量は同じ時間の陸における運動量の約2倍となる。ましてやあんなにも激しい運動をした二人は当然空腹となつていた。

「作業の後は豪快な、ガツンとしたモノが食いたくなるんだよね」

琉は冷蔵庫から骨付き肉を取り出すと、オープンにそのまま入れてスイッチを入れた。この肉は保存用に特殊なタレに漬け込んだモノである。タレは琉の手作りで、各種香辛料を彼自身の好みで混ぜ合わせて出来ている。保存が利くだけでなく既に味が付いているので、疲れきった作業後でもオープンに入れて焼くだけで手ごろに食べられるという利点がある。更に使用されている香辛料が、肉の臭みを消すだけでなく疲労回復等の様々な薬効を発揮する優れモノもあるのだ。

「よし、焼き上りだ！」

オープンを開けるとたちまち香ばしい匂いが食堂に広がった。見事に焼き上がつた肉に、琉は豪快にかぶりついた。ロッサはそれを見ると、琉と同じように骨を掴んで肉に噛み付いた。

「どうかな？ 焼いただけなんだが。……せめて切りやあ良かつたかな」

琉の言つことは耳もくれず、ロッサは肉に噛み付いたまま離れな

かつた。噛み付きながらもその目はルビーのように輝いていた。相当気に入つたらしい。

「ま、表情に出てるから良いか……ん？」

琉はあることに気が付いた。ロッサは肉に噛み付いたまま引き千切らない。よく見ると、彼女の白い指が骨の溝に突き刺さっていた。巨大な塊だった肉は見る見るうちにしぶんでき、最終的には骨すらもボロボロと崩れてしまった。

「はわ～、おいしかった～！ 特に骨が」

「は、ははは……。そうか、それは良かつたぜ……」

骨付き肉を、文字通り骨の髓まで堪能したロッサ。彼女の意外な好物と驚愕の食事法に、琉はひきつった表情のまま笑っていたのであった。しかし琉にはある光景がフラッシュバックされていた。エリアにおいて、オドベルスを捕食した際のあのやり方に、今の食事法がそっくりだったのである。

「い、一体どうやって骨まで食つたのかな～？」

「指先で溶かして吸つた。そのままだと噛めないから」

ロッサは、その尖った指先から自分の体の一部を流し込み、溶かして同化してしまった。以前オドベルスと戦った時も指先を相手の体に突き刺し、溶けたオドベルスの肉や骨を首筋から吸いとつっていたのだ。現実世界における、タガメやクモのようなモノだと考えていただければ分かりやすいと思われる。

（ロッサの好物は肉よりも骨か。覚えておかないとな。しかしどうにも恐ろしい食い方だぜ。まさしく獣的な彼女つて奴か……）

肉をかじりつつ、琉は思っていた。一方でロッサは琉の持つている肉を、いやその骨をじーっと見ていた。琉は肉を食べ終わると、ロッサに聞いた。

「俺、骨までは食えないんだ。よかつたらいつだい？」

「え、良いの？　じゃあ早速……」

骨をもじりつてもしゃぶりつくロッサ。彼女の指が骨の溝に刺され、真っ赤なその唇に触れた途端に骨はたちまちボロボロになり、砂のように崩れてしまった。

「じゃあ、皿は洗つとくよ。……こんなに喜ぶんだったら今度からは多めに作つておくかな。ロッサ、港に戻つたら拾つたモノをチックするわ。ひょっとしたら何か思い出すモノがあるかもな」

そう言つて琉は皿を受け取つた。ロッサの皿には吸い取されて原形をとどめていない骨がこじんまりと置かれている。いや、もはや骨とも言つて難かった。

（まあ、骨の処理が楽になつたと考へれば良いか。別に俺が吸われるワケじゃないしな）

『ロマンスを止め』序（後書き）

前回のあらすじを読んでいるのは……そう、あの人です。しかし今回、ロッサのちょっと怖い部分が判明しましたねw

『叶(あや)に愛(めぐ)む』 破(あわ)れ(前書き)

『ラングアーマーの修理。ロッサの戦慄の食事。その後は……』

『古よつ愛を』めで 破

戦慄の食事の後、カレッタ号は港に戻った。一人はアードラーを甲板に上げ、船内に運んでいた。

「琉、これを何処に持つてくの?」

「作業室だ。君が目を覚ました部屋だよ」

一人は部屋に着くとアードラーのカバーを開け、中から大量の宝を取り出した。

「す、い、こんなに落ちたの?」

「ふむ、おや、ほんとんどが当時の装飾品だね。テクノロジーには応用することは出来ないが金にはなる。これでまたしばらく食つていけるぜ。しかしこのままじゃ売ることは出来ん、磨かないとな」

そういって琉はブラシを一本取り出し、ロッサに一本手渡した。そして宝の一つを手に取ると、

「良じかい、付着物をこいつで……こいつやって取り除くんだ。時々こいつやって真水で洗いながらね。……ほりー。」

琉は少し磨いたその宝を見せた。磨かれた部分が鮮やかな青色となっている。

「こいつは立派なサファイアだ。他にもあるかもしけんな。これでちょっとでも当時の事を思い出してくれば……まあ良い。何かあ

つたら呼んでくれ

「これだけ言うと琉は、再び作業に取り掛かった。ロッサも彼と同じように、ブランを持って見よう見まねで作業に取り掛かる。一人の顔は真剣そのものだった。

（お、やつてゐやつてゐ。）（すすれば記憶戻しになる上に作業の効率化、即ち金儲けにもつながるつて寸法だぜ。やつぱ一人分稼ぐにはそれなりのことをしてもらわないとな……）

黙々と作業を続ける一人。やがて付着物だらけの宝物は、どれもピカピカの装飾品へと変わつて行つた。残り少なくなつた時、ロッサは琉に言つた。

「琉、これ上手く出来ない。代わりにやつてほしい」

ロッサがそう言つて持つてきたのはひも状の何かだつた。確かにこれを磨くのは初心者には難しい。

「よし分かつた。じゃあ代わりにこいつを頼むよ。なるべく自分でも出来そうな奴を選ぶようにね」

琉はそれを受け取り、代わりに自分の磨いていた石を渡すと早速作業に取り掛かつた。ところどころ鎧でボロボロにはなつていたが、ものの数分で付着物だらけの紐は見事な形のペンダントに姿を変えた。

「ほお、こいつは中々上手いこと残つたペンダントだね。……ん？」

琉はペンダントの先が開きかけているのに気が付いた。しかし付

着物と鎧が邪魔で上手く開かない。そこで琉は更に磨きをかけ、鎧を薬品で落として見事にこじ開けた。

「……」眞か何かを収められたんだな……んな！？

琉は驚愕した。そしてロッサの方を向いた。それでもつてもつ一度ペンドントを見た。

「……」琉はすういモノを見つめてしまったようだ……ロッサ、ちょっとじつわく……

「え、何か面白このあつたの？」

「面白にも何ものペンドント見てくれ、ここつをビハツフ……？」

ロッサは作業を中断すると、琉の方に歩いて来た。そして彼に言われた通りにペンドントを見た。そこには何と髪の長い無精髭を生やした男と、ロッサにせつくりな顔の女性が写っているではないか！

「あ、く……そ、く……」

「……か君じゃないのか？ ここつか、この男に見覚えは……？」

琉は半ば興奮状態にあつた。追い求める眞実にまた一步、近付きつつあるからである。一方のロッサはペンドントに写った男を凝視した。

「……」人、知らな……！？

ロッサの脳裏にある光景が鮮明によみがえった。炎の上がる街、崩れゆく建物、怒号や悲鳴の中で逃げまどい人々。そんな中自分の手を引いて走る謎の男、海中で突如広がったあの光景に出て来たあの男に、この写真の人はまさしく瓜一つだったのだ。

「手を引いてくれてた……」

「な、何だつて!? 覚えているのか、いや思い出したのか!? ちょっと詳しく聞かせてくれないかい?」

ロッサは琉に話を始めた。琉が潜水中に突如目の前に広がった光景。目の前で上がった炎、その後自分に話しかけて手を引き、街中を駆け抜けた謎の男。ロッサは出来る限りあの時の様子を琉に話して聞かせた。

「なるほど、フラッシュバックって奴か……。するとこの男が君を戦火の中から助け出したと言うのかい?」

「うん、この人だつた。でも、誰なんだろう……?」

「ペンドントと一緒に写つてる辺り、恐らくいつも一緒にいた人だろ? な。そういえばロッサ。確か以前に、昔も空を飛び回っていたと言つてなかつたか?」

ロッサはうなずいた。琉はペンドントの写真を見つつ、少し考えるとロッサに言つた。

「彼と一緒に、飛び回つた覚えはないかい?」

「『』めん、思い出せない……。覚えてるのはただ、彼に手を引かれ

て街を出たくらいで……』

「分かった、もう良い。ついで記憶を蒸し返してすまなかつた。……作業を、続けよつか

二人は作業を再開した。モノを磨きつつ、琉は考えていた。

(この男が何者か、また新しく謎が増えたな……。しかしここの戦に巻きこまれたのなら、やはりここで“目”を失つたと考えて差し支えないだろうな……ん?)

琉はふと、ペンドントの裏側に文字が入つてることに気が付いた。そのうちの一に行に、琉は見覚えがあつたのだ。しかしここはエリア、使用されている文字は違うはずである。何故なら、海底遺跡のエリア区分は文字の種類によって分けられているからである。

琉は携帯電話を取り出すと、以前に登録した古代文字の表を出した。琉は解読した古代文字を携帯電話にも移し、見やすくしているのである。

「たしかここに……あつた。下の方だな……『ロッサ・ヴァリアブル』……！」

何という偶然か。何とペンドントに刻まれた文字はエリアのモノだったのである。だとすればロッサの出身はエリア、場合によつてはこの男の出身もエリアの可能性が考えられるのである。

「翻訳機にかけてみるか。ロッサ、ちょっと席を外すぜ」

琉は部屋から出ると操舵室からPCを持って現れ、部屋にある装置に繋いで起動した。ペンドントを装置にかけ、琉のPCにはある装

文字が浮かび上がる。

「ねえねえ琉、それなあに？」

ロッサが気付き、PCを見に来た。

「これ？ 文字の翻訳機さ。こいつを使えば俺に分かる文字で出来るんだ。何せ、ちよつとペンドントの文字に見覚えがあつたさ……」

そう言つて琉はPCの画面を見た。だが……

『ロッサ・ヴァリアブル』

画面にはロッサの名前だけが映つていた。肝心な男の名前までは出でじが出来ず、琉はがつくりと肩を落としていた。

「やはり、そう単純な話なワケないよな……」

「ちよつと見せて」

そう言われ、琉はロッサにペンドントを渡した。ロッサの燃えるように赤い目が、ペンドントの文字をじつと見据えてくる。

「分かるかい？」

琉はロッサに聞いた。するとロッサはペンドントの文字を指差し、琉に見せながら言つた。

「『愛する者とともに』。リベル・ドライバーとロッサ・ヴァリア

ブル『って書いてある』

『叶(かみ)に戀(こい)を以(むか)へ』 破(後書き)(あく書き)

ロッサのまつわるサノを発見! そしてこの男の正体は?

『呑み屋の愛を』にて　急（前書き）

拾い集めた宝。その中についたペンダント。その中にはロッサと、もう一人謎の男が写っていた……。

またかの展開に驚愕する琉。しかし同時にあることを思い出した。彼女の能力の一つ、あらゆる言語を読みとる力である。ロッサは復活してもすぐにも関わらず今の時代の書物を読むことが出来た。ましてや自分のいた時代の古代文字が読めないはずがない。

「すると男の名はリベール……。一体何者だったんだ？」

リベール・ドリーニア。このペンダントの『真から見る限り、短髪で童顔の琉とは対照的に、髪がボサボサと長く無精髭を生やしたむさ苦しい男である。ロッサの話では、彼女のドレスと似たような服を着ていたらしい。

「そいつは恐らくこの辺の民族衣装だぜ。何せ暑いからな」

一人はこの後も作業を続けた。モノを拾い、ひたすら磨いて当時の姿に出来るだけ戻す。作業開始からトータルして約3時間が経ち、結局ロッサの記憶のヒントとなつたのは先程のペンダントだけであった。

「明日、もう一回 行こう。ある程度思い出した所で見に行けば何か分かるかもしないしな。……ところでペンダント、ボロボロだね。せっかくだし、修理してもらつかい？」

琉の提案で、ロッサはペンドントを修理してもらつこととなつた。早速一人は船を降りると、アードラーを呼び出して街に向かつた。発掘した宝石を売り払い、大金に代えると琉達はあの裏通りに走つて行つた。

「「」いつの修理ねえ。分かつた、早速やつとくよお。ビーフせなら見て行くう？」

アルはペンドントを受け取ると、早速その手と目で意識を集中させた。これはディアマンの技術で、モノに含まれる鉱物の成分を調べるという技術である。本人いわく、「舐めたらもつと手つ取り早い」そうだが。

「ふむ、分かつたよ。じゃあ早速やつてみようか。ゲオちゃん、鎖の方お願ーい」

アルの手によりペンドントの鋲が落とされ、更に輝きを増してゆく。そしてゲオがボロボロになつた鎖を外して装置に入れ、流体化するとアルの書いたメモ書きを元に原料を注ぎ込んだ。スイッチを起動すると鎖の型の中に金属は注がれ、瞬く間に固まってゆく。遂にペンドントは新品同様の姿に生まれ変わったのであつた。

「はい、これで完成！ ロッサちゃん、早速着けてみなよ

ゲオに渡され、ロッサはペンドントを首に着けた。銀のペンドントが、彼女の美しい胸元を演出している。

「うーん、もう少し筋肉があればなあ……」

「ペンドントはやっぱリハガネのような胸板に合つねえ

「いやいや、このままの方が良いッ！」

種族の価値観の違いは置いておくとして、話はロッサのこととな

つた。

「オイラ達にも一回詳しく述べてはくれないかい？ 力になりたいからさあ」

「」ないだは酒が回つてたせいかよく覚えてない。たのもよ

アルとゲオの一人に頼まれ、琉とロッサは話すことにしてた。

「まず今分かつてることなんだが、彼女は元々エリアの出身らしいことだ。それが何らかの理由でエリアにいた。そして彼女には、いつも一緒に行動していたと思われる男……ロッサ、ペンダント貸してくれ

琉はロッサにペンダントを借りると携帯電話で挟まれた[写真を撮り、確認だけするとロッサに返した。

「」の男、名前はリベール・ドラゴンアツト言つりじいな

アルとゲオはまじまじと携帯電話を覗き込んだ。

「琉ちゃん、何で名前が分かつたの？ ってまだ解読終わってないよー！」

「わたしが読んだ。字が書いてあれば分かるから

ぽかんとする一人。琉はそつと補足した。

「一人とも、彼女は“文字”さえ書いてあれば表面上の意味を読みとれこじが出来るんだ。だから今の字でもきつちり読めたりする

「琉ちゃん、それ凄いことだぞ。彼女さえいれば、ロステク全部復活出来るじゃねえか……」

ゲオが田を輝かせて話に食いついた。しかし琉は首を横に振る。

「よく考えろゲオ。どうやってその解読が合つてると証明するんだい？ 具体的な解読方法を示さないと認めてもらえないぜ。……ただ、ヒントにはなるな。さて続きだ。彼女はそのエリア での大戦争に巻きこまれた。そしてその際に、“第二の田”を失つたと考えられる」

「攻撃を受けた、といつことか。すると相当弱つてたと考えて良いねえ」

「そしてその後脱出して、何処へ向かったのかといつことか。恐らく、エリア に直行した可能性が高いな……」

琉の調べた結果に、アルとゲオの推測が答える。一方ロッサはペンドントの奥にいるリベルの顔を見つめていた。

（リベル……一体誰なの？ どうしてわたしと一緒にいたのか教えて、教えてよリベル……）

しかしいくら問つてもリベルは答えない。彼は三千年も前の人間、すでにこの世にはいないのだ。

「ねえ琉ちゃん、例の“使命”って一体誰が言つたんだろうねえ？ 少なくとも“田”を失つ前だよねえ。でも何でわざわざ……」

アルが琉に聞いた。ロッサには、“母になる”といいう使命がある。しかし誰が言つたのかは定かではないし、そもそも繁殖そのものをわざわざ“使命”とするのはおかしいだろ、アルはそう考えたのである。

「そこは流石に分からん。そのためには彼女の種族、“ヴァリアブル” 자체を調べる必要があるからな……」

謎が謎呼ぶロッサの過去。本人すらも計り知れないこの謎を解き明かすのは容易なことではない。しかし解き明かさねば、彼女は使命を果たせなくなる可能性がある。

「これは俺の推測なのだが……ひょっとしたら彼女の他にもう一人ヴァリアブルがいる可能性があるんじゃないかと思つんだ。それも“男”的だ」

「男のヴァリアブル?」

アルとゲオは同時に声を発した。

「そうだ。つまり彼女は生き残り、もう一人男の生き残りがいてこちらが“父になれ”という使命を帯びている、とすれば……」

「それ何か昨日言つた気がするよお、何となくだけ……。しかし普通に考えればそれしか思いつかないねえ」

「琉ちゃん、しばりくは棺桶探しだな。しかし何かヒントはないものか……」

男三人は黙り込んだ。必死に思い出そうとするロッサだが、これ

以上の記憶が出てこない。ペンドントを握つたまま考へるロッサに、琉が話しかけた。

「ロッサ、明日もう一度エリアに行こう。そんでカレッタ号でじつくりと全体を回つてみようか。また何か、思い出すかもしない。アル、ゲオ、今日は有難う。今日はもうこれで失礼するよ。また明日、調査が終わつたらここに来るから」

琉はやつとて、工房を出てアーデラーに跨つた。

「気を付けてねえー！」

「こつちも何か分かつたら連絡するぜー！」

工房で手を振る一人。コツい見た田でも気さくな性格である。アーデラーで風を受けつつ、琉はロッサに言つた。

「そう気を落とすなつて。じつへりとな、じつへり

ものの数分で一人はカレッタ号にたどり着いた。

「よし、チヨインジ・マコンアーデラー！……さて、明日は7時出発だが……」

琉はアーデラーを船底に戻すと甲板から階段を展開させ、ロッサと一緒に昇りつつ言つた。しかしロッサの顔はシリアスな面持ちのままである。

「……ロッサ、難しい顔はよせ。どうにも思い出せないのを無理に思いだそうとしてもくたびれるだけだぜ。……ああ、飯だ飯だー！」

「……うん、そうだよね。飯だ飯だ～！」

ロツサの顔に笑顔が戻る。難しいことはまた明日、今日はひとまず腹ごしらえ。そう考えて、二人は階段を駆け上がって行つたのであつた。

『叶ひつ愛を』めで『急(後書き)

謎の男リーベル。彼は何故ロッサと一緒にいたのか。
謎が謎呼ぶ物語、第五章に期待下さい。

次回予告

「くつ、何だこいつらはーー?」

「嘘……誰も乗っていない!?」

『史実は見えるか』序（前書き）

（前回までのあらすじ）

海底遺跡で発見された謎の美女、ロツサ。彼女を発見した男、琉。二人は手掛かりを求めてエリアに挑んだ。途中でハルム（化けモノの意）に襲われながらも発掘に成功した琉。そしてその宝の中にあつたペンダントの中に、ロツサにかかる重要な秘密が含まれていた。果たして画像の男、“リベール”とは何者なのだろうか！？

『史実は見えるか』序

「ふむ、それほどまでにあの男が憎いか」

薄暗い部屋の中、フードの付いたローブを羽織った男が一人の女に話しかける。

「はい。奴は、あの彩田琉之助という男は悪魔に魂を売り、私の父を社会的に葬りました。何故あの男が無罪で父が牢獄に入れられるのか、私には理解できぬのです」

アヤメと呼ばれた女は淡々と、かつ激しい怒りを込めた口調で答えた。

「そうか。ところでコイツを見てほしい」

男はモニターを指差して言った。モニターには港の風景が映し出される。大きな船が停まっており、そこに丁度バイクに跨った男女が現れた。バイクから降りると

男はヘルメットを外して座席に仕舞い、女はヘルメットがぼぐれて見る見るうちに髪に変わつていった。その顔を見た瞬間、アヤメは目を見開いて思わず声が出た。

「こいつは……！」

「つむ、奴らの近くに隠しカメラを用意しておいた。これで場所が分かるだろう？更に船には発信機を取り付けてある」

男がそう言つて、モニターの中で琉は棒状のモノを取り出した。

『よし、チヨインジ・マリンアードラー！ 戻れ！……よし、
収納完了。ステアオープン！……よし来たぞ、と。……さて、明
日は7時に出発だが……』

琉とロッサは階段を昇つて行き、やがてモニターには映らなくな
つた。それを見とどけると男はアヤメに向かつて言つた。

「今聞いたな？ 奴らは7時にここを出発する。そこで、だ。ここ
で我々が開発したあの武器を試用したいと考えている。その役割を、
お前に任せようと思うのだがどうだらうか？」

「新たな武器……もしや例の“アレ”ですか？」

「そうだ。その使用権をお前に与えよう。船も用意した。今日は明
日に備えて休むが良い……。では、メンシヒの神の名のもとに」

「メンシヒの神の、名のもとに」

アヤメは一礼すると部屋から出て行つた。

「出て行つたか。よし入れ」

男はまた別の人物を呼んだ。するとアヤメが出た扉とは別の扉か
ら数人の男が現れて一礼した。

「例の武器はあの娘に任せることにした。そなた達はその間に“聖
戦”の準備を済ませておくよ。決行は明日の夕方だ、良いな？」

「ハツ！ メンシHの神の、名のもと……！」

男達は部屋から出て行った。

「もうすぐだ、待つておれ。囚われの同志達よ……！ メンシHの神の、名のもと！」

（翌朝）

「ロッサ、今日は早起きだな」

操舵室。琉がモーニングコールを掛ける前に、ロッサは起床していた。

「まあ、早起きなのは良いことだ。早速飯にしよう！」

食堂で、早速琉の料理が振舞われる。卵を割って解き、その中にスライスした野菜と缶詰の肉を混ぜて焼く。味付けは缶詰の塩だけで十分だ。たちまち琉特性のオープンオムレツが出来上がる。

「今日の作業は早く終わる。だから帰港したらちよつと食料品の買出しに出てみたいと思つてこる。工房に行くのはその後だ」

琉は朝食を取りつつロッサに予定を話した。

「骨付き肉を多めに買おつか。ロッサ好きだろ？」

「え、良いのー？」

ロッサの赤い目が輝きだした。骨付き肉はもはや彼女の大好物で

ある。

「ああ。料理人として、自分の料理が『旨い』と言われるのは至高の喜びだからね。そういうえばあの時のメンバー、元気にしてるかな……」

「あの時のメンバー？」

「ああ、以前話さなかつたつけ？　俺は他の船でコックをしていたことがあつたんだ。……要するに料理人さ」

琉は語つた。彼は一度カレッタ号を大破させたことがあり、修理してゐる間他の船に乗つていたことがある。

「パントーダに派手に溶かされちまつてね。だから今でもあのハルムは勘弁だぜ」

仕事先を探す琉に、ある声がかかつた。かつてラング装者の訓練を共に受けた同級生に、うちの船で働くかないかと声がかかつたのだ。

「しかしその船、ラング装者枠はすでに埋まつていたんだ。だから何で呼んだか聞いたら『コックやつてくれ』だと。確かに俺は訓練時代からちょくちょく料理作つてたけどさ……」

半ば不満を覚えながらも、仕事を受けた琉。しかし琉の料理はその船の中でも好評で、琉はすっかり機嫌が直つてしまつたのである。同時に、彼は自分の料理を誰かに振舞うという喜びに目覚めたのであつた。

「まあ、父子家庭だつたからね。小さいころから料理は自分で作ることが多くつたからなあ。でも本格的に金貰つて振舞つたのはこれ

が初めてだつたね。だから色々作つて出したよ。……まあ、たまに失敗することもあつたけどね」

一応、琉は調理師免許を持つている。元々料理が趣味だつた彼だが、なんとなく受けたらあつさり通つてしまつたのだ。しかし人に本格的に振舞つたのはこの時が初めてだつたという。

「自分で言つのも何だけど、人の舌を意識したら以前より味が良くなつたよ。……まあ、それをしばらくの間自分一人で食べていたんだけどね」

そして琉がカレッタ号に戻つて五ヶ月後、彼はロッサと運命的な出会いを果たしたのである。

「やつぱ、船員がいるつて良いことだよなあ。正直な話、あの後しばらく一人で船に乗つてるのが辛かつたんだよ。そんな時に……まあ良い」

琉にとつてロッサは、一人で寂しい所に舞い降りた天使のような存在でもある。しかし彼には、このセリフの続きを流石に照れ臭すぎて言えなかつた。

「琉、どうしたの？ なんか、赤くなつてるよ？」

「気にはんな！ さてさて、食い終わつたら準備だ。……思えばあれから料理に対するこだわりが大きくなつたんだよなあ……」

若干早口になりつつも過去を回想する琉。食器を片づけ、上着の裾をビシッと決め直し、一人は操舵室に向かつた。

「昨日何度も話したが、今日はエリアを見て回る。ついでに取り上げましたモノをアームで回収する予定だ。それじゃあ……出航！！」

港を出るカレッタ号。亀の甲羅を模した柄の旗を屋根に掲げ、青い海面を切り裂いて、白波の軌跡を描いて船が行く。その姿を、港から見ている者がいた。

「あれがカレッタ号、あの船に奴らが……。ふふ、一度と浮き上がりようにしてあげる……！」

彼女は船に乗り込むと、すぐさまカレッタ号の後を追つたのであつた。

『史実は見えるか』序（後書き）

実習も試験も終わり、肩慣らしも済んだので久々に投稿致しました。
またボチボチと投稿していきますのでよろしくです。

『史実は見えるか』 破（前書き）

ロツサの記憶のため、再びエリア に挑む琉。しかし一人を待つて
いたのは思いもよらぬ展開であった。

『史実は見えるか』 破

ダイブモードに変形し、海中を進むカレッタ号。徐々に群青に染まりゆく光景に、眩いサーチライトの光が刺し込んでゆく。やがて光は、数々の“塔”がそびえ立つエリア。独特的の風景を映し出した。所々、塔や地面に空いたクレーターが、3000年前の大戦争の激しさを物語っている。ロッサは、ペンダントに写った男リベルの顔を見ながら、の景色を眺めた。

「あの道を、わたしとコベールは一緒に走って、そして……」

ロッサはそう言しながら、の端を見た。

「あの崩れた所……あそこに船があつて一緒に逃げた……」

「あの道、ねえ……。ちょっと、俺にも見せてくれないか」

舵を握ったまま、琉はロッサと一緒にになって窓の外を眺めていた。琉はロッサにペンダントを見せてもらいつつ、当時の光景を想像していた。女の手を引き、海を田指して走る男。男に手を引かれ、炎から逃れて走る女。今の推測では、このエリア という所は元々大きな街だったと考えられている。戦場と化した街。奪われた日常。迫りくる炎。琉の脳裏に浮かんだのはあまりにも悲惨な光景であった。

「ちょっと、あちこち回つてみるぜ。ついでに……」

琉は、ある大きく崩れた塔を見て言った。

「回収、するかな。ガレキはどかしておかないとな、クラストアーム！」

クラストアームを展開し、ガレキを取り除く。この塔は前日の戦いで大きく崩れた塔であり、まだ若干の宝が残っていた。琉の記憶では、この中に棺が混じっているはずである。

「たしかこの辺に……あつた」

琉はそれらしきモノを見つけると、クラストアームでカレッタ号の船内に取り込んだ。他にも石像等の宝を見つけ、漏れなく回収して行った。これでまたしばらく食つていける。

「ロッサ、遺跡の中を見て回るわ。アンカー・シユート！」

琉は碇を打つと、ラング装置の部屋に向かった。

「ロッサは水の中でも平気みたいだけど、俺はこれがないと息が、ね。ラングアーマー・セットアップ！」

ラングアーマーを装着し、飛び込む琉。そして海中からロッサの手を引き、水中へとエスコートした。アードラーを呼び、二人はその背中に乗つて海底へと向かってゆく。塔の隙間に出来た碁盤状の道を、縫うように進む琉とロッサ。サーチライトに照らされた遺跡の光景。道に出来たクレーターや塔に空いた穴が、かつての戦争の激しさを物語つている。

「そう、この道。この道を、ずっと向こうの方に走ったんだ！」

「この道かい？ よし、たどつて行こう

カレッタ号の明かりから離れた個所を、ロッサが指差した。そこに向って、アードラーのサーチライトが照らし始める。

「ここに船があつて、そこから海に出て……」めん、あとは思いだせない……」

「…… どうか。しかしここから比較的近いのはエリアだ。今度行つてみるとことによつ」

来た道を戻る一人。遺跡の外れから、再び塔の建ち並ぶ遺跡へと戻つて行く。街を歩くのと同じように、二人は海底ストレスレアドラーで進む。

「…… そうだ、あの辺にいつも行つてた食べ物のお店があつて、この辺でいつも散歩してて……。あ、あそこだ！」

「うん？ あの辺がどうしたんだ？」

「わたしがリベールと住んでた家……あの塔の中にあつたと想つ」

ロッサの記憶が戻つてゆく。ここでリベールと暮らした思い出。例えわずかな記憶でも、琉にとつては重要な手掛かりとなる。ましてやかつての家となれば、琉にとつてはこれ以上ないキーアイテムが見つかるだろ？琉はアードラーの先端を塔に向け、真っ直ぐにその部屋に向かった。

「ここかい？」

「その右…… そうぞー。」

琉はアードラーを穴の入口に停めると、ロッサと共に入り込んだ。パルトネールの先端から光を出し、中を捜索し始める琉。

（まさかこんなことまで思い出してくれるとはな……これでまた一歩、彼女の史実に近づいたか。さあて、俺に史実は見えるかな、と）

琉とロッサは家にあるモノを片つぱしから拾い集めてはアードラーに積んで行つた。部屋の壁には攻撃によって空いた大きな穴があり、持ち帰れるモノは少なかつたが、それでも大きな進展につながるのは間違いないだろう。一通り積み終わると、琉はロッサに言った。

「よし、カレッタ号に戻つて一個ずつ確かめるとしようか……うわつ！？」

突然塔に走つた衝撃。思わずよろける琉とロッサ。塔の天井が音を立てて崩れ始めた。琉はロッサを抱えるとすぐにアードラーにしがみ付き、夢中になつて塔の穴から飛び出した。そして、ある違和感に気が付いたのである。

「馬鹿な、パルトネールが反応しないだと…？」

「琉、見て！」

ロッサの指差す方向から、大量の影がこちらに向かつて来る。たちまち二人のいる塔の周りを、向かつてきたモノが取り囲んだ。直径約2m、厚さ50cmほどの円盤状の物体。中心は盛り上がりおり、その先端から砲台が伸びている。先程の衝撃はどうやらこの攻撃だつたようである。

「驚いた、小型艇だつたとはな。最近の海賊はこんな狭苦しい船に乗ってるんか」

琉がパルトネールを構えて言い放つた。ロッサは第三の目を開き、小型艇を睨んでいる。この世界の海賊は小型艇に乗り、機動性を活かして集団で襲いかかってくることで知られている。しかしロッサの口から、思わぬ事実が告げられた。

「嘘……誰も乗つてない！？ 琉、この船自分で勝手に動いてる！」

「何だと！？ んな馬鹿な、ラジコン操作つてワケかい？ 確かに、ヒトが乗るにはちょっと小さすぎるとは思つたんだが、……」

そんな二人のおしゃべりに聞く耳持たず、無人の小型艇は二人に照準を合わせると容赦なくぶつ放してきた。すぐさまアードラーに乗つてかわす一人。

「無人ならこちらも容赦はいらないな。パルトネール・チエイン！」

パルトネールの先端から分銅が現れる。一方でロッサの手が赤黒い狩りの腕に変貌する。琉は一つの小型艇目がけて分銅を発射した。中心部を貫かれ、たちまち動きが鈍る小型艇。

「パルトショック！」

鎖から伝わる電流で、小型艇は爆破された。そのまま琉は分銅を振り回し、小型艇を引っ掛けると別の小型艇にぶつけて大破させた。一方のロッサも、指を突き伸ばして小型艇を捉え、指が発光した途端に小型艇が海中にも関わらず炎上した。

小型艇の砲台から放たれる光線をかわし、一つ、また一つ小型艇が落としてゆく。砲撃では駄目だと操り手が思ったのか、小型艇は側面からノコギリのような刃を出し、回転しながら向かってきた。

「しつこいな、心中は御免だぜ。ロッサ、しつかり掘まつてろよ…」

「アードラー・バックスティング！」

アードラーのトゲから放たれる針のような光線が無数に放たれ、小型艇に刺さつては爆破してゆく。戦闘開始からわずか五分で、辺りの小型艇は全滅した。

「よし。海賊やつつけたし、さつさと帰るか」

「……！？ 琉、気を付けて！ まだいる！…」

「何イツ！？」

『虫実は見えるか』 破（後書き）

謎の敵、あらわる！ 因みにモチーフは珪藻です。 デザインは實習中に思いつきました。

『史実は見えるか』 急（前書き）

記憶を戻すべく、水中で探索を開始した琉とロッサ。しかし一人のランデブーを邪魔するモノが現れて……。

『史実は見えるか』急

ロッサに言われ、琉が向いた先には更に多くの小型艇が向かってきていた。先程襲いかかって来たモノと違い、こちらは直径が約5m、厚さが約80cmと大きく、表面には砲台等が見当たらない。しかしある程度こちらに近づいた途端、小型艇は上下にガバッと開き、砲台を伸ばすとそのまま琉達曰がけて発射してきた！

「うわ！？ 僕こんなラムネ菓子食いたくねえよ！ ロッサ、ヒンギレー（逃げる）！」

まとも相手してかなう相手ではない。琉はロッサを強く抱えると、アードラーに掴まりスピードを一気に上げた。

「どうするの……？」

不安に駆られたロッサが琉の顔を見る。マスクのレンズ越しに見る琉の目は険しく、真っ直ぐにカレッタ号を見つめている。

「このままではラチが明かない。ひとまずここから去る必要がありそうだ。全く、タチの悪い海賊だぜ……。しかし今の様子を見る限り、今度のも無人のようだな」

小型艇は容赦なく針のような光線を琉達に浴びせて来る。光線の間を、縫うように進むアードラー。琉はチラリと後ろを向くと、パルトネールを取り出して引き延ばし、

「パルトブーメラン！…」

音声コードを入力すると回転させて投げつけた。そして更に、

「オセルスフラッシュュ！！」

額のオセルスレーダーから放たれた赤い光線が、投げられたパルトネールに命中する。オセルスフラッシュュを浴びたパルトネールは、その身に真っ赤な光を宿すと更に勢いよく回転し、先程までとは段違いのスピードで小型艇の群れに突っ込んでゆく。赤い軌道を描き、パルトネールは小型艇を次々に貫いていった。たちまちあちこちで、爆発音が響く。小型艇の頭数が減ることにより、琉達に注がれる光線の数もそれに比例した。その隙に琉達は真っ直ぐにカレッタ号のハッチに急いだのである。

「ロッサ、先に入つて！！……お、来たか！」

パルトネールが戻つて来た。既に光は宿しておらず、元の黒い棒状の道具に戻つている。琉はパルトネールを手に持つと、自らもカレッタ号に入り込んだ。ラングアーマーを解除し、ウェットスースのまま操舵室に走る琉。

「琉、見て！ さつきの小型艇が……！」

舵を握り、ロッサの指差す方向を見る琉。操舵室の窓から見えたモノ、それは、

「くつ、何だこいつらは！？ ラムネ菓子のパック詰めか！？

なんと先程の小型艇が結集し、次々に合体しているではないか！合体した小型艇は細長い棒状になり、長さは約16mとかなり大きくなつていて、どこから湧いたのかアンテナ状の突起を生やして

おり、その姿はビートなく異様なモノであった。

「なるほど、こちらに対抗して大きくなつたところとか……うわ
つー？」

合体した直後、相手の突起から放たれた光線がカレッタ号に降り
かかつた！ 強い衝撃が中の一人を襲つ。

「きやあつー？」

「おわつ！ 大丈夫かロッサ……ん！？」

よひめいた拍子に、琉の口にはほのかな甘みがひろがつた。そう、
ロッサの赤い唇が琉の口に触れたのである。が、相手は空氣を読ま
ず、ぶつ放してきた。琉はすぐに正気に戻ると口をぬぐい、舵を握
つた。

「アタビチグワ（この野郎）、俺のファーストキッスを達成させと
いて邪魔するのつもりかよー！？」

琉は憤越しにタンカを切ると碇を引き上げ、カレッタ号を旋回さ
せた。

「なるべく早く脱出したいが、コイツを片づけないと厄介だな。ツ
インレーザー！」

カレッタ号の両端からそれぞれ小さな砲台が顔を出す。操舵室の
窓に、一つのロックオンマークが表示された。琉はマークを重
ねて相手の一点に照準を合わせると、レバーに付いたスイッチを握
り、押した。たちまち細いレーザー光線を発射され、相手の突起の

生えた個所に突き刺さつて爆発が起きた。

「シールド展開！ カレッタ・アームドラッシュ… … ロッサ、しつかりと掴まつてくれ。ちょっと荒けない」とするから「

特殊なシールドに覆われ、青く発光するカレッタ号。琉はレバーを握り直すと、一気に手前に倒した。

「うおおおおおおおおおおおおお…！」

琉の雄叫びと共に突進するカレッタ号。中心部をやられた合体小型艇は爆発し、海の底へと沈んで行つた。その中から一つ、無傷で沈みゆく小型艇を琉は見つけた。

「クラストアーム！」

琉は素早く小型艇を拾い上げ、回収した。

「琉、今なら逃げられる…」

「よし、分かつた！ ……へ、やつと諦めてくれたか……」

琉は安堵の言葉を口にすると、そのまま浮上して港に戻つて行つたのであつた。

「で、これが話にあつたモノさ」

港に戻つた琉とロッサ。琉はアルとゲオの二人を呼び、回収した小型艇を見せていた。

「これはかなり精巧だよ。しかし人が乗れる場所がないねえ」

「無人で動く船か……。一体何処で作られたモノなんだ？ ちょっと失礼するぜ」

無線装置は撃沈した際に壊れてしまつたらしく、小型艇はピクリとも動かない。ゲオが外のパーティをいくつか外すと小型艇は水中でみたように上下に開き、アンテナ状の砲台が4つ外に張り出してきた。

「う～む、こいつ装甲こそ薄いがこの光線砲はかなりのモノだ。相手は並みの海賊ではないだろ？…………ん？ 何だ、このマークは」

ゲオに指摘され、琉達は装甲の内側に書かれているマークを見た。稻妻が十字を切るように書かれ、その中心にヒトをあしらつたモノである。これを見た瞬間、琉とロッサの脳に電流が走つた。

「これ、メンシェ教の！」

「確かに、間違いなくメンシェ教のマークだ！ やっぱり、唯の海賊ではなかつたのか……」

「だとしたら琉ちゃん、しばらくエリア に行つちやあ駄目だよ。明日の朝にはもう、ハイドロまで帰つた方が良いかも。ロッサちゃん、せつかくだから今の時代のことを色々と勉強したうどうかな」

アルが琉とロッサに忠告した。確かにこのままここにいては危険すぎる。ロッサのためにも、こゝは一旦ハイドロ島に帰還して大人しくした方が良いだろ？

「……分かった、そうじょう。ロッサ、しばらく探索はやめだ。ハイドロに帰つて、しばらくは道場の手伝いでもしようかな……」

船の階段を昇る琉とロッサ。予想外に早くなつた帰郷。たまにはのんびりするのも悪くはないかな、と思つ琉なのであつた。

「……ふむ、撃沈されたか」

「申し訳御座いません！ 今度こそ、ヤツを……！」

琉達が港に着いた頃。薄暗い部屋の中で男はモニター越しに話をしていた。モニターの向こうには女性が映つている。

「いや、こちらから見る限り実験は成功だ。あとは改良を加えるのみだが、これでも我々メンシェ教の勢力を広げるには申し分ない。早う戻つてくるが良い」

そう言つて、男は画面を切つた。そしてロープの袖をめぐり、腕時計を見ながら呟いた。

「間もなく時は訪れる。我らが同志を捕え、虐げた者たちよ。メンシュの神の名のもとに天誅を与えてくれよ! うわ……！」

『虫実は見えるか』 急（後書き）

「いのとくの忙しいです。毎度のことながら不定期連載ですが、応援よろしくお願いします！」

では、次回予告です。

「思っていたより『力かつたんだな』……」

「わたしの居場所は……どこにあるの？」

（前回までのあらすじ）

ロッサの記憶を戻すべく、アルカリア領にあるソディア島に向かつた琉。そこで発掘したペンダントから、ロッサといつも一緒にいた人物、リベルの存在が明らかになる。そこで琉はロッサの水中での能力に着目し、彼女の記憶を確かに蘇らせるためにもう一度エリアに向かつて一人で探索して回ることにした。しかしその途中で謎の無人小型艇に襲われ、更にその小型艇はメンシェ教の差し金であつたことが判明した……。

『琉さん事件です』序

カレッタ号船内・船長室。明かりの中、カレッタ号のキャプテン・琉は一人PCに向かつて航海日誌を付けていた。

『……まさかメンシエ教があのよつた武器を持ち合わせていたとは。もはや海の中も安全ではない。ロッサのためにも、明日は一旦ハイドロへ帰るとしよう。』

『……例の小型艇は警察に引き渡すことにして。この島のメンシエ勢力が沈静化したら、私は再びソーディアの地に足を踏み入れることとする。』

一通り書き終わると、琉はシャワー室に向かつた。壁の向こうからも水音がする。じつやう、ロッサもシャワーを浴びてるらしい。

「ロッサ……ハッ！？ イカンイカン、何考えてるんだ俺は」

琉とて男である。壁の向こうで、グラマラスな美女がシャワー中と分かれば特定のモノを想像するのはもはや当然といつても良いだらう。

（やつぱ慣れて來たんだな、俺……。ちよつと前なら鼻血出して卒倒だぜ）

自らもシャワーを浴びつつ、琉は思つていた。彼の暮らしていたハイドロ島には田舎で同年代の女の子がおらず、18歳で入ったラング基地も男ばかりであった。女性と言つたら色氣も減つたくれもないオバサンばかり。同年代の、若い女性と喋る機会はほとんどな

く、あつたらあつたで緊張して何も喋れなかつたのである。

「あれ、琉も水を飲みに来たの？」

「ふえ？ あ、いや、その、シャワーを浴びに来たんだ」

壁の向いから不意に、ロッサの声がした。驚いた琉はありのま、自分の本来の目的を壁に向かつて言つた。直後、琉はとある事実に気が付いた。

「ちよい待て。ロッサ、まさかシャワーから水を飲んでたのか？」

「うん、温かくて飲みやすいよ。水もたっぷり出るし」

説明せねばなるまい。ロッサはシャワーで浴びることで死んだ細胞を洗い流す他に、放たれた水を全身で“飲んで”いたのだ。いや、むしろ水を飲むことが彼女にとってシャワーを浴びる一番の目的とも言えるだらう。

「……まあ、良いか。実際、いつもキレイにしてるみたいだし。腹、壊すなよ？」

シャワーから上がり、琉は近くにかかつっていたふんどしを締めると、上から青い浴衣を軽く羽織つた。彼のリラックスする時の部屋着はいつもこれである。サッショを帶代わりに締めると、そのまま布団に横たわる。枕元にあつた携帯電話を取ると、琉はおもむろにある番号を打ちこんだ。

「ハイサイ（よみ）！ 琉、どうしたんだ急に！？」

「ハイサイ、カズ。達者にしてたか？ いきなりだが明日アルカリアを出ることとなつた。3日後にはハイドロに着くと思つぜ」

琉が電話をかけたのは、ハイドロに住んでいた和雅であった。

「メンシェ教の奴ら、ついに海にまで追つてきやがつてな。それで、メンシェ取り締まりがきつちりしている所で一日身を潜めよう、と思つてさ」

「そうか……。そういや、ロッサ様は元氣かい？」

「ああ、元氣だ。今隣の部屋でシャワー浴びてるぜ」

「」の後和雅が興奮し、暴走した拳旬に鼻血を出して卒倒したのは言つまでもない。琉は久々の帰郷を楽しみにしつつ、目を閉じたのであつた。

翌朝。突如琉の携帯が、いつものアラームとは違つたたましい音を立てた。真っ白な布団から、浅黒い腕が携帯に伸びる。眠い目をこすりつつ、琉は携帯の液晶画面を見た。

「ああん？ 臨時二コース受信？ こんな時間に？ おいおい俺はまだしも、一般家庭だつたらまだ寝ている時間だぞ……。まあ良いや、何々……！？」

二コースを見た琉の目が一気に覚める。同時に引いてゆく琉の血の気。携帯の画面にあつたモノ、それは……

『監獄襲撃！ オルガネシア刑務所崩壊！ 屋根にメンシェフラッグ！』

衝撃的な見出しどとくに凄惨な映像がそこには映し出されていた。絶海の孤島、ガレキの山と化した刑務所、その屋根に立てられた旗、そこにデカデカと描かれたメンシェマーク。記事にはさらにもう書かれていた。

『オルガネシア刑務所は月日未明に何者かの襲撃を受けた。刑務所には火が放たれ、看守や一部の囚人のうち約40人が死亡、約30人が行方不明となっている。屋根にはメンシェ教のマークを記した旗が立てられており、警察当局は指定テロリスト集団“メンシエ教”の仕業ではないかとして捜査を続いている……』

携帯の画面に齧りつく琉。すると画面が突然変わり、またしても鳴り始めた。電話の着信である。

「ん、カズ？ 早いな……ハイサイ！」

「ハイサイ、琉！？ ニュース見たか！？ ハイドロには来るな、デージナッテル（大変なことになつていてるぞ）！」

「何、むしろ危険だと！？ カズ、一体どういふことだ！？」

電話をかけて来たのは和雅であつた。朝っぱらから緊迫した声である。肌蹴た浴衣を脱ぎ捨て、布団を畳みながら琉は携帯に向かって半ば叫ぶように聞いた。

「良いか琉、落ち着いて聞いてくれ。例の襲撃事件のニュースは見たよな？……やっぱ見たか、その時に何人か行方不明が出ただろ？ そいつらにはほぼ共通点があるんだよ……」

「共通点？ 奴らが刑務所を襲うこと自体が俺には不可解だが……」

「簡単な話さ。こっちの情報じゃあ“教団員を取り戻すため”なんだそうだ。実はな、囚人のうちヒト族だけが見事に全員行方不明なんだそうだぜ。それだけじゃない、ハイドロ島内でも今朝交番で暴行事件が……」

布団を部屋の隅にやると、琉は携帯を片手に持ったままシャツを着始めた。

「チツ、どこに行つても危険つてワケか。そして脱獄早々御礼参りとは……」

「とにかく、今のオルガネシアは荒れでいる！ 今帰るのは危険だ、良いね！？」

「分かつた……。他にも何か、分かつたら連絡してくれ。こっちは何か、対策を考えないとな……。マタヤーサイ（またな）！」

琉は携帯を切つて机に置いた。ふんどしを締め直し、ズボンを履き、ベストを着こみ、上着を羽織つて携帯を内ポケットに仕舞い、サッシューを締めると机に置かれたパルトネールを持ち、結び目に差した。洗面台に向かい、短めの髪を少し整えると琉は部屋を出た。

「全く、故郷に帰つても危険とは、物騒な世の中になつたモンだぜ！ ……いかん落ちつかねえ、ちょっと“アレ”をやるかな……」

そう言つなり琉は、操舵室に向かいそのまま甲板に出て行つたのであった。

まさかの大事件。琉は帰れなくなってしまいました。さてどうなるか！？

『琉さん事件です』 破(前書き)

衝撃的なニュース。それは、メンシェ教徒による刑務所襲撃であつた……。

『琉さん事件です』 破

「ん……。あ、琉に起じられる前に田が覚めた……」

アンニコイな声と共に、布団からのつそりと這い出す赤い影。布団を畳み、手櫛で乱れた髪を直す仕草は何處はかとない色気を醸し出していた。洗面台の鏡を見る赤い瞳。ロッサは身なりを軽く整えると、扉を開けて部屋を出た。

「あれ、琉は何処へ？……ん？」

操舵室に来たロッサ。しかしそこに琉の姿はない。キヨロキヨロと周りを見渡すと、舵の上に上着とサッシュがかけてあつた。そして半開きになつた甲板への扉から、何やら声が聞こえて来る。

「はああああ……。ふんッ！　はあッ！　でやあッ……」

甲板に出たロッサ。そこには上半身に何も着ず、筋肉質な肉体を外に晒して拳を振るう男の姿があつた。腰だめに構えた拳が真つ直ぐに風を切り、時折繰り出す蹴りが宙を切る。何を見据えているのか、大きなその目はメンシェ教徒やハルムと出くわしたときのように鋭くなつていた。

「琉、何と戦つてゐの？」

ロッサの声に気付き、琉は構えを解いた。近くに置いてあつたシヤツとベスト、パルトネールを手に取ると琉はロッサに近づいた。

「おはようロッサ、今日は早いね。今のはちょっとした運動だ、汗

かいたしシャワー浴びてくむぜ

琉はそういうと、舵にかけてあつた上着とサッショをも腋に抱えて自室に入つて行つた。ちょっとした後、琉は上着を含めた服一式を着こんで現れた。

「……そういう、大事なお知らせが一つ。ハイドロには帰れなくなつた」

「帰れない！？ 一体、どういうことなの？」

琉は上着の内ポケットから携帯電話を取り出し、ロッサに見せた。画面を見たロッサの顔には徐々に怯えの色が浮かび、仕舞いには携帯電話を持ったまま硬直した。琉はヒョイと携帯電話を取り上げるとロッサにいつた。

「要するに、アイツらが今まで以上に好き放題やり始めたつてことだ。こんな調子じゃあ、しばらく帰れないだろうね」

「それじゃ、一体いつになつたら帰れるのー？」

「それは……どうも言えん。ただ分かったのは、ヤツらはただのよそモノ嫌いの田舎者集団ではなく、軍事レベルの兵力と統率力を持つた恐ろしいテロ集団だったということだ」

「そんな……。じゃあ、わたしの居場所は……ビルにあるの？」

肩を落とす琉とロッサ。今の状況では、何処に行つても危険だらう。

「ロッサ、安心しろ。君の居場所なら俺が作ってやる。だから……
とりあえず飯にじより、こうじう時こそ腹ごしらえが必要だ」

落ち込んでばかりはいられない。琉はロッサと一緒に食堂に向かつた。こういう時こそしつかり食べねば対応出来ないとこうのを、琉は誰よりも知っていた。

各種野菜と砂豆で出来た豆腐、缶詰を開けて炒めて卵でじる。いわゆるチャンプルーと呼ばれる、シンプルな炒め料理である。大体朝はこの料理が多い。しかし飽きがこないよう、琉は毎回入れる食材を少しづつ変えているのであった。

「とりあえず、今日の予定だ。まずアルとゲオ達に連絡し、帰れなくなつたことを伝えよ。……しばらくはあの工房で使ってもらつかな。それから、昨日持ち帰つたモノの整理もしないとな。売れるモノがあつたらすぐさま売りに行つとこうか」

朝食を取りつつ今回の予定を話す琉。ハイドロ島に帰れない上に今海に出るのは危険と、今の琉には仕事がなかつた。そこで、アル達の工房でしばらく使ってもらおうといつ魂胆である。これは、単純に食つていくアテを探す他にメンシヒ教から身を隠すといつ目的も含まれていた。

朝食を終え、早速アル達に電話を掛ける琉。

「……そうだ、あつちでロッサに出来ることはあるかな？ まいざとなりや俺が教えりや済む話か……つておい、えらく時間かかるなあ？」

番号を入れてはや1分。いつまで経つても出る気配がない。電話は事務所と仕事部屋の二つにある他、職人一人もそれぞれ携帯電話を持っているはずである。

「喋らない、の？」

「相手が電話に出ないと氣付かなこと。仕方ない、出かけるんだわつた。アルに直接掛けてみるか。駄目ならゲオに、だな」

番号を打ち直し、琉は再び携帯電話を耳に当てる。

「……まあ、今度は出でくれよ……！？」

ブチッという音が鳴り、電話が途絶えた。それも電話に出ず、一言も喋らずにである。つかたず今度はゲオにも掛ける琉。だが……

「只今、電話に出ることが出来ません。改めておかげ直し下せこ」

「までもぐると流石におかしい。琉は携帯電話を懷にしまつと言つた。

「何かあつたとしか考えられん。こうなりや直接工房に行こ。ロッサ、一人でいるのは危険だから一緒に来なさい、良いね？」

アーデリーを呼び出し、バイク形態に変形させて街中に向かう琉とロッサ。すると二人の目には、異様としか言えぬ光景が映つたのであった。

本来なら皆仕事に取り掛かり、街には多くの通行人が出歩く時間帯である。ところが、今の街は午前中とは思えぬほどに静まり返り、外には誰も出歩いてはいない。それどころか話し声すらも聞こえてこないのだ。

「ねえ、琉……。どうして今日は皆いないの？」

「分からん。しかしこの様子じゃあ工房も心配だぜ……」

道行く者は誰もおらず、今街はまだ砂塵と蜃氣楼が揺らめくだけのもぬけの殻と化していた。殺風景かつ不気味な光景に戦慄する琉。

「琉……震えてるの？」

無意識のうちに震える琉の背。しがみついていたロッサに、それは直に伝わってくる。琉は元々そこまで勇敢な性格ではなく、特にこういった予想外かつ前代未聞の事態には弱い所がある。恐怖心を押し殺し、アクセルを掛ける琉。そして裏通りの入り口に近づいた時だった。

「大人しくしろッ！ 薄汚い亞人種の分際が、我々メンシェに逆らうとは何事だ……！」

「やることが汚いのはそっちの方だ！ こっちこそ、オイラ達の工房を荒すのはやめてもらつよおー！」

「生意氣な……。やつちまえッ！…」

怒号。フードを被つた連中。そして極めつけは……

「今のは……アル！？ よし、掴まつておよロッサア……」

ハンドルを握り直し、アードラーのエンジンがうなり声を上げる。一気に加速するアードラー。琉は懐からトリガーパーツを取り出しだイレクトにパルトネールに取り付けると、

「パルトネール・シユーター、パラライザー！……ロッサ、飛び降りるぞ！」

赤い閃光がフードの男を一人捉えた。琉はアーデラーのハンドルを切り、停車させると同時に飛び降りるとパルトネールを構えた。

「何だ貴様は！？……うがッ！？」

「アル、ゲオ、大丈夫か！？」

突つかかつて来たメンシエ教徒を一人気絶せると、琉は工房の中に向かつて叫んだ。

「琉ちゃん！？ 早く逃げないと駄目だよお！ メンシエ教が大暴れし始めたんだよお！！」

「うるさい！ ここも大人しく、我々に従えれば良いモノを……。ん？ 貴様、彩田琉之助かッ！？」

メンシエ教徒の一人が琉の顔を見るや否や声を張り上げた。

「だつたらどうした！？ ほれ、アンタ達の大好きな異端者と悪魔が、わざわざ表に出てきてやつたぜ！？」

挑発しながらもパラライザーを放つ琉。更に残りの連中を、液化したロッサによる体当たり攻撃が吹き飛ばしてゆく。あらかた片づけた後、琉とロッサは工房の中に掛け込んで行つた。

「おい、大丈夫か！？」

「オイラは大丈夫だよ、だけどウチの子が一人……！」

アルの指す方向にトヴェルクの少年が一人倒れており、ゲオが付きつきりで面倒を見ていた。

「琉ちゃん、この子はヤツの銃を一発食らっちゃったんだ……。そのせいか、腕が全く動かねえんだ！」

見ると少年の右肩からは大量の血が流れている。深々と突き刺さる一つの銃弾。それを見たロッサが声を上げた。

「琉、これ……聖弾！？ 早く取らないと……」

「よし、そうとなれば……」

パルトネールを腰に差し、懐からメスとピンセットを取り出す琉。ロッサとアル、ゲオの見守る中、琉の処置が行われた。

「うぐッ！ …… うつう……」

麻酔などしている場合ではない。弾を取り除かない限り、彼の腕は動かない。

「我慢してくれ、もうすぐだ！ …… よし、取れた！！ アル、ゲオ、消毒液は！？」

弾を摘出した琉。アルが持ってきた救急箱から消毒液を取り出して吹き付けると、すぐさまガーゼを当てて包帯を巻き付けた。

「ありがと……」「わこます……」「つづー？」

それでもまだ、少年の肩には激痛が走る。ゲオは少年を抱えると、奥の部屋へと連れて行つた。そこには他の職人達も待機していた。

「皆、しばらくここに身を潜めるんだ。オレはヤツらの所に殴りこみを掛けて来る……」

ゲオのセリフに驚いた琉。思わず大きな声を出して言つた。

「おいゲオ、何を考えてるんだ！？ 今そんな行動を起したら……」

「仕方ねえだろ！……オレと、アルの家族が……」

「家族が？……まさか！？」

『琉さん事件です』 破（後書き）

急展開を見せる第六章！ 暴走を続けるメンシェ教徒に対し、琉はどう戦い抜くのか！？

『琉さん事件です』 急（前書き）

工房と連絡が付かず、アーデラーに跨り急行した琉であったが……。

『琉さん事件です』 急

（琉が工房に現れる数時間前）

「さて、今日も作業始めるよおー！　ええとまず、オイラとゲオは……」

工房の朝は早い。この世界での主流産業は遺跡探索。琉のみならずラング装者にとって、彼らを支える道具の存在は非常に重要な存在である。しかしその道具はトライデントやラングアーマーといった特殊なモノばかりで、これを制作出来る技術者は限られてくる。アル達の工房もその一つであつた。彼らの工房は毎日これらの道具を開発、製造する他にも修理、改造といった注文が大量に舞い込んでくる。朝から晩まで、交代しつつ休憩しつつ彼らは着実に作業をこなし、完成させる。

「今年の新ラング装者は10人か。彼らに頑張つてもうつためにも、キッチリとカスタマイズしなとな！」

そういうて日々作業場に向かう技術者達。ある者はPCに向かい、ある者は機械を操作し、ある者は完成した部品を組み立てる。こうしてまた、忙しくも清々しい朝が訪れる……はずだった。

ガンツ！　ガンツ！　ガンツ！

「誰え？　仕方ないなあ、もう

インターホンがあるにも関わらず、扉を乱暴に叩く音が工房内に響き渡つた。アルはだるそうなセリフと共にモニターを見て、驚愕

した。フードを被つた男達が、扉の周りを囲つてゐるのである。

「ハツ、メンシエ教!? 皆あ、後ろに下がつて! 絶対に開けちやダメだよお!! ゲオ、ちょっと話を聞いてやつて!!」

ディアマンとト、ヴェルクが働いてゐるこの工房にとつて、メンシエ教徒は脅威以外の何モノでもない。アルはその手の甲から鉛物で出来た鉤爪を出し、ゲオは近くに置いてあつた自前の武器であるパイルバンカー（杭打ち機）に盾をくつつけて構えつつモニターに向かつた。

「はいはい、要件を伺います」

「亜人種」ときが我々に大きな口を利くな。すでに周りは包囲している、助かりたくば大人しく我々の命令に従つのだ。まず、工場長を呼べ」

ゲオはアルに合図すると、アルがモニターの前に立つた。

「工場長はオイラだあ。早く要件を言つてくれよー」

「まず我々にこの工房を明け渡せ。そして今作つてゐるモノを全て中止しろ」

あまりにも理不尽な要求。アルとゲオは顔を向き合わせると、再びモニターに向かつて言った。

「何故この工房が欲しいんだ? ついでに何故制作中止にせねばならん!? そこんとこちやんと説明してもらおうかッ!!」

「オイラ達の作ったモノを待ってる人がいるんだよ！ それを差し置いてまで、一体何を作れっていうんだあ！？」

「剣幕を張る一人。しかし交渉をしていたフードの男は動搖もせずじつといった。

「よろしいならば……連れて来い！」

すると奥から、何人かの男がティアマンとトヴェルクの女性と子供を掴み、引っ張り出してモニターに押し付けた。それを見た瞬間、一人の顔が凍りついた。

「ク、クロエ！？ おい、オイラの家族に何をする気なんだあ！？」

「ヘルガ！？ くそッ、卑怯だぞお前ら！…」

モニター越しに助けを求める一人の家族達。悲痛な表情が、アルとゲオの心に突き刺さる。フツ、と笑いつつ、フードの男はモニターに向かって言った。

「せいぜい吠えるが良い。会いたければ扉を開ける。ま、開けないならこちからこじ開けるのみだがな！…」

この声の直後である。バンという大きな音と共に扉がこじ開けられ、メンシェ教徒がなだれこんで来た！

「皆、早く奥に逃げて！ ゲオ、いくよ！…」

「オラオラ、妻と子は返してもうつぜー？」

メンシエ教徒のナイフが一人に襲いかかる。アルの鉤爪が刃を受け、ゲオのショルダータックルが炸裂した。アルの背後から、また別のメンシエ教徒が斬りかかる。しかし刃は、彼の鱗に当たるなり折れてしまった。

「ひ、ひいッ！ このバケモノめ！！」

「アンタ達はハルムより恐ろしいよお？」

次の瞬間、この男にアルの裏拳が炸裂した。しかし……

「これ以上の抵抗はやめる。愛しい家族がどうなつても良いのか？」

メンシエ教徒のナイフと銃が、アルとゲオの家族に向けられた。

「あ、あなた……」

「お父さーん……」

助けを求める妻に泣き叫ぶ子供達。一人は歯を食い締めて見る他なかつた。

「ふん、この二人は生かしておくと厄介だ。やれッ！！」

リーダー格の男が指さすと、銃を持った男達が一斉に工房内目がけて発砲した！

「うわッ！？」

アルはその硬い手で、ゲオは盾ですぐさま弾を防いだ。

「なんてね、そんな銃弾」ときでやられるオイラ達じゃないよー。」

「ほほお。では、後ろの扉はどうなっているかな？」

「何ー？」

二人が振り向くと、後ろの扉に銃によつて開けられた穴が開いており、しかもそこから肩を押された作業員が一人崩れるようにして倒れ込んで来た。右肩を押されており、押さえる手の指の間から大量の血が流れている。

「しまつた！ おい、大丈夫か！？」

ゲオが扉に向かおうとした、その時だつた。

「おつと動くな、大人しくしろッ！ おい、女と子供を連れて行けー！」

二人の家族が、メンシヒ教徒達に引っ張られて姿を消した。

「全く手こずらせおつて……薄汚い亞人種の分際が、我々メンシヒに逆らうとは何事だー！」

「やる」とが汚いのはそっちの方だ！ こっちこそ、オイラ達の工房を荒すのはやめてもらつよー。」

「生意氣な……。やつちまえッー！」

その場のメンシェ教徒が、武器を構えて工房に突入しようとした、まさにその時だつた。

ブイイイイイイン！！

「何だ貴様は！？」
「……うがッ！？」

「アル、ゲオ、大丈夫か！？」

回憶終了

「ひどい……ひどい、何なの？」

「すると、二人の家族は一体どこに連れ去られたんだ!?」

話を聞いた琉とロッサ口々に語った。

「全く見当がつかないよ……。それに、アイツりは向で一体急に暴れるようになつたんだあ？」

「さつきコースで、ヤツらの監獄襲撃が報じられてたんだ。恐らく、これで大量の人材を取り戻したんだろう。ヤツら、ただのよそ者嫌いの田舎者集団だとタカをくくつていたが……思つていたよりデ力かつたんだな……」

溜息をつく琉とアル。ところがその隣で、ゲオは何やらレーダーを取り出して見ていた。

「ん、ゲオ？ そのレーダーは一体どうしたんだあ？」

「アル、さつきヤツらが来た時に、ヘルガ……ウチの家内に小型発信器を投げつけておいたんだ。反応してれば良いのだが……」

まさかの好プレーに驚く琉とアル。ゲオの顔はビートなくドヤ顔をしているようにも見えた。

「おいゲオ、何でそれを早く言わん！ しかし良くやつたぜ……」

「だが問題が一つ。ヤツらの向かう場所が……」

ゲオはレーダーの地点を指差した。

「まさかのオアシスだ。そのためには、この街から砂漠地帯を突っ切らねばならない。しかし早く行かないと、何されるか分かったモンじやねえ……」

「でも、オアシスの周りはハルムの巣窟だよ！ ビツヤれば……」

このセリフの直後だった。

「何、ハルムの巣窟？ ジュルリ……」

「ロッサ！ ……ん、待てよ。」

ロッサのセリフで、琉はあることを思いついた。

「……よし、俺達も行こう。」

「ええツー。」

琉のセリフに驚く一人。しかし琉にはある疑惑があった。

「ヤツらの暴走を止めるのは俺も同じだ。ハルムなら俺とロッサに任してくれ。さ、早く行かないと何されるか分からんぞ！」

こつして琉、ロッサ、アル、ゲオの4人は、オアシスに向けて砂漠横断を決意するのであった！

『琉さん事件です』 急（後書き）

（次回予告）

「これが……新たな力か！？」

「はあああああッ！！」

『砂の地獄を突破せよ』序（前書き）

（前回までのあらすじ）

手掛かりを求めてアルカリアに来た琉とロッサ。探索で重要な手掛かりを見つめたものの、メンシェ教の無人小型艇の襲撃により断念せざるを得なくなってしまう。そして故郷に帰ろうとした琉に届いたのは恐ろしいニュース。メンシェ教がタダの田舎宗教ではなく、大規模なテロ組織であることが判明したのだ。そしてその魔の手は琉の知人である工房の二人にも襲いかかり、家族を人質に工房の明け渡しを迫っていたのであった。琉の加勢で何とか退けたのだが……。

『砂の地獄を突破せよ』序

「悪魔を倒し、世界を救うのなら分かります。不當に逮捕された父や、同志を救い出すのも分かります。しかし、これは……」

薄暗い部屋の中で、一人の女が抗議している。

「何故ヒドじやないといつだけの理由で、関係のない者を捕えたり命を奪つたりする必要があるのですか？　早く家に帰すべきではないのでしょうか！？」

「良い良い、アヤメの言つこととももつともだ。しかしながら、こうでもしなければ協力を仰げなくてな」

もう一人、部屋にいる男が言葉を返した。

「悪魔を連れてる男　彩田琉之助。ヤツはラング装者、我々とは技術にしても素の体力そもそも次元が違う存在だ。それに対抗するには、ヤツが“利用”する亜人種どもの技術を利用して、同時にヤツの戦力をそぎ落とす必要があると考えたのだ……」

その頃、襲撃のあつた工房では、

「それは奥へ。こいつは持つて行こいつ。……よし片付いた！」

工房内では、アルの指揮下で従業員、そして琉とロッサが総出で片付けをしていた。

「琉……何で今工房の中を片付けるの？　早く行かないと……」

「急がば回れ、だ。砂漠を直に突っ走るワケにもいかんだろう? 何、すぐに分かるさ」

工具、作りかけの製品、修理を依頼されたモノ。これら全てを奥の部屋に仕舞い込み、工房内はたちまち殺風景となつた。

「皆あ、奥の部屋で待機しててねえ。工房を頼んだよう! んじゅ ゲオ、行こうか。琉りやんとロッサちゃんは、その白い線より外側で待つってねえ」

アルがある扉の鍵を開けると、そこには地下への階段が。アルとゲオはそのまま階段を駆け降りて行つた。

「何があるの?」

「すぐに分かるさ……ほら来た!」

一方アルとゲオは階段を降りると、早速そこにあつた椅子に乗りこんだ。そして周りの壁についたスイッチを押すと、アルがレバーを動かして目の前にあるハンドルを握り、叫んだ。

「フロア・オープン! アンタレス・セットアップ!」

工房内全体に、大きな音と振動が響く。工房の床が一つに開き、中から巨大な影が浮かび上がる。やがて影は工房の中に姿を現した。

「これは……! ?」

「コイツはアンタレス。ここの中房の“最高傑作”さ」

アンタレス。砂漠を時速約100kmで走ることが可能なバギーである。屋根に付いたソーラーパネルでエネルギーを補完し、砂漠を約1ヶ月、フルパワーで走り続けることが可能なスーパー・マシンである。

「さ、早く乗つてえ！……よおし、アンタレス・ゴー！…」

シャッターが開き、アンタレスの巨大な姿が現れる。誰も通らぬ裏通りの砂の道を、一つのバギーが駆け抜ける。やがて周りの景色は建物の建ち並ぶ街から見渡す限りの砂漠へと変わつて行つた。

「どうだいロッサちゃん、初めてのバギーは、早すぎてクラクラしてないかい？」

「……それより何か乾く。琉、水ちょうどいい」

「はい、水。ゲオ、そもそも彼女は砂漠自体が初めてだぜ」

目指すはオアシス。囚われの家族を助け出し、メンシェの暴走を止めるために4人は砂漠を渡る。シリアスな状況下でもユーモアを失わない琉とゲオ。ハンドルを握りながら笑うアル。こういう時こそリラックスすることが大切だと、男3人は分かっていた。

「街がどんどん、小さくなつてゆく……」

だんだんと離れてゆく街。一方のロッサは水を片手に、周りの見渡す限りの砂景色を眺めていた。赤みがかった黒髪が風になびき、紅玉の瞳は何処か不安げな表情をたたえている。

（街から離れるのが不安か。そりゃそりだらうな……）

アンタレスはひたすらオアシスを目指して疾走した。ハンドルを握るアルの隣で、レーダーを持ったゲオが説明する。

「反応はオアシスに向かってまっしづらだ。しかしオアシスで何をする気なんだ？」

「ねえねえ、メンシエもバギー使うの？」

ロッサが聞く。

「そりゃ使うわ。でなきやこんな場所、移動出来ないぜ！ しかしすぐ追いつくと思つたんだがなあ……」

「どうやら違法改造したみたいだねえ。100kmは確かに速いかもしれんけど、法律ギリギリだからねえ。あつちは確実に150kmとか出しているよお」

「全く船にしてもバギーにしても……。何でも速けりや良いつてもんじやないのになあ。しかしエンジン壊れたりしないのか？」

琉はタメ息をつきながら言つた。あまりに高い速度を出すと、エンジンにかかる負担も大きくなる。メンシエ教徒は一体何を考えているんだ、と琉は思つた。

「とにかく、あとどれくらいでオアシスに着くの？」

ロッサはアルとゲオに聞いた。

「ん……あと3時間くらぁい」

約2時間が経過した時だつた。

「琉、のど渇いた……」

「ロッサはよく飲むねえ……。ちょっとずつ、だぞ?」

体質上、水を全く飲まないアル。時折飲む程度の琉とゲオ。一方のロッサは常に飲み続けていた。

「ロッサちゃん、水中には強いみたいだけど乾燥は苦手みたいだねえ。オイラとは正反対だあ」

「オアシスに着いたらまづ水分補給だな。……お、ビッシュアヒルはオアシスに着いたみたいだぞ!」

ゲオのレーダーを、琉とロッサが覗き込む。

「反応の移動が止まっている。……オアシスのふちつこかな? こんな所に何かあつたっけな……」

そう言つてゐる時だつた。ガタン! といつ音がしてバギーが停止したのである。

「アル、どうした?」

「田の前見て! 来るよー!」

『砂の地獄を突破せよ』序（後書き）

今回のタイトルは久々のオリジナルです。そして第七章は海ではなく、砂漠が主な舞台となります。果たして四人は、無事にオアシスに到着出来るのでありますか！？

『砂の地獄を突破せよ』 破（前書き）

アルとゲオの力作バギー、アンタレス。それに乗り、オアシスに向かう4人であつたが……。

『砂の地獄を突破せよ』 破

「一刻も早く、悪魔はせん滅せねばならん。アヤメ、手段を選んでる場合ではないのだぞ？……ん？」

突如、男の携帯電話が鳴り響いた。

「どうした。……何？ 突然ヤツが現れて妨害した？ そんでもつてこちらに向かっているだと！？」

同時刻、アルの工房を襲つたメンシェ教徒が琉によつて蹴散らされてゐた。男は携帯電話を切ると、狂つたように笑いこう言つた

「クカカカカカカ！ これは良い、飛んで火に入る夏の虫とはまさにこのことよ！ アヤメ、ヤツが、彩田琉之助が来るぞ。そこでお主には、侵入者を抹殺するという使命と権限を与える。良いな？ 存分に仇を討つが良い！！」

「……ハツ！ メンシェの神の……名のもとに」

それだけ言つと、アヤメと呼ばれた女は部屋から出て行つた。

「ついでだ。コントロール装置を起動させておいつ……。ククク、ヤツらめ、まさかハルム襲撃がメンシェの仕業とは思わんだろうな！」

薄暗い部屋に、男の不気味な笑い声が響き渡つた。

「あ、あれは！？」

ほぼ同時刻。あと少しでオアシスにたどり着く、そんな場所のことである。

「やつぱりいたねえ、ハルム。こうなつたら振り切るよー。」

バギーの前の地面が、ぼよよっと盛り上がっている。盛り上がりはバギーと一定の距離を保ちつつ、うろつろと動き回っている。地中に潜むハルムは、獲物の動きを伺うかのようにうろつと動き回つていて見えた。

ギュウンー！

レバーを切り替え、一気にアクセルを踏み鳴らすアル。その音に気付いたのか、ハルムはすぐにこちらに向かってきた。

「皆、武器を構えてえ！　アンタレスに追いつけるハルムなんざそういうそりないけど、万が一つてことがあるからねー！」

ハンドルを切るアル。砂を巻き上げ、砂漠に独特の曲がりくねつた軌跡を刻みつつ疾走するアンタレス。その座席から、琉はチエインに切り替えたパルトネールを、ロッサは戦闘用に黒く変形させた自らの腕を、ゲオは自前の盾とそこに取り付けられたバイルバンカーをそれぞれ構えていた。

「チツ、やつぱ海ん中じやないとパルトネールは反応せんな……」

琉はバギーの背後から迫る砂の盛り上がりを睨みつつ言った。海中作業用に作られた道具であるトライデントのハルムセンサーは、海水中に溶け込んだハルムの分泌物に反応するようになっており、

陸上では反応しないという特徴を持つ。これは、琉の持つパルトネールとて例外ではないのだ。

砂の中から迫るハルムであつたが、アンタレスには追い付けずどんどん遠ざかってゆく。4人がホッと胸をなでおろした、そんな時だつた。

「よし、振りきれた……つて、前にもいる！？」

ハルムは一匹ではなかつた。アンタレスの前に、盛り上がつた砂が更に3つか4つ、動き回つていたのである。瞬く間にアンタレスはハルムに包囲されてしまつた。

「武器、構えてえ。来るよー！」

次の瞬間。盛り上がつた砂を突き破り、先端に針を持つた紐状の生物が飛び出し、獲物を貫かんと襲いかかつて来た！ アルはハンドルを切つて攻撃をかわすと、ハルムのうちの一つ目がけて突進する。突進すると同時に4人は武器を手にバギーから飛び降りてすぐさま分散した。攻撃を食らつたハルムが倒れると、根元にはハサミと脚の付いた“本体”が蠢いていた。それを見たゲオが声を上げる。

「イグピオン！？ 馬鹿な、こいつら集団行動しないはずだぞ！？」

イグピオン。サソリとトカゲを合わせたような見た目が特徴で、本体を砂の中に隠し、約6mにも及ぶ巨大な尾を振りかざして獲物を狩るという習性を持つ。巨大な尾はムチのようによくしなり、先端には50cmにも及ぶ三角形の剣のような毒針を持つ。しかし本来は繩張り意識が強く、このように集団で行動するのはまず考えられないことであった。

「ロッサちゃん！ 」 いつは本体、 尾の付け根を狙つてえ！ ……
おわッ！？」

前述の通り、 地表に出ているのは尾であり操つてる本体は地中の
ごく浅い場所にに潜んでいる。 しかしそうやすやすと近づくことは
出来ず、 アルはイグピオンの針を鉤爪で引っ掛けで防いでいた。 し
かしこの尾にはもう一つの恐ろしい武器がある。 鉤爪に引っ掛けら
れた針。 しかしぬる瞬間、 その先端は真っ赤な色に染まつたのであ
る！

「うわあッ！ ……やつてくれたねえ！！」

このハルムの毒液には発火性があり、 これを利用して尾から高熱
の火炎を発射する力が、 イグピオンにはあつた。

アルは寸手の所で炎をかわすと引っ掛けた針をもつ片方の腕でへ
し折つて炎を止め、 そのまま相手の本体目がけて飛び込んだ。 そし
て着地すると同時に鉤爪を突き刺し、 本体を砂から引きずり出した
のである。 アルは、 刺した本体をそのまま引き裂いて消滅させた。

「オイラを焼いて食おうなんて、 1万年早いんだよお！」

一方のゲオは巨大な盾で針を防ぎ、 2体のイグピオンを相手に奮
闘していた。

「IJの盾は防火使用だ、 そんな炎なんかでやられるかよ！」

火炎放射攻撃を盾で防ぎ、 追い詰めるゲオ。 そして尾の根元を見
るや否や背中に取り付けた大筒に点火したのである…

「IJたちの火力はもつと凄いぜ、 覚悟しな！ シュート…！」

次の瞬間、ゲオの大筒が火を噴いた！ 大筒は尾の付け根に命中し、この個体は毒液に引火したのかたちまち爆発して消滅した。

「そこだッ！」

更にゲオはもう一体の懷に飛び込むと、本体目がけて右手のパイルバンカーを炸裂、刺し貫いた。急所を貫かれ、この個体もたちまち崩れるようにして消滅したのであつた。

「ロッサの“捕食”の邪魔はさせん、いくぞ！」

琉はそう言いながらチエインで対抗していた。炎をかわし針をかわし、本体目がけて分銅を発射させる琉。途端に尾の動きがおかしくなつた。

「パルトショック！」

たちまち鎖を介して高圧の電流が襲う。本体に強烈な攻撃を撃ち込まれ、イグニオンはたちまち消滅した。しかし更に他の個体の針が琉に襲いかかる。

「パルトネール・サーベル！…」

かわしきれない！ そう思つた琉はパルトネールをチエインからサーベルに変えて針を弾き返し、更に弾かれた針の付けね目がけて斬りつけ、切断した。

「トドメだ、パルトネール・シューター、パラライザー！」

後ろに飛び退き、琉はその傷口に赤い閃光を放つ。パラライザーとはいえ、発火性の強い物質には引火する。たちまちこのイグピオンは動かなくなり、炎に包まれて消滅した。

「琉ちゃん、こつちは片付けたよー！」

「そつちはどうだい！ ロッサちゃんは無事か！？」

「心配はいらん。あれを見てみな」

アルとゲオの二人が見た先、それは……。

「ハアアアアアアッ！」

ロッサの長く伸びた指が、4体のイグピオンを同時になぎ倒す。イグピオンが負けじと尾から炎を放つも、液化して逃れるロッサを捉えることが出来ない。次の瞬間ロッサの爪が、1体のイグピオンの本体を貫いた！

「よし！ しかし琉ちゃん、助けに行かなくて大丈夫なの？」

「彼女は今、イグピオンを“捕食”しようと試みている。消滅させるワケにはいかん、とにかく食わせないと……ん！？」

ロッサは自らの手で貫いたイグピオン本体を引きずり出し、そのままの口を近づけて吸い始めた。

「イグピオンを……食つているー？」

「以前話した能力だ。彼女はハルムを食べ、その形質を取り込むと

いう力を持っている。今までオドベルスの翼しか持つていなかつたが……」

ロッサに吸い尽され、イグピオンの体が灰のよう崩れ去つてゆく。そして、

「はう！　う、う……！」

「おい、本当に大丈夫なのか！？」

以前にオドベルスを捕食した時と、同じ反応。ロッサは胸の辺りを押さえてうずくまり出した。と、そこに、残つた3体のイグピオンの容赦のない火炎攻撃が襲いかかる！

「しまつた、この反応のことをすっかり忘れていた！！　ロッサア　――ツ！？　」

『砂の地獄を突破せよ』 破（後書き）

ロッサの運命やいかに！？ そして今回登場のイグピオン、モチーフはそのままサソリです。W

『砂の地獄を突破せよ　急（前書き）

オアシスに急行する琉達一行。途中、砂漠にすむ凶暴なハルム・イグピオンの襲撃を受けた。珍しく集団で行動するイグピオンに苦戦する一行だが、ロツサがついにそのうちの一体を捕え、食らい始めた！　しかし直後……。

『砂の地獄を突破せよ』 急

慌てて駆けつける琉、アル、ゲオ。

「くそっ、パルト、ブラスター！…」

琉はパルト・ネールに取り付けられたトリガーパーツのレバーを切り替えてブラスター・モードにし、駆け寄り、照準を合わせ、両手で構え、引き金を引くとたちまち青白い光弾がイグピオンの体を貫き、木端微塵に吹き飛ばした。

「でやあッ！ ロッサちゃん、無事かあい！…？」

「ふんッ！ くそ、生きててくれよ……！…」

アルとゲオもそれぞれ撃破し、3人はロッサに近づこうとした。すると、

「おわッ！？ 何、まだいただと！…？」

予想もしてなかつた事態。何と更に5体ものイグピオンが出現し、その尻尾をこちらに向けてくる。

「食う気まんまだぜ、こりや……」

「こんなの、絶対おかしいよお！…？」

再び構える3人。アルとゲオが口ぐちに言つた。

「アル、ゲオ、すぐにアンタレスへ走ってくれ！ 僕がその間にロツサを助け出す！！ 良いかい！？」

「了解……」

琉はパルトネールを構え、迫りくるイグピオンを待ち構えた。

（あと3m……2m……1m……今だ！）

距離を読んで、琉が引き金を引く。ドオオオン、という音と共に放たれた光弾が、1体のイグピオンの体を貫き爆発させた。続けざまに琉はもう一体に狙いを付けると、これまたパルトブラスターで爆発させた。

「躊躇してゐる場合じゃねえ、もつ一発行くぞ！……何い？」

距離を読み、引き金を引く琉。しかしパルトネールが反応しない。それもそのはず、タダでさえ消費の激しいブラスターを、立て続けに撃つたせいでエネルギーを使い果たしてしまったのである。

「アギジャベー（くそつー）！」

急いで電池を詰め替える琉。相手は、すぐに近くに来ていた。それもそのはず、本来射撃が苦手な琉はエネルギーを無駄にしないためにも一定の距離にまで誘いこんで撃つというクセがあるので。しかし今回はこれが返つて仇となつてしまつた。電池切れのトライデントは変形も出来なくなり、ただ重いだけの棒となつてしまつのである。そして非情にも、琉に毒針が迫る。万事休す、そう思われた時であつた。

ヒュウン！

不意に琉の体が宙に浮いた。そして琉に迫っていた尻尾を、何と同じ形をしたモノが弾き返している。琉は一瞬、何が起ったのか理解出来なかつた。

「琉、大丈夫！？」

「……ロッサ？ ロッサなのか！？」

声に気付き、視線を向けた琉の目に最初に写つたのはロッサの顔であつた。眉間が開き、第三の目が輝いている。彼は、翼を開いたロッサの腕で抱えられていたのである。そしてそのロッサの腰から、何かが生えている。その先にあつたのは……

「イグピオンの尻尾……そ、うか、取りこめたのか！」

そう言われてロッサは、自分の腰に生えた尻尾を自慢げにくねらせた。形の良い彼女の美尻と相まって、非常に妖艶な動きを見せている。長さこそ4mとオリジナルと比べて短いがその力はむしろオリジナルを遙かに凌駕しており、弾かれた個体はそのまま転倒してしまつっていた。ロッサは琉を地面に降ろすと、尻尾を掴んでオドベルスに向けた。

「琉、下がつて！」

次の瞬間。ロッサの尻尾から真っ赤な炎が噴き出し、イグピオンの体を包み込んだ。真っ赤な炎に包まれたイグピオンの体はたちまち爆発を起こし、跡形もなく消滅した。

「ハアアアアアツー！」

ロツサはそのまま残りのイグピオンに向かつて火を放ち、たちまちイグピオンの群れは爆音とともに跡形もなく消え去った。

「琉ちゃん！ ロツサちゃん！ 早く乗つてえーー！」

全滅したのを見計らい、バギーで駆けつけたアルとゲオ。すぐさま琉とロツサは乗りこむと、再びハルムが出ないうちにそこを後にしてた。

「はあ、はあ……。何とか脱出来たな……。ロツサ、よくやつたぜー！ ……つてロツサー！？」

琉はすぐに異変に気が付いた。ロツサはアンタレスの座席に着いた瞬間に氣を失い、倒れ込んでいたのである。

「またか……一応、脈は大丈夫みたいだな。お疲れさん、オアシスに着いたらたつぷり水を飲ませてやるからなー！」

そしてイグピオンを退けて1時間後。やがて砂景色から、再び町が見え始めた。そして町の真ん中には大きな湖が、透き通った水をたたえている。

「よし着いた！ 琉ちゃん、ロツサを起こしてやりなーー！」

「着いた！？ おいロツサ、オアシスに着いたぞ！ ……君、寝顔可愛いじゃん」

オアシスを取り囲むようにして出来た町。その建物の間をすり抜

けて、アンタレスはオアシスの岸に停車した。ゲオに言われ、琉はロッサを揺すつた。

「ん……琉……」

「オアシス、着いたぞ。……あ、って何だよ、いきなり抱きつくんじゃねえよー。どこ触つてんだコラーー?」

寝ぼけたロッサに抱きつかれ、琉はあわわと慌てふためいた。

「相変わらずウブだねえ」

「あ……着いた……? ……お、み、水!」

田を覚ましたロッサ。そしてオアシスが田に入るや否やアンタレスから飛び降り、真っ直ぐに駆け寄ると大きな水音を立てて飛び込んだ。

「ロッサ、君かなり大胆なことするねえ……」

相当乾いていたのか、ロッサはオアシスの水の中ではしゃいでいた。心なしか、ロッサの肌が先程よりも艶とハリを増してるように見える。

「ロッサ、そろそろ上がっておいで」

そう言われてロッサは、オアシスの岸に上がって来た。濡れた髪が艶やかに輝き、彼女の肌は戦闘中と比べて幾分キレイになつたかのように見えた。

（これでハルムの形質が二つになつたか。オドベルスの翼にイグピオンの尾、どちらも強力なモノには変わりないな）

何にせよ、これから活躍に期待しよう、と思つ琉なのであった。
そしてほぼ同時刻……。

「フツ、やはり突破されたか。所詮ハルムはハルム、集団行動させても天敵には勝てんということか……」

薄暗い部屋で男が一人、怪しげな機械を触っている。口元には怪しい笑みを浮かべ、目の前のモニターを見ていた。

「嗅ぎつけた所でどうにも出来まい。貴様らにこの、メンシェ教地下聖殿を攻略することは不可能だ。四人ともソディアの砂に埋めてやろう、覚悟するんだな……！」

男はモニターの画面を切り、同時に怪しげな機械を素手で叩き壊した。そして部屋を出ると、そのまま階段を下つて行く。するとそこには大量の、ベルトコンベアーに向かうト、ヴエルクとディアマンがいた。彼らは皆、奇妙な腕輪と脚輪を付けられており、ディアマンの中には鱗が一部砕けている者もいる。そして所々、フードの者達が鞭を持って睨みを利かせていた。

「メンシェの同志達に告ぐ！　この地下聖殿、並びに地下聖房を汚さんとする輩が現れた！　そのうち一人はかの恐るべき悪魔ヴァリアブル、そしてもう一人は悪魔に魂を売つてヒト族を裏切つた極悪人、彩田琉之助だ！　ただちに亜人種共を牢に戻し、臨界体勢を取り！　メンシェの神の、名の下にッ！！」

「メンシェの神の、名の下にッ！！」

フードを被つた者達が一斉に答え、トヴェルクとティアマン達を引っ張り何処かへ連れ去り始めた。中には鞭で叩きつける者までいる。

「そこの五人、私と共に来い！」

「ハッ！」

男はフードの者を五人連れ、更に地下室へと下った。中は鉄格子の部屋がいくつもあり、トヴェルクやティアマンといった異種族の女性と子供が入れられている。絶えずすすり泣きが響いており、彼女らもまた、腕と脚に輪つかが付けられていた。

「コイツらだつたか、アルビゲオの嫁と子供つていつのは」

「はい、ビショップ・ワインダー様」

ビショップ・ワインダーと呼ばれた男は鉄格子の奥ですすり泣くトヴェルクとティアマンの母子を見降ろしつつ言つた。

「“浄化室”へ連れて行け！！」

五人が鉄格子を開けて入ると、中にいた母子達は怯えて奥へと引っ込んだ。しかし無情にも引きずり出され、哀れな母子は奥の部屋へと連れ去られていった。

「ふつふつふ、ヤツらなら真つ先にあの部屋を嗅ぎつけるだらう。トヴェルクの女に付けられた小細工に、我々が気付くはずがないとでも思つたのか？ やはり所詮は亜人種の知恵か……」

ワインダーはロープの中から板を取り出した。中央にオープが
はめ込まれ、周りを取り囲むように毒蛇が描かれている。

「待つておるぞ、反逆者ども……！」

『砂の地獄を突破せよ』 急(後書き)

ロッサに待望の新能力！ そして遂に、命令を下していた謎の男の名前が明らかに！！ まあ次回、一行は家族を救いだすことは出来るのか！？

（次回予告）

「こつちは忙しいんだ！ コイツは済れるぜ、覚悟しろよ……

「わたしに良い考えがあるんだけど」

『地下聖殿に潜り込め』序（前書き）

（前回までのあらすじ）

手掛かりを求めてアルカリアに来た琉とロッサ。探索の途中でテロ宗教組織・メンシェ教が暴走し、その魔の手は琉の知り合いである工房の一人の家族にまで襲いかかった。その後を追い、オアシスに向かつた一行は途中で恐るべきハルム“イグピオン”的襲撃を受ける。その不可解な行動に翻弄される一行。しかしロッサがその能力を吸収して一気に形勢逆転、無事オアシスに着いたのだった……。

『地下聖殿に潜り込め』序

ソディア島・オアシス。表面という表面が砂漠に覆われたこの島に置いて、貴重な水源である。この島にはこのオアシスの周りと海岸にしか町がない。そして今、オアシスの付近は静まり返っていた。一行はレーダーの反応を追い、オアシスの町外れにバギーを停めた。反応が正しければ、この付近にアルドゲオの家族がいるはずである。青いスーツに身を包んだヒト族の青年　琉は、オアシスの町の様子について言った。

「相當にハデにやりやがったみたいだな、こっちでも……。まさか、さつきのイグ・ピオンもヤツらが差し向けたんじゃなかろうな？」

「まさかあ。ヤツらはヒト族至上主義でしょ、ハルムなんか生かして放つとくワケが……」

「あつ、そういうえば！　琉、ちょっとこいつち来て……」

ロッサは何かを思い出すと琉を呼び、その豊満な胸の間に手を入れて何やらもぞもぞと探し始めた。

「ロッサ、どうした……っておい、一体何やつてんだ！？」

不意打ちセクシーショットを見せつけられ、思わず赤面する琉。心なしか、ロッサの胸はただでさえ豊満なのにも関わらず、今の琉には更に大きくなっているように見えた。そんな琉にお構いなく、ロッサはその魅惑の谷間からコイン状の物体を取り出して琉に見せた。

「さつきイグピオンを食べた時に何か余計なモノが入つてたの。これなんだけど……琉、何で顔そらすの？ しかも真っ赤になつてるけど」

「……全く、君には“恥じらい”つてモノはないのかね。つてコレか？」

琉はロッサからモノを受け取つてマジマジと見た。

「パツと見、ゲオの使つてる追跡コインにも見えるが……。アル、専門家の出番だぜ」

琉はアルにこの奇妙なコインを投げ渡した。この世界にはコイン型のマイクロマシンが様々な用途で使われている。しかし琉は、その専門家ではない。やはりここは制作者に任せるのが良いだろう、と彼は考えたのだ。

「はいよ、どれどれ……。うーむ、腐食がひどいねえ」

このコインはロッサがイグピオンを食つた際に出て来たモノ、即ちロッサの体内で溶け残つたモノである。そのため、何とかコイン型マイクロマシンとしての外観を留めているだけで内部はほぼダメになつっていた。

「これがイグピオンにへりついてたのかあい？」

「うん。何か美味しいないと困つたら……」

つむ、と言つてアルは再びコインを睨んだ。

「ひよつとして、これをハルムにくつ付けて操つてたのかなあ。でもそんなの聞いたことないよ。ゲオー、分かるー？」

「ん?
見せて見せてー」

アルはレーダーを監視しているゲオにコインを渡そうとした、その時だった。

「あ、メンシエ教徒が来るよーー！」

ロッサが気付き、四人はすぐにバギーの影に隠れた。隠れながらも、ゲオはレーダーを注視している。

「えりや、ひまつぶされていなこらし。ちよつへり様子見と
行ひゆか

琉はバギーの影から、フードを被つた男を観察し始めた。ロッサも琉の背後に隠れつつ、様子を見ている。

に向かつた。看板には“落下注意”と書かれている。教徒は周りをキヨロキヨロと見回すと、おもむろに看板を引き抜いた。

「うわ……やりたい放題だな、一いつ。せうせう。」

琉達が見ている中、彼は何やら引き抜いた跡に手を突っ込み、その後看板を戻した。するとどうだろ、看板の近くの地面が割れて地下への階段が現れたのである！

「琉、これって……」

「間違いねえ、入口だ！　よし、見てる……」

琉は近くに落ちていた石を拾つと、思いきりメンシェ教徒目がけて投げつけた。

「痛えッ！？　誰だ！？」

階段を降りていたメンシェ教徒は、そのまま地表に戻つて来た。そして石の飛んできた方向、バギーに向かつてきた。

「何処のガキだが知らんが大人しく出て来い！　罰を『えてやる！』

「はいはい、出てきてやるよ出てきてやるよ。大人しくないけどなー！」

その言葉と同時に、メンシェ教徒の首に、サーベルとなつたパルトネールの先端が突き付けられた！

「うつー！？　貴様、何をやつてるのか……分かつてるのか……」

「説教なんざ興味ないね。……アンタ達の仕業つてのは分かつてゐんだ、この島の住民達は一体何処にいる！？」

琉は語氣を強め、声を低めてメンシェ教徒に言つた。更にサーベルの刃を傾け、袈裟掛けの形にして押し当てる。刃を引けばこのメンシヒ教徒は、たちまちバッサリと斬られてしまうだらう。

「お、教えるものか……殺すならせつと殺せーー！」

「寝言は寝てから言え、アンタにはまだ聞きたことが山ほどあるんだ！」

「ゴォッ！ といつ音と共に琉の脚が鳩尾に入り、メンシェ教徒はその場で倒れ込んだ。つかさず琉はメンシェ教徒の胸ぐらを掴み、その首に刃を押し当てつつ言った。

「貴様……中坊の分際で……」

「これでも一応25なんだが。あと、聞くのはこっちで答えるのはそっちのハズなんだが？ ……あの入口はどうやって開けた？」

琉が問う。しかし敵は口を開かずして一文字。

「ロッサ、ちよつといつち

琉はロッサを呼び、そつとその耳に何かを吹きこむと、ロッサはメンシェ教徒のアゴを指で支えて上に向け、その顔を覗き込んだ。そしてロッサと目が合った途端に、メンシェ教徒の顔から見る見るうちに血の気が引いていくのが見えた。

「あ、ああああ、あ、悪魔……！」

「ふふふ、悪魔なんて失礼ね……」

ロッサはそつとローブに指を這わせた。するとその軌跡を辿るかのように、ローブの生地が裂けてゆく。その裂けた生地から、液化したロッサの手が服の中に入り込んだ。

「ふふふ……どう？ 神の教えを破りながら死ぬ気分は……」

「や、やめてくれ……く、食われるのだけは……！」

メンシHの教義では、悪魔ことヴァリアブールのエサになつて死ぬことは絶対に許されないとされている。つまり、相手の兵糧にだけはなるなどということである。そのため、ただ琉に斬り殺されることは大丈夫でもロッサに食われるということに関しては凄まじいまでの恐怖を感じるので。この異常な感覚、言うまでもなく薬物による洗脳の影響である。

「……なんてね、すぐには食べてあげない。まずは料理をしないと、ねえ？」

ロッサの猫撫で声が、メンシH教徒の耳に突き刺さる。

「あああああ、ああっ！？」

ロッサの液化した腕が、メンシH教徒の体中をねつとりと這いまわる。ローブを裂かれ、服に仕舞い込んでいた武器が次々に外に飛び出て来た。スタンガン、拳銃、聖弾、ナイフ……一通りの武器を取り上げると、ロッサは手を元に戻して服の中から引いた。

「もし素直に答えるのなら、ロッサを止めてやつても良い。彼女は俺の言つことなら聞くからな、一通り吐いてくれたら命だけは助けてやる。どうだ？」

琉がそう言つと、メンシH教徒は黙つたまま何度もうづいた。
恐怖で引きつった顔のまま、その眼は明らかに“助け”を求めていた。

「じゃあ聞くぞ。トヴェルクとティアマンは何処にいる

「ち、地下4階の牢獄だ……」

それを聞くなり、琉は携帯電話を取り出して素早く書き取った。

「入口はどうやって開け閉めすれば良い?」

「か、かかか看板の下に、ハンドルが……それを半分ひねれば開くはずだ。閉める時は内側から半分戻せば良い、それだけだ……」

ほほう、といつ琉はメモを取る。

「何故この島のトヴェルクとティアマンを拉致した? 何が目的だ?」

「そりいや、オイラ達以外の職人はほほ連れて行かれたらしいねえ。一体何がしたいんだあ?」

メンシェ教による異種族狩り。その規模は留まるなどを知らず、このソディア島のトヴェルクとティアマンはそのほとんどが何処かに連れて行かれていた。町が静まり返っているのはそのためである。

「そ、それは……」

流石のメンシェ教徒も口を閉ざした。どうやらかなりの極秘項目だつたらしい。琉は黙つてロッサに目を合わせ、そのまま片眉を上げた。

「ふふふ、言わなくて良いのよ、イヤな」とは。ゆつくつと溶かし

てあげる……」「

「や、やめてくれ！ 頼む、食われるのだけは、食われるのだけは
イヤだ……！」

「さきついた声で、メンシェ教徒は震えながら懇願した。と、その
時である。

「……ん？ おい、レーダーの反応が動いたぞ！ 何処かに連れて
行かれるみたいだ！－！」

『地下聖殿に潜り込め』序（後書き）

今回の章は久々にロッサの怪演（？）が冴えていますw しかし琉も琉で何を吹きこんだのやら……。さて、第八章のタイトルもネタ抜きのオリジナルです。

『地下聖殿に潜り込め 破（前書き）

地下聖殿への入り口を見つけ、更にメンシェ教徒を一人捕えた一行。琉とロッサによる尋問の結果、連れてかれた場所までは判明したのだが……。

『地下聖殿に潜り込め』 破

琉とロッサが問い合わせ中、レーダー装置を見ていたゲオが声を上げた。

「……悪運の強いヤツめ。質問を変更するぜ、連れて行つた一種族の方達をどうしてる? 牢に閉じ込めて……それだけか?」

焦りの表情を浮かべ、琉はロッサを止めて別な質問をした。

「へ、部屋……。“浄化室”だろ? な多分……」

「浄化室? 何なんだその部屋は

アルとゲオの顔に、一瞬だけ電流が走つた。嫌な予感しかしない言葉である。

「浄化するの? ……汚らわしい亜人種のヤツらを、聖なる煙でな……」

「…

「何だつて? -?」

四人は同時に口を開いた。

「聖なる煙……といつことは、浄化室はガス室か! -?」

「ま、そういうことだ。あと30分で浄化が開始されるはずだな……」

「…

四人の顔から血の気が引いた。

「ガス室だと……まるでかつてのラティア帝国じやねえか……」

「ラティア帝国とはこの世界で最も古い国である。現在は遙か北方のポロニア島とラドン島にのみ領土を持つが、現在は鎖国しており入ることさえままならない。遺跡文明の時にはこの世界の3分の1を占めていたと言われる一方、領土だった場所の遺跡調べるとガスボンベの付いた部屋や奇妙な形をした骨が見つかるというダークサイドに溢れた国もあるのだ。

「チツ、こつしちゃおれん！ 行くぞー！」

ゲオがレーダー片手にいきり立つ。三人も同調した。

「とつあえず、ロイツは縛つてその辺の倉庫にでも放り込んでおこう。ロッサ、いつもの」

琉がそう言つと、ロッサの全身がたちまち液化し、見る見るつちに形を変えた。そして……

「じゃ、しばらくは彼女がアンタの代わりをするから。そこで大人しくしてな」

四人はすぐに入口まで走つた。だが、

「しまつた、このまま行けば確實にやられる……特にアルとゲオは田立つしな……」

「ロープ剥ぐしかないねえ。ただオイラだと服が鱗で破れちゃうよ

「お

「琉、ここからはじつ？」

ロッサが何かを指差している。

「これは……通気ダクトか！ でかしたぞロッサ……」

琉がカバーを外すと、ロッサが早速入り込んだ。入り込むと同時に姿がいつも美女の姿に変わる。こちらとしてはなるべく波風立てずに行きたい所であり、その上にこういつた狭いところは彼女の得意分野である。そして琉も続いて入り込んだ。だが、ここで問題が一つ。

「うへえ！ ロッサちゃんは余裕でも琉ちゃんじゃ肩幅、ギリ、ギリじゃないかあ！ こりゃオイラ達じやあ無理だよお……」

その様子を見ていたアルがそう言った。アルとゲオは琉よりもガタイが良く、とてもこの通気ダクトをくぐれなかつたのだ。

「ええッ、マジかよ！？ じゃあ一人は外で待つしかないか？」

するとゲオが、懐からあるカードを取り出して琉に渡した。

「携帯電話に差せばレーダーが表示されるはず。これを使って……オレ達の家族を頼む！」

琉は早速携帯電話にカードを差しこんだ。すると、たちまちその液晶画面に座標とポインターが表示されてゆく。

「オイラからもよろしく頼むよ！ とりあえず、こっちは外で待機してアイツを見張つてゐるから。何かあつたら連絡して、強行突破なら得意だからー。」

「そうか……。ありがとう、任せてくれ！」

かくして、琉とロッサが潜入を開始したのであつた！

「よし、行こうかロッサ！ ……しかし暗いな、つと」

琉はパルトネールと携帯電話を取り出した。その液晶画面に、あのレーダーが表示されている。更にパルトネールの先端を光らせ、奥を照らした。が……

「あーしまつた、俺が前に行つた方が良かつたか。ロッサ、前見るかい？」

「ちやんと見えるよー！ そつそつ、この先下に落ちてるみたい」

ロッサの目は暗闇でも利くように出来ている。琉はパルトネールの光でロッサの後を付いて行くことにした。

（それにしても、ロッサは胸だけじゃなく尻もキレイな形だよな……つて何考えてんだ俺！？）

狭い空間、真っ暗闇、あまつさえ男女が一人きりである。こんな感情を抱くのもムリはない。体の奥から熱くこみあげそうになるモノを押さえこみつつ、琉はロッサの後から付いて行つた。

やがてロッサの言う、下に落ちる地帯に着いた二人。垂直に落ちるダクトの中を、液化してスルスルと降りてゆくロッサに対し、腕

と脚で突つ張りながら慎重に降りてゆく琉。階層を確認しながら、二人は降りて行つた。

「エリが一番下みたい。深さからして4階だと思つけど……」

「そうか、だつたら良いんだが……。肩幅キツいぜ」

ギリギリの肩幅の中を狭そうに下る琉。しかし問題はこの後だつた。

「うへえ！？ まづい、流石にこの隙間は通れねえ！！」

レーダーの反応を追つてダクトを通る二人。ついに、ポインターに最も近い出口を発見したのである。だが、それは……

「トイレの通気口、何で入口みたいにしなかつたんだ？」

二人は念願の出口を前に立ち往生、ならぬしゃがみ往生していた。今更ながらご都合通りに行かぬ結果に嘆く琉。だが、同じく出口を見ていたロッサの脳裏にはあるアイディアが浮かんでいた。

「ねえねえ琉、わたしに良い考えがあるんだけど」

「お？ え、何々ビツかるのビツかるのー！？」

思わず食いついた琉。まさに地獄に仮、この時の琉にはロッサが天使か、ひょっとすれば女神に見えていたであらう。

「んー、ちょっと息を止めといてもらえむ？」

「はいはい、了解……んんん！？」

ロッサの指示通り息を止めた琉。するとロッサがスルリと琉の背後に回り込んでがつちりと背中に抱きつき、何と液化しだしたではないか！

「んふふふふふーー？」

息を止めたまま声を漏らす琉にお構いなく、液化したロッサの体が琉の体という体全てを覆い尽した。そして琉を取り込んだまま、蓋を外した通気口に近寄るとそのまま自らを潤滑剤にして一気にすり抜けたのである！ ボテツ、という音と共に一人はトイレの個室に落下した。

「よつ、と。ビツ、ちやんと出られたでしょ」

琉から素早く分離し、ロッサは得意げにそう言つた。

「よ……よくやつたぜロッサ……」

琉は半ば放心状態となつていた。落下先の様式便器に座りこみ、その青い目は何処か宙を見ている。そして何故か、全身がカタカタと震えていた。

「琉、大丈夫？ 一応、溶けたりしないよつに気を付けたんだけど」

「あ、ああ、大丈夫だ問題ない……。それより、時間はどれくらい経つたんだ？」

ロッサに手を取られ、琉はやつと立ち上がった。

（やば……。一瞬だけ、マグロに丸のみにされるイワシの気分が味わえたぜ……。しかも服に、妙に甘ったるい匂いがしみついたな。あとロッサ、胸どころか身長までも伸びてないか？）

こんなことを思いつつ立ち上がると、琉は携帯電話を取り出して時間を見た。

「20分経過、残り10分か。急ぐぞー！」

琉とロッサは壁伝いにしつつトイレを後にした。レーダーを頼りに走り抜ける二人。地下室独特的の薄暗さが、更に緊張感をかきたてる。案の定、招かれざる客に気付いたメンシェ教徒がこちらに向かってきた。

「パルトネール・シユーター！　パラライザー！！」

琉はパルトネールをシユーターに変形させ、向かつてきた教徒を撃つた。しかし奥にはまだまだ教徒がいる。琉はロッサを後ろにかばいつつ、トリガーパーツのSスイッチを入れて構えた。

「こっちは忙しいんだ！　コイツは痺れるぜ、覚悟しろよ……。パルトスピайдー！！」

声を当て、琉は武器を持つたメンシェ教徒達の頭上目がけて赤い光弾を放つた。すると光弾はメンシェ教徒達の頭上でクモの巣状に広がり、そのまま覆いかぶさつたのである。

「わ、何だこれは……うつ！？」

たちまち絡め取られるメンシェ教徒達。パルトスピайдーはパラライザーのエネルギーを投網状にして放つ技である。数体の敵の動きをまとめて封じることが出来る一方、パラライザー10発分のエネルギーを消費する上に大きなスキが生じるために奥の手として取つてあつたのだ。ある程度まとまつた人数を相手にする際に役立つ技である。

「この奥か？」

一人は牢獄があると思しき部屋のドアまでたどり着くと、琉はパルトネールを、ロッサは戦闘用に変化させたその腕を構えた。

「ロッサ、準備は良いな？ 僕がヤツらを引きつけるからロッサは中にいる人達を出してやつてくれ、良いね？」

「うん、分かった！」

「よし、なら……。3……2……1……！」

カウントダウンを終えると同時に琉はドアを蹴り倒して突き進んだ。突然の来客に驚く囚人達。琉は見回りをしていた教徒に早速バラライザーを浴びせてそのロープを強奪、それを着こむと更に突き進んで浄化室の扉を探した。一方のロッサは鉄格子の鍵穴に液化した指を入れ、合い鍵にして次々に開けていった。

「ロッサ、浄化室が見つかったぞ！ そつちはどうだ？」

「全部開けたよ！ 面倒くさいから途中から全部溶かして回つたけど」

「まあ、その方が早いよな。さて、この部屋だ。」親切に堂々と淨化室と書いてやがる。遠慮なく入らせてもらおう」

『地下聖殿に潜り込め 破（後書き）

今回の二人はアグレッシブですw ロッサもかなり役立つ子になりました。さて次回、いよいよ突入です！

『地下聖殿に潜り込め』 急（前書き）

通気ダクトを通り、潜入する琉とロッサ。遂に一人は浄化室の場所を突き止めた！

『地下聖殿に潜り込め』急

「何故だ？ 何故ここまでする必要がある？」

「決まつているだろ。 ただでさえ汚れたヤツらが、 一いつ切さいの言つことを聞くと思うか？ だから浄化するのだ」

浄化室。 その中で、 女と一人のメンシエ教徒が言い争つていた。

（20分ほど前）

「納得いきません！ 何故これをする必要がー！？」

浄化室。 特殊な強化ガラスの壁によつて二つに遮られた、 異質な部屋。 片方には様々な機械やガスボンベが置かれ、 ガラスの向こうには何もない。 そんな部屋で、 ある女性の怒りの叫びが響いていた。

「仕方あるまい、 あの生意気なト・ヴェルクとアルヴァンを従わせるにはこうする他ないので。 そしてヤツらは間違いなく、 この部屋に来る」

もう一人、 豪奢なローブを着こんだ男がそれに答えた。 そして懷から、 あるコインを取り出して女に見せた。

「ヤツらの悪知恵だ。 こんなモノを家族に取り付けておつた。 だから間違いなくこの部屋が分かるだろ。 そしてもし来なれば30分後に浄化しろ、 分かつたな！？」

一人が話す傍らで、 数人のメンシエ教徒がティアマン、 及びトヴ

エルクの母子をガラスの向こうへと押し込んでいた。最後の一人を蹴り込むとつかさず鍵を掛け、メンシェ教徒の一人が言った。

「ビショップ・ワインダー様、準備が出来ました！」

「よし、お前とお前、あとアヤメはここに残れ。あとの3人は見回りを任せる。良いな？」「インはあえてここに置いておこう」

ガラスの中では、アルヴァンとトヴェルクの母子がガラスを叩いて懇願していた。しかしその声は届くことがない。というのも浄化室のガラスは防音使用で、かつアルヴァンやトヴェルクといった腕力に優れた種族でも割れぬほどの厚さで出来ているためであった。ワインダーは機械に付いていたマイクを取るところ言つた。

「よく聞け亜人種ども。運が良ければ誰かが助けにでも来るだろ？だが！ あと30分したらそこのパイプから聖なる煙が噴き出され、お前達の魂を浄化するだろ？」

マイクのスイッチを切ったワインダー。そしてアヤメの方を見るところ言つた。

「良いか、ヤツらが来たらまとめて始末するのだ。決して生きて帰る！ メンシェの神の、名の下に！…」

「メンシェの神の名の下に！…」

（回想終）

「おい一人とも！ こんな所で言い争つてどうする、ヤツらはいつ現れるか分かつたモンじゃないんだぞ！…」

もう一人いたメンシェ教徒が、一人の言い争いを止めた。

「こんなのは、絶対おかしいよ……」

アヤメはまだ不満を漏らしていた。そんな折であった。

ガンツ！ ガンツ！ ガンツ！ バタンツ！！

「ん！？ 嘩をすれば来たか！！」

扉を豪快に蹴り倒し、青いスーツの男と赤いドレスの女が駆けこんできた！ 男は入るや否や銃を構え、一人を目がけて赤い閃光をぶつ放した。

「間にあつたな！ ロッサ、鍵を開けろ！…」

「OK、まかせて琉！」

ロッサはすぐさま鍵穴に指を入れ、回そうとした。

「させるか！…」

「危ない！…」

アヤメのスタンガンがロッサに襲いかかる。しかしその腕を、琉の手が掴んで止めた。

「貴様は彩田琉之助！ この間の屈辱、晴らさせてもらひつい…」

アヤメは拳銃を取り出した。中にはあの聖弾が詰まっている。

「誰かと思えば」の間の小娘か。親父は元気か！？」

琉はシューーターを構え、アヤメと対峙した。お互に銃を構えて睨み合い、こわばつた指がトリガーにかかる。が、その時だつた。

「残念、扉なら既に開いたぜ。遅かつたようだな！」

琉はシューーターを構えたまま、アヤメにそう言い放つた。

「何！？」

「スキあり！？」

まさに一瞬のスキ。琉はすぐさまトリガーを引くと赤い閃光がアヤメ目がけて襲いかかつた！ が、

「うがあッ！？」

「そつち！？」

当たつたのは別のメンシェ教徒だった。不意を突かれたアヤメは思わずメンシェ教徒の方を見た。そして同時に、ロッサは扉をこじ開けたのである。

「チッ、外したか。ロッサ、彼女らを頼む！ ……さて、これだけ終われば用済みだ。あばよ！？」

琉はSスイッチを入れ、相手の頭上に狙いを定めた。

「パルトスパイダー！……何！？」

ドヤ顔を浮かべつつトリガーを引く琉。だがしかしパルトスパイダーは発射されなかつた。そしてトリガーパーツを外そくにも、パルトネールが変形しない。

「馬鹿な！ これはどういうことだ！？」

『ククク、引っかかつたな！ 異端者よ』

たちまち浄化室内に声が響き渡つた。

『ようこそ、我らが地下聖殿へ。教えてやろう、その扉にはジャマーが仕掛けである。開けることによつてスイッチが入り、トライデントの機能を全面的に封じてしまつのだ。それだけではないぞ？』

「何い？ ……あ、熱ッ！…』

なんとパルトネールが高熱を発し、琉は思わず手を離した。幸いにも琉の手は火傷していなかつたが、落ちたパルトネールは熱によつて赤くなつてゐる。

「そりが、お前達の狙いは最初からこの俺とロッサだつたといつワケか！」

『その通り！ 皆の者、この一人を捕えよ！ 殺してもかまわん、トライデントのないコヤツなど怖くもなんともない、やつてしまえ！』

牢獄からの扉から、数人のメンシェ教徒がなだれ込んできた。そしてアルとゲオの家族達を連れて再び牢へと連れて行こうとする。

「……全くお前らとこうやうやうらは。一体いつ、俺が武器なしでは何も出来ないへナチヨ」だと言つたんだ？」

琉がそう言つと、彼を取り囲むメンシェ教徒達が笑いだした。

「負け惜しみか、彩田琉之助！ 虚勢を張つても無駄だぞ？」

「だつたらお前、かかつて来い！」

琉は声を上げた者を指差し、挑発した。挑発されたメンシェ教徒はナイフを抜き、琉に襲いかかる。

「面白い、やつてやうひじやねえか……ぐふつ！？」

ナイフの一撃をかわし、琉の手刀が彼の首筋にヒットした。そして琉は腰だめに拳を持って行き、そのまま獨特の構えを取つたのである。

「何だその構えは！？」

「お前達、”空手”も知らんのか？ だつたら教えてやるからかかつてきな！」

取り囲んでいたメンシェ教徒が一斉に琉目がけて襲いかつた！ 琉は早速近くにいた者に一撃食らわせると、背後にいたメンシェ教徒を回し蹴りで一掃、更にその場で高く飛び上がるなり正面にいたメンシェ教徒の顔面を蹴り倒した。倒されたメンシェ教徒に巻き

込まれ、背後にいた者達までもが倒れて行く。

「ロッサ！ あの扉の何処かにジャマー装置がある、破壊してくれ！」

「任せて！」

そう言われるとロッサは液化し、何人かのメンシェ教徒に体当たりを食らわせながらあの扉まで向かつた。数に任せて攻撃するメンシェ教徒。しかし、この比較的狭い浄化室において、大量に戦闘要員を繰り出したのはメンシェ教側の判断ミスだったと言わざる得ない。地の利は完全に琉にあつた。

「これの、何処かに！」

ロッサはガラスの壁に付いた扉にしがみつくと、眉間の目を開いて装置を探し始めた。その間にもメンシェ教徒の執拗な攻撃が続く。

「そつちに行かせるワケにはいかん！ トマーッ！！」

叫びと共に飛び上がる琉。琉は手前のメンシェ教徒の肩に飛び乗ると、彼の脚は次々にメンシェ教徒の肩に襲い掛けた。躊躇されるメンシェ教徒の上を駆け抜け、琉はロッサの元へ向かう。彼が着地した途端、メンシェ教徒達は蹴られた個所を押さえて次々に倒れ込んだ。

「必殺・飛石粉碎蹴り！」

飛石粉碎蹴り。相手の肩を蹴り付け、その反動を利用して飛石を渡るかのように敵から敵へと素早く飛び移り、着地と共にダウンさ

セるといつ琉の編み出した技である。

「ロッサ、装置は見つかったか……チッ！」

ロッサに駆け寄った琉だが、そこにナイフの刃が一閃した。寸手の所でかわした琉だが、逆立った髪の一部が宙を舞った。

「彩田琉之助、息の根を止めてやる！」

「因縁の対決か。来い！」

琉はすぐに構えを取った。アヤメも片手にナイフ、もう片手にスタンガンを構えて対峙する。

「……」

アヤメのナイフが琉に斬りかかる。素早い斬り込みをかわす琉だが、同時に彼女のスタンガンがロッサに襲い掛かった。

「まづい！」

琉の手がすぐさまアヤメの腕を掴み、キリキリと締め上げる。スタンガンは地面に落ち、琉のブーツが容赦なく踏み壊した。

「クッ！？…………やつてくれたわね！？」

アヤメはナイフを逆手で構えると、琉の喉元目がけて斬りかかる。体を軽くそらしてかわす琉だが、その横から他のメンシェ教徒がナイフの先端を向けて来る。琉はそのナイフを持った腕を掴むとアヤ

メに向け、更にナイフの持ち主の腹部に肘鉄を食らわした。

「邪魔しないで、コイツはあたしが仕留めてやる。」

「チームワークがよろこべないようだな、君達は」

「う、うぬやーー。」

呆れた顔で挑発する琉に、食つてかかるアヤメ。だが、この後二人の目に[写]たのは思いもよらぬ異常な事態であった。

「しかしアヤメ、そんなことを言つてゐ間があつたら卑くコイツを……うツー？」

ナイフを取られ、肘鉄を食らつて突つ伏しているメンシヒ教徒。彼がアヤメに忠告をしようとした時、それは起きた。

「う、うがあああツー？　か、体が、体が動かないーー。」

喉元、胸、腹部、あらゆる個所を押さえて彼はのたうち始めた。彼だけない。他のメンシヒ教徒も突然苦しみ出し、床の上で転げ回り出したのである。

「しまつた！　こんな時にーー？」

アヤメの表情に焦りが生じた。

「き、切れた……。は、早くし、し、し……」

「おー、一体全体どうなつてやがるんだーー？」

あまりに異常な光景に、琉は目を見開いた。突如苦しみ出すメンシェ教徒達、彼らに何があったのか、何故アヤメは平然としているのか、そして何より琉とロッサはこの地下聖殿を脱出することは出来るのであらうか！？

『地下聖殿に潜り込め』 急 (後書き)

メンシェ教徒に一体何が起きたのか！？ そして琉とアヤメ、因縁の戦いの行方やいかに！？ そして今回、琉は空手が出来ることが判明。実は素手でも結構戦えるんですw しかしピンチに変わりはありません、彼の運命やいかに！？

♪次回予告♪

「これが浄化の効果だと言つのか！？」

「琉、早くー！」

『魔の蛇に飲まれるな』序（前書き）

（前回までのあらすじ）

琉の行きつけの工房。その職人であるアルとゲオの家族が、メンシエ教徒にさらわれた。救出に協力することになった琉とロッサ。ハルムに襲われつつもオアシスに到着した一行は、ついにメンシエ教の“地下聖殿”を発見する。体格がでかい職人一人に代わって潜入した琉とロッサ。地下4階の浄化室で、ついに職人一人の家族を発見した！ そしてメンシエ教徒達を蹴散らして脱出を図った、のだが……。

『魔の蛇に飲まれるな』序

突如苦しみ出したメンシェ教徒達。琉は何が起こったか分からず、うろたえていた。

「おい、どうした、大丈夫か……おわッ！？」

琉は足元にいた一人を抱えたが、抱えられた教徒は琉を払いのけて更にのたうち回っていた。浄化室はまさに地獄絵図と化していたのである。

「琉、装置を破壊したよ！」

「でかしたロツサ、すぐにズラかるぞ！ パルトネール！！」

琉が手をかざして叫ぶと、ジャマーの呪縛を解かれたパルトナルが勢い良く飛び出て来た。熱も発しておらず、琉はすぐにそれをサツシユに差すとロツサやアル達の家族と共に浄化室を駆け出した。

「待て！ まだ勝負は終わっちゃいな……くッ！？」

「し、神恵水はどこだ！ 出せ、早く出せ……うあああ！！！」

後を追いかけるアヤメ。だが、足元にいたメンシェ教徒に捕まつて動けなくなってしまった。

「アル、ゲオ、聞こえるか！？ 君達の家族なら無事だ、今外に向かってる！……当然あちらには見つかった、応援頼む！」

浄化室の扉を閉め、琉は電話をかけた。そして電話を仕舞い、今度は牢獄にいる他の種族の囚人達に声をかけた。囚人達は怯えきつており、それどころかその場から動けない用にも見える。

「どうしたんだ？」

琉は檻の一つを開けて中に入った。中にはトヴェルクの青年が囚われている。相手は完全に怯えきつており、檻の奥で縮こまっていた。

「安心してくれ、俺はヒト族だがメンシェ教徒ではない。何で外に出ないんだ？」

「わ、輪が……」

そう言われ、琉は囚人の腕にはまっている腕輪と脚輪に気が付いた。

「これ、腕と脚の力を奪つてる。外さないと……」

ロッサが言う。額の眼で囚人を調べたらしい。一方でアルビゲオの家族達には腕輪はついていたものの脚輪が付いていなかった。

「だったらこうするまでだ、ちょっと腕を貸してくれ」

そう言つて琉は腕を差しださると、腕輪田がけて手刀を入れた。たちまち壊れた腕輪が床に散らばつてゆく。

「てやッ！ よし、動くか？」

もう片方の腕輪も外し、琉は囚人に聞いた。

「……は、はい！ ありがとうございます！…」

「じゃ、脚は外せるかい？」

囚人は自分の脚輪を持つと手で引きちぎった。ホッとした表情の琉。

「よし君、皆の腕輪と脚輪を外して回してくれ。ロッサも頼む、外れたら他の方達のも外すように言ってくれ！ 順でここを脱出するんだ、良いな！？ 僕は外を見張つておこう」

琉は出口に向かうと、外の様子を探り始めた。案の定、メンシエ教徒達が大挙して向かって来る。

『無駄なあがきを。この地下聖殿にはまだ百人ものメンシエ教徒がいる。お前がここを脱出するのは不可能だ、諦めて裁きを受けるが良い！』

再びあの声が響く。琉はその声に向かって叫んだ。

「良い加減、姿を現しやがれ！ アンタには聞きたいことが山ほどある！」

『死人に口なし。者ども、やれ！』

メンシエ教徒達は拳銃を構えて向かって来る。それを見た琉はパルトネールからトリガーパーツを外し、パルトネールの中央部を引き延ばして軽く折り曲げた。

「パルトブーメラン！」

扉の影から、琉はパルトネールを投げつけた。回転しながら飛翔するパルトネールが、次々に拳銃を叩き落としてゆく。しばらくして戻つてくるパルトネールだったが、琉はひたすらに投げ続けた。とにかく今は、時間を稼ぐ必要があるからだ。

「琉、全員のを外したよ！」

「よし、ちょっと待つてな。パルトネール・シユーター！」

ロツサの声を聞いた琉はトリガーパーツを再びパルトネールに装着、メンシエ教徒達の正面に狙いを定めた。

「パルトスパイダー！」

琉が引き金を引くとパルトネールの先端から赤い光弾が放たれた。そしてメンシエ教徒達の目の前で光弾が弾け、蜘蛛の巣状に広がつたのである。狭い廊下に一面広がつた蜘蛛の巣は、次々にメンシエ教徒達を引っ掛けていった。

「3……2……1！ よし、行こう！」

次々にパルトスパイダーに突っ込んで、バタバタと床に伏せてゆくメンシエ教徒達。薬によつて体が強化されて足の速さも常人を遥かに上回る彼らだが、その分急には止まれないことを琉は見抜いたのである。パルトスパイダーが消えるのを見計らい、琉はロツサと囚人達に合図を出した。一行は一斉に走りだした。

「「」」が階段か。とにかく上だ、上を田指すぞ！」

階段を見つけ、駆け上がる琉達。駆け上がった先には伏兵が待ち構えていた。

「「」」から生きては帰さん！ 異端者め、死ねい！！」

「死ねと言われて、素直に死ぬヤツがいるかッ！？」

琉はナイフが来るよりも早く相手の額にパルトナーを突き付け、パラライザーを撃ち込んだ。

「まだいるかもしれん、皆固まつて動いてくれ！」

地下二階。階段を昇りきった先にあったのは、ベルトコンベア等の機械が大量に置かれた奇妙な部屋であった。

「これは……工場？ 聖殿とか言いながら、奥にこんなモノを隠していたのか」

銃を構えたまま、琉は周囲を見渡した。機械だけではない、この広間には他にもビーム砲、燃料タンク、装甲といったモノが置かれていた。

「琉、何かこれに見覚えがあるんだけど……」

ロッサがあるモノを指差した。そこには巨大なシャーレのような機械で、中にビーム砲を備え付けてあった。

「これは……無人艇！？ そうか、ヤツらの目的が分かつたぞ！」

ヤツらはここで新しい武器を開発、量産していたんだ。そしてその作業のために、異種族の力が必要だつたというワケだな。しかしこんな物騒なモノ、表で堂々とは作れないし誰も協力しようとはしないだろう。だからこの島の異種族を無理矢理さらつて、秘密裏に作つてたというワケだ

『御名答だな、異端者よ』

あの声が工房中に響き渡つた。身構える琉とロッサ。怯える異種族達。

「じゃあ觀念して姿を現すんだな！ お前さんの計画はこれまでだ、諦めて警察にでも出頭することをお勧めするぜーー！」

タンカを切る琉。しかし相手は意外なことを言いだした。

『よろしく、ならば地下2階の大聖堂まで来いー。』

「ほひ、話が分かるじゃねえか。では、遠慮なく行かせてもらうぞ

！』

琉は一行を引きつれて行こうとした、が

「ここから先には通さん！ 異端者よ、ここで朽ち果てるが良い！』

『やつぱやつなるのか』

そう簡単に行かせてもらえないワケがない。工房のあちこちには伏兵が潜んでいたのである。広いフロアだけに、これまでより一回り多くの敵に包囲される一行。琉はパルトネールを構えて睨みつけた。

「さつさはやつてくれたわね、彩田琉之助。でもここままでよー。」

その中には、先程浄化室で交戦したアヤメも混じつっていた。

「しつこい女は嫌われるぜ、お嬢さん？」

琉はパルト・ネールを構えつつ言つた。口調こそ軽かつたが、その顔には焦燥が浮かび上がつっていた。

『そやつらに裁きを『えよ！ 特に異端者と悪魔だけは生きて帰るな！』

一斉に武器を構えるメンシェ教徒達。万事休す、そう思われた時だつた。工房内に突如衝撃が走つたのである。壁にはヒビが入り、ガラガラと音を立てて崩れ始めた！

「馬鹿な！？ この地下聖殿が、崩れ出しただと！？」

メンシェ教徒は口ぐちに騒ぎ始めた。いきなり地下室の壁が崩れ出すなどと、誰が予想出来ようか。一方で琉とロッサの口元は、何処か不敵な笑みを浮かべている。

「来た……」

「真打ち登場だぜ……」

『な、何だ！？ 何が起きたのだ！？』

カメラにも映つていたらしい。放送される声まで慌てふためいて

い。そうしている間にも壁は砕け、たちまち砂煙が上がりだした。砂煙の中に浮かぶ影、そしてその中から響く声。

「あ、助けに来たよおー！」

「ドコルは漢のロマンだぜー！」

『魔の蛇に飲まれるな』序（後書き）

囚人救出！ そして壁を破つて現れたのは何者か！？ そしてタイトルにある「魔の蛇」とは何なのか？ 第九章、お楽しみに！

『魔の蛇に飲まれるな』 破（前書き）

アルとゲオの家族達を発見し、囚人達を連れて脱出を図る琉とロッサ。地下3階で多数のメンシェ教徒に囮まれるも、突如壁が崩れだした！！

『魔の蛇に飲まれるな』 破

「アル、 ゲオ！」

「あなた！？」

「パパ～！！」

姿を現したのはそう、陸上で待機していたアルとゲオだったのである。琉とロッサ、そして囚人たちの顔に安堵の表情が浮かび、口ぐちに彼らのことを呼び始めた。

「さあて、行きますか～！」

二人は肩をバキバキと鳴らし始めた。途端にメンシェ教徒達の顔から血の気が引いてゆく。散々傷め付けた囚人と違い、こちらの二人はピンピンしていいるからだ。例え薬物による身体強化があつたとしても、本来ヒト族を上回る力を持つ上に武装までしている彼らの登場はまざいとしか言いようがない。

『何をしている！ 地下聖殿を壊した狼藉者に裁きを下せ、決して生きて帰るな！』

部屋中に怒号が響き、メンシェ教徒達はナイフやスタンガン、更にはハルバードを手にして一斉に襲い掛かって来た！

「ロッサ、彼らをなるべく安全な所へ！』

「分かった！！」

琉はロッサに囚人達の避難を任せ、メンシェ教徒達の前に立ちはだかつた。

「ロッサ達に近づくんだったら、まずこの俺を倒してからにしな!」

「よし、望み通り血祭りにあげてやる!」

挑発に乗ったメンシェ教徒達。琉は少し笑みを浮かべるとパルトネールを引き延ばし、軽く折り曲げた。

「パルトブーメラン!-!」

大きく振りかぶり、パルトネールを投げつける琉。パルトネールは回転しながら飛翔し、メンシェ教徒達に強烈な打撃を加えてゆく。鈍い音とともに次々に倒れ込むメンシェ教徒達。そしてパルトネールを投げつつ、琉自身も手前にいるメンシェ教徒に挑みかかった。琉の正拳突きが眼の前の敵に突き刺さり、更に彼の腕が相手の首に回ったかと思ひきやそのまま投げ飛ばした。その背後から、ハルバードを持つたメンシェ教徒が襲い掛かる。

「つおつとー?」

琉がその場で転がると、刃は床に叩きつけられた。メンシェ教徒が刃を持ち上げると、床にはくつきりとその跡が刻み込まれている。あと少しでも遅かだったら、琉の頭がこうなつていただろう。

(チツ、ただでさえリーチが長い上に刃物まで付いてやがるか……。
おつ?)

ハルバード持ちの教徒に苦戦する琉の目に、勢い良く回転しながら接近してくる黒い棒状のモノが見えた。何とも良いタイミングで、パルトネールが戻つて来たのである。琉はパルトネールを掴み取ると、素早く音声コードを入力した。

「パルトネール・チエイン！」

パルトネールの先端が変形し、鉤の付いた分銅が出現した。琉はメンシエ教徒から一端距離を置くと、ハルバード目がけて分銅を放つた。たちまちハルバードの柄に鎖が巻き付いてゆく。琉は左手で鎖を引き、ハルバードを絡め取つた。

「痺れるぜ、覚悟しろよ……。パルトショック！！」

琉の左の掌がパルトネールの柄を叩く。途端にその鎖を電流が走り、ハルバードを伝つてメンシエ教徒に流れ込んだ。

「うああああッ！？ あ、アヤメーッ！！」

相手はハルバードを握つたまま鋭い悲鳴を上げ、卒倒した。

「琉ちゃん、今のはやりすぎじゃあ……」

「安心しろ、手心は加えてある……。しかしアヤメつて？」

近くでメンシエ教徒を相手取つていたアルが琉に言つた。琉は言葉を返すと分銅を引つ込め、パルトネールを通常形態に戻した。そして近くにいるメンシエ教徒を打ちすえ、その先端がメンシエ教徒の鳩尾を捉えてゆく。

「お父さん…？ しつかりして…！」

一方でアヤメは父親の元に駆け寄った。その体を揺すつても、痙攣しており戦えそうにない。

「彩田琉之助……覚悟…！」

アヤメは怒りに震えつつ、拳銃を取り出してすぐさま琉に向かって照準を合わせた。琉は近くのメンシェ教徒達の相手をしており、背後から銃で狙われていることに全く気付いていない。ついにアヤメはその引き金に指を置いた。危うし琉！ だが、アルがそれに気が付いた！

「琉ツ、危なあい…！」

「アルツ！？」

銃声一発。弾は飛び出してきたアルの肩に当たり、その鱗が碎けて宙を舞つた。弾は体内に留まらず、ひしゃげて地に落ちている。被弾したアルの肩から、砂状の血が流れ落ちていた。ディアマンの血は空気に触ると砂上に変化するためだ。ガックリと膝を突くアルに、琉が駆け寄つて行く。

「おい、大丈夫か！？ ……許さんツ…！」

「しまつた！？ ええい、今度こそ…！」

アヤメがトリガーを引くよりも速く、琉のパルトブーメランが銃を弾き飛ばした！ しかしあやめも負けておらず、ナイフを2本手に持つと、琉目がけて斬り付ける。琉はパルトネールをサーベルに

変形、ナイフの刃を受け止めた。

「アル、大丈夫かッ！」

ギュイン、という音と共にゲオが近付いてくる。ゲオは脚の装備に付けられたローラーで移動、腕に付いた装備の先端をドリルから拳状に変形、次々にメンシェ教徒を殴り倒しつつ突き進み、アルの元へと駆け寄った。

「ゲオ……オイラは大丈夫だ。聖弾は、入り込んではいけないよお」「そうか、良かつた……。しかしこのままじゃラチが明かねえ、アレを使うぞ。ナックルクエイカー！」

ゲオは装備に付いたスイッチを押して更に音声コードを入力、すると装備された“拳”にエネルギーが充填されてゆく。

「くそつ、斬り込みが他と比べて速い上に鋭いな……。君だけか、神恵水の効果がまともに出てんのは」

「ふん！ アレを飲めてたら、あと2年早く生まれていれば、アンタなんかあつという間に仕留めてやるといふのに……！」

説明せねばなるまい。メンシェの教義では、神恵水は25歳になるまで飲むことが許されていない。何故なら、この薬は身体能力を著しく向上させるものの、25歳未満が服用した場合は副作用で死に至る危険性が高いためである。

（しかし強い……。女相手に本気を出せないのもあるが、訓練を積んだワケでもないのにここまでやるとは……。もしや彼女、“アレ

”か
……！
？”

琉はナイフを防ぎつつ、遂にそのサーベルの刃でナイフを弾き飛ばした。ナイフを弾かれてひるむアヤメ。しかしそこに、他の教徒のナイフが斬りかかる！

「びいて！ そいつはあたしがやる、だから手を出さないでー。」

「こつちは助けが欲しいよ！」

琉はナイフをサーベルの刃で叩き落とすと、その柄で素早く鳩尾を突いた。更にトリガーパーツを取り出すと、パルトネールをシューターに変形させ、アヤメに突き付ける。しかしアヤメの手にも拳銃が握られていた。互いの額に銃口が当たり、二人は無言のまま睨み合つた。だが、そこにゲオの声が響く。

「琉ちゃんがいて！ 一気に汗を付けつからーー！ でやあーっ！」

ゲオの拳が床を叩く！ 途端に床を衝撃波が走り、 破片やメンシ工教徒を飛ばして引き裂いてゆく。

「何!? しまつた!!」

アヤメの気がそれた瞬間を見計らい、琉は引き金を引いた。途端に赤い閃光がアヤメの額に突き刺さり、そのまま倒れ込んでゆく。彼女の拳銃がむなしく宙に吠え、アヤメは完全に意識を失つた。見渡すと、フロアにいるメンシェ教徒のほとんどは床に転がっている。先程の衝撃波、ナックルクエイカーが効いたらしい。

「ロッサ、無事か！？ 外に出るぞッ！！」

琉は階段に走り、囚人達を先導した。アルとゲオは家族との再会を喜んでいる。その目には大粒の涙を浮かべており、いかにこの瞬間を待っていたかが伺えた。

「琉ちゃん、ロッサちゃん、今日は本当にありがとう！ お陰でオイラ達の家族、そして仲間達は無事に帰れるよお！！」

「琉ちゃん、アンタは本当に見上げたヤツだぜ！ 帰つたらまた御馳走すつからな！！」

階段を駆け上がりつつ、感謝の言葉を並べる二人。しかし琉の表情は依然として厳しいモノであった。

「一人とも、まだだ。本当に喜べるのは家に帰つてからだぜ。ここはまだ地下聖殿、早く脱出しないとな！」

力強く頷く二人。階段を昇つた先に待つていたのは、また広間であつた。しかしさつきとは違い、パイプオルガン等の設置された巨大な礼拝堂であつた。天井まで20mはあるうかという高さに加え、所々にメンシェフラッグが掲げられており、更に堂々と飾られた彫刻が更に莊厳さを際立たせている。まさに宗教の総本山とも言いたくなるような感じであった。

「まさに圧倒的な光景、か。しかし長居は無用だぜ、走れ！」

出口目がけて走る琉とロッサ、アルとゲオと囚人達。琉とロッサが扉をこじ開けると、その先にはまた細い通路が続いている。その先には長い長い階段があり、琉はアルとゲオを先に昇らせた。二人

が駆けのぼると、階段の上からはやがて光が差してきた。田論見通り、ここが出入り口だったのだ。今のところ、メンシエ教徒の様子はない。

「よし、俺はここに残つて見張つておく。ロッサは彼らを連れて先に外へ出でくれ！ そしたら俺も続くから……」

「琉、わたしも残る！ わたしがいるとまた狙われるかも……」

「しかし……。まあ、良いか。外にヤツらがいないとも言い切れん」

ロッサは自ら残ると言いたした。琉は渋々承諾すると、一緒に見張り始めた。今のところ、メンシエ教徒達が大挙して襲つて来そうな気配はない。

「ねえ、琉。声だけ出してたアイツ、いないね」

「ああ、そうだな。しかし、どう来るか分かったモンじゃないからね、気が抜けないぜ！ ……お、皆出られたか！」

琉とロッサが喋つている間に、最後の囚人が階段を駆け上がり外に出て行つた。それを見届けると、琉とロッサはすぐさま出ようとした、が

ガシャン！

大きな音と共に通路が閉じられた。重いシャッターが通路を完全に塞いでおり、脱出することもままならない。琉とロッサはシャッターをガンガンと叩き始めたが、シャッターはビクともしない。

「アギジヤベ（畜生）！　ハメられたか！！　ロッサ、シャッターを溶かせッ！！」

「ん……！　ダメ、ビクともしない……」

「フハハハハハ！　彩田琉之助、並びにヴァリアブル！　私はワインダー、ようこそ我が地下聖殿・礼拝堂へ……」

琉達と礼拝堂のステージに、スポットライトが当たった。琉とロッサの目線の先には豪奢なローブに身を包んだ、中年と思しき男が立っていた。

「お前か、さつきから放送で色々言つてきたのは……声が若い割にオッサンだつたんだな……」

「つむぎこそ中学生、私はこれでも25だ！　さてふぞくのもの今までだ、貴様ら一人は私直々に“浄化”してやるつ……」

そういうと顔の老けた男　ビショップ・ワインダーはステージを降りて来た。そして懐からあの石板を取り出したのである……

「あれは……まさかお前も！？」

「気付いた所でもう遅いわ！　聖なる煙で浄化してくれよ……」

そういうなりワインダーはその場で宙に浮き、琉とロッサを見下ろした。そして石板を掲げると、たちまち眩い光が部屋中に広がり始めたのである……

『魔の蛇に飲まれるな』 破（後書き）

あの悪夢が再び！ 果たして琉とロッサの運命やいかに！？

『魔の蛇に飲まれるな　急（前書き）

地下聖殿脱出を試みる琉、ロッサ、アル、ゲオ、そして囚人達。しかし出口に達する寸前で琉とロッサが閉じ込められてしまう。そして遂に地下聖殿の主、ビショップ・ワインダーが琉とロッサの前に姿を現したのであった！

『魔の蛇に飲まれるな』 急

「もしもし、ちょっとトラブルだ！ あちらのお偉いさんが出てきて、その『デカくなり出して……とにかく、何言つてるか分からんかもしれんが、とにかく危険だからシャッターの所まで来るなよ？ ……『うわっ！？』

礼拝堂内に広がる光。やがてワインダーのシルエットが、見る見るうちに巨大なモノへと変化してゆく。琉とロッサは手をかざしつつ、ただただ戦慄と共に見てているしかなかつた。

「コイツもか！？ コイツもなのか！？」

眩い光が収まると、ワインダーはその巨大なる体格を現した。身長約13m、以前戦つたゴライアスと比べて手足が長く、優美な印象を受ける。装甲を纏つたその身体には、これまた装甲に包まれた巨大な蛇が巻き付いており、舌を出しつつこちらを睨んでいる。

『神の力を以て、貴様らに天罰を下してくれる。いくぞ……！』

キシャーッ！ という音を出し、蛇がその口を開いた。すぐに身構える琉とロッサ。すると蛇の牙から真っ赤なガスが噴射され、二人に襲い掛かつた。

「うつー！ こんな密室で毒ガスだとー？」

「琉、早くー！ うつちー！」

スカーフで口元を覆う琉を、ロッサが引っ張つてガスから引き離

す。ガスがシャッターに当たった瞬間、シャッターは見る見るうちに泡を発して溶け始めた。

『見たか！ これが聖なる煙の力、お前たちは白い泡となつて浄化されるのだ！』

聖なる煙。その正体は、あらゆる物質を溶解する強力な毒ガスである。これをマトモに吸い込んでしまえば最期、体内から浸食されて分子レベルでの溶解を起こし、数秒で跡形もなく消滅してしまう。なお、遺跡で発見されるガス室は特殊素材で作られていることが判明しており、ガスによって内部が傷んだり、外にガスが漏れることはないと考えられている。恐らく、浄化室もそうなのである。

「お前は、これで何人のトヴェルクやティアマンを虐殺したのかツ！」

『残念ながら、ここではまだ誰も殺してはおらん。彩田琉之助、貴様に邪魔をされたためにな！ だから代わりに、貴様ら一人が実験台になるが良い！』

蛇が再び口を開く！ するとロッサは琉を抱えると、翼を広げて宙に浮いた。

「琉、何とか天井に穴を開けることは出来ない？ そうすれば……」

ロッサは琉の耳にひそひそと何かを話し始めた。

「一応、ブラスターを使えば……やってみるか！」

吹きつけられる煙。煙は彫刻やタペストリーにも広がり、莊厳だ

つた光景が見る見るうちに殺風景になつてゆく。しかしその様子を見た琉は、あることに気が付いた。

（このガス、重いな。さつきから噴射されると拡散せずにすぐ地に落ちてはモノを溶かしている。といつひとは、宙に浮けば回避出来るということか）

琉はロッサに抱えられたまま、パルトネールを取り出すとすぐにトリガーパーツを取り付けてショーターに変形させた。そしてレバーをPからBに切り替えると、ワインダーの頭上に狙いを定めて接近する。

「3……2……1……！　パルトブラスター！！」

パルトネールから放たれた青い光弾が、ワインダーのすぐ上の天井を貫いた！　たちまち天井が崩れ、ガレキがワインダー目がけて降り注ぐ。そこにロッサの鞭状に変形した指が、崩れた天井に更に追い打ちをかけた。打ち碎かれ、更に多くのガレキがワインダーに降り注ぐ。

「今だロッサ！！」

琉の言葉を受け、ロッサが天井の一一番薄くなつた個所に突進する。ロッサは全身を液化させると琉の体を再び包み込み、自ら緩衝材となると天井目がけて突っ込んだのである！　やがて、二人の目にはアルカリアの眩しく燃える太陽が目に焼き付いた。

「やつた、上手くいった！」

作戦成功に喜ぶロッサ。ロッサの体から分離した琉は、その場で

思こきり息を吸い込むと言つた。

「フハアーッ！ 地上の空気が、いつも以上に重く感じるので…
…おつ…？」

二人が外に出ると、遠くの方から一つの影がこちらに駆け寄つて來ていた。

「おおーい、琉ちゃん、ロッサナちゃん！」

「おい、無事か！？ 大丈夫だったか！？」

琉達も駆け寄つとした……が！

ブシャアーッ！！

突如地面から吹き出した赤い煙。4人の足取りがピタリと止まつた。

「琉ちゃん、これは一体…？」

「氣を付ける！ あれを吸い込めば最期だぞ…！」

各々武器を構え、後ずさりを始める4人。やがて煙の引き出した場所から、あの蛇が、そしてワインダーが姿を現した…！

『よくもやつてくれたな！ 貴様らまとめて罰を下してやるから覚悟じろー…』

まさに怒り心頭、ワインダーに絡みついた蛇は鎌首を上げ、琉と

ロッサ目がけて飛びかかって来た！！

「確かに俺は旨いモノ食つてるからな、俺自身も旨いかもしれん…
て、こっち来んな！！」

ギリギリで毒牙をかわす琉。しかし蛇は、なおも琉を呑みこまん
と襲い掛かる。

「琉、掴まつて！」

ロッサが飛来する。琉の手を取ると、そのまま空へと舞い上がっ
た。

「アタビチグワ（ここの野郎）！ ヌチヌカリンドウ（命抜き取るぞ）
！」

興奮した琉。ロッサに掴まつたまま、島言葉全開でタンカを切り、
つつパルトネールを取り出した。ロッサは琉を抱えたまま飛び回り、
ドレスの裾から出現した尻尾を手に持つと、ワインダーの“本体”
目がけて高熱の炎を放つた。

「そこだ！ パルトブラスターッ！！」

琉のパルトブラスターが追い打ちをかける！ 遂に、ワインダー
の胸から上が見事に吹っ飛ばされた。

「よし！」

ガツツポーズ。蛇は地面に落ち、下半身だけになつた巨体。これ
でほとんど無力化したと言えるだろ？ 脚だけが、フラフラと琉達

目がけて近付いてくる。しかしその瞬間だった。

『馬鹿め。これでやられると想つたか！』

前言撤回。安心したのもつかの間、何と見る見るついコロコロインダ
ーの体が元通りになつてゆくではないか！

「ひいにッ、アギジヤビロー（なんてこつた）！？ じゃあ、石板
は一体何処なんだ！？」

琉の声が裏返り、顔からは血の気が引いてゆく。空中に浮かぶロ
ッサの腕の中で、琉は震える手を押さえつつパルトネールを握り直
した。しかしどスパイダーとブラスターを何度も撃つたせいで、パル
トネールのエネルギーは残りブラスター一発分しか残っていないと
いう状況である。ただでさえ詰め替えは大きな隙が生じる上、手持
ちの未使用電池は残り一つ。

「ロッサ、石板の位置は！？」

ロッサの眉間にグワッと開く。この眼はロッサ自身の力を消耗す
るために、滅多やたらに使うことは出来ない。

「嘘……本体の何処にもないなんて！？」

しかし大量のエネルギーを消耗したにも関わらず、ロッサの口から
出たのは信じられない結果であった。これでいくらくらいブラスター
を撃つても炎で焼けども、効果があるとは考えられない。

「ええい、これでも食らええッ！？」

地上にて、地下聖殿から持ち出したミサイルポッドを抱えたアルとゲオが飛び出してきた。白い軌跡を描き、複数の小型ミサイルがワインダーに襲い掛かる。次々に被弾するミサイル。ワインダーの体中から爆風が上がる。ロッサは琉を抱えてその場から飛び去り、アルとゲオの背後に着地した。

「部分破壊がダメなら、全身を吹き飛ばすまでだッ！」

ゲオが言う。力づくだが、ある意味真っ当な考え方とも言えるだろう。ミサイル攻撃に耐えきれず、ワインダーの全身は遂に砕け散つて行つた。その破片も、次々に塵状となつて消えてゆく。

「ついにやつたか！」

アルとゲオが拳を掲げ、歓喜の声を上げた。琉もやつと胸を撫で下ろし、ホッと息をつく。だが、ロッサだけは違つた。

「ダメ、まだいる！」

「え？ ヤツなら全身が吹き飛んだはずだぞ……！？」

突如震えだす砂の大地！ 再び身構える4人組。そして勝利による歓喜のムードをブチ壊し、蛇を伴つたワインダーが地中より出現したではないか！

『つぐづく馬鹿なヤツよ。良いか、私は不死身なのだ！！』

戦慄する4人。ここまで恐ろしいことが果たして他にあるだろか。だが、この様子を見ていた琉はあることに気が付いたのである。

「ロッサ、もう一回眼を使つてくれ！ しかし本体ではなく、あの蛇だ！」

「蛇？ 分かった……」

ロッサの眼が再び開く。そしてその視線を、人型をした方ではなく蛇に向けたのである。

「……やつぱり！ 本体はあのおつきの方じゃない、蛇の方だったんだ！」

「……やつぱり！ 本体はあのおつきの方じゃない、蛇の方だったんだ！」

ロッサは翼を広げ、琉を抱えて飛ぼうとした……が！

「うっ！？ ダメ、体が乾いてエネルギーも……うっ！」

「……」

「ロッサ！？ しまった、水分とエネルギーか…… アル、ゲオ、ロッサをオアシスに……！」

琉はロッサを抱えてアルとゲオに渡しながら言った。

「琉、ヤツの石板は……アゴの……下に……」

「もう良い、これ以上喋つたらダメだ！ アル、ゲオ、早く……！」

それだけ言つと琉は蛇の頭を見据え、パルトネールをチョインに変形させると蛇目がけて駆け寄つた！

「琉ちゃんー？ よせ、死に行く気かー！」

ゲオの忠告を無視し、琉はなおも敵に向かつて走り寄るー。

『遂に自暴自棄になつたか！ 直接握りつぶしてくれるー。』

「やれるモンならやつてみるー。良いかワインダー、不死身なのはこの彩田琉之助の方だアッ！！」

迫りくる手に飛び乗り、琉は更にチエインの分銅をワインダーの首に放つて鉤を引っ掛け、その体をよじ登るー。

『狂つたか彩田琉之助！』

「いいや、俺は正氣だね！」

ワインダーの長い腕が琉を払おうとする。それをかわしつつ、琉はワインダーの首元にしがみ付き、後頭部へと移動した。するとワインダーの蛇が、こちらにむかって鎌首を上げている。

『おのれー！』

牙をむき出し、蛇が襲い掛かる！ しかしワインダーの体目がけて、煙を噴射することは出来ない。そこで琉はパルトネールをサーベルに変形させると今度は蛇の頭にしがみついた。

『物騒なモンは没収だー！』

暴れる蛇の頭にしがみ付き、琉が剣を振るつ。すると蛇の牙が、上あごの一部と共に切断されて砂に落ちた。

『馬鹿な！ 私の牙がツ！！』

のたちうち回る蛇から飛び降り、琉はパルトネールを構え直すと呼吸を整えた。

「ハアーツ……。パルトヴァニツシユ！」

音声コードを受け、エネルギーを帯びた刃が光を放ち始める。サベルを横に構え、琉はのたうつ敵に刻一刻と近づいてゆく。

『やめろ……！ やめてくれ……！…』

蛇がダメージを受けたのに伴い、巨大な人型の方もガックリと姿勢が崩れている。琉は蛇の下あごに鱗に紛れた石板を確認すると、躊躇せずに真っ直ぐ刃を突き刺した！ 途端に大人しくなる蛇。

『ぐわあ！ おのれ……』

最期の力を振り絞り、ワインダーの巨体が琉目がけて腕を振り、払おうとする。しかし琉はその場で跳び上がり、腕をかわすと真っ直ぐに蛇を見下ろした。その力エシのある刃は、一度突き刺すと貫きでもしない限り引き抜くことが出来ない。次の瞬間、琉は飛び蹴りの姿勢を取りつつ、体をひねり始めたのである！

「必殺・旋風螺旋蹴りツ！！」

琉の脚がパルトネールに当たる。靴底の滑り止めがパルトネールに合わさり、彼の体のひねりと共に刃が回され、刺されている石板が碎かれてゆく。

鋭い悲鳴と共に崩れてゆくワインダーの体。蛇の体も崩れてゆき、その胴から元のビショップ・ワインダーが姿を現した。

ワインダーはなおも琉に手を伸ばす。

「貴様を……消せば……。私は……ラティアの……教皇になり……この世界の……頂点に……」

何かを言いかけ、ワインダーはこと切れた。

「生臭ボウズが、何が世界の頂点だ。お前のようなヤツが頂点に立ても、待っているのは孤独だけなんだぜ……」

琉はワインダーを抱えると、近くの倉庫に放り込んだ。

「琉ちゃん、大丈夫!?」

琉！良かつた……」

アルとゲオ、そしてロッサが駆けよつて来る。かくして4人の長い1日が、遂に終わりを迎えたのであった……。

『魔の蛇に飲まれるな』 急(後書き)

遂にワインダーとの決着が付きました! しかしまだ長かったな……。
さて、来章のMystic Ladyは? w

♪次回予告♪

「汚物は消毒するように、ナメクジは駆除せねばならん!」

「いい、ダメでしょ!」

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』序（前書き）

（前回までのあらすじ）

砂の国アルカリア。その主要な島であるソディア島を訪れた琉とロッサ。二人は海底遺跡で重要な手掛けりを発見するが、メンシエ教の妨害により探索は続行不可能に、そして世話になっている職人の家族がメンシエ教徒による拉致事件に巻き込まれてしまう。二人は職人であるアルとゲオと共にオアシスに向かい、ハルムの襲撃やビショップ・ワインダーの攻撃をかいくぐつて遂にメンシエ教地下聖殿を発見、壊滅させたのであつた！さて、今回のお話は？

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』序

メンシエ教による島民拉致事件から一週間が経つた。地下聖殿に残っていたメンシエ教徒のほとんどがアルカリア政府によつて拘束され、地下聖殿自体もその実態を暴かれることとなつた。

「ふーん……。地下聖殿は今日から取り壊しか。まあ、壁を崩したり床を裂いたり、拳句の果てには司祭自らが天井をブチ壊したりしたしな。あれを改修出来るのは到底思えないぜ。まあ、拾えるモノは全部拾つただろうけど」

地下聖殿の裏工房で作られていた無人艇やその材料は、新型のラングアーマー やトライデントの材料になるという。ソディア島の中心で解体に、琉も参加していた。元々技術者の多いこの島なので、作業自体はわずか一週間で終わりを告げた。そしてその後も、琉とロッサは引き続き海底遺跡の調査を続けていた。だが、エリア 全域を調査したにも関わらず、これ以上の手掛かりは何も得られなかつたのである。

「琉、これからどうするの？ もうエリア には何もないみたいだよ」

この日も作業を終え、琉とロッサは発掘品の仕分けをしていた。金目のモノはちょくちょく見つかるモノの、肝心なロッサ関連のモノは全くと言つて良いほど出てこない。

「そうだな、一端ハイドロまで帰るか。ここよりか、エリア を漁つた方が何かと出てきそうだぜ。ひょっとすれば、既に何か掘り出されてるかもしれないし。そうすれば、わざわざ潜らなくとも見せ

てもらえば……。しかしあそこは今、メンシヒ教徒が暴れ回っていると言つしな……」

そう言つた時だつた。突如琉の携帯電話が鳴り始めたのである。

「おや、カズ？　どうしたんだろ……ハイサイ！」

電話に出る琉。

「ハイサイ琉？　今話せるか？」

「どうした。金の貸し借りと宗教の勧誘ならお断りだぜ」

少しおどけてみせる琉。しかしカズの口調はいつもに増してシリアスだつた。

「違う。なあ、ソテイアのメンシヒ教の勢力のことだけどさ。……やつたの、アンタだろ？」

カズの様子に気づき、琉の表情までもが厳しくなつた。

「鋭いな……誰から聞いたんだ」

「ネットの掲示板に上がつてたのさ。『砂漠の青き英雄！』だの『トライデントを駆使して戦う若獅子』とか。とにかく、田撃証言を整理したらどう考へてもアンタしか浮かばなかつたのさ。……だけじゃない。『自由へいざなう赤き瞳の聖女！』だの『白き翼の砂漠の天使』といった田撃談まであつてな。……これ絶対ロツサ様だろ？」

「……ああ、その通りだ。そんなに騒がれてたのか

琉は肯定した。と同時に驚愕していた。確かに自分は地下聖殿に潜り込み、大暴れした拳旬に囚人達を解放した。ネット上とはいえ、まさかここまで大きく騒がれるとは思いもよらなかつたのである。

「……あんまり目立ちとつない。俺の事、他人に言つふらすなよ？」

「分かつてゐ！ しかしその腕を見込んでのお願いがあるんだ！！」

カズの声は必死だつた。

「何だ、言つてみろ」

「なるべくすぐこ、ハイドロまで帰つて来てくれないか？ もう我慢の限界なんだ！ これ以上ヤツらこ……メンシヒの連中に好き勝手されたくないんだよ！」

刑務所襲撃事件の後、メンシヒ教徒達は再びオルガネシア中に広がり始めたのである。そして今まで以上に過激な行為に及び始めたのであつた。メンシヒ教の信仰を強要、警察署襲撃、ヒト族以外の種族への表立つた迫害行為など、カズが話した状況はそれは散々なモノであつた。

「分かつた、明日にはここを出よう。良いか、あと5日は我慢してくれ！ 良いな！？」

「ありがてえ！ 着いたら、いや近くに来たら連絡をくれー！」

そう言つて、カズは電話を切つた。

「ロッサ、明日せーじーを出るべ。じじよりエリアの方があるかも
しないし、何よりメンシュの連中に俺の故郷を荒らされるのはガ
マンならないからな」

ロッサは力強く頷いた。ロッサにとつて、ハイドロは田覚めてか
ら初めて脚を踏み入れた島である。琉と同様、この島への愛着は深
かつた。

「そうだ、確かにアルに頼んでおいたモノがあつたはず……」

琉は携帯電話の電話帳を探ると、再び耳に当てた。

「もしもしーー？ あ、琉ちゃん！」

何処かのんびりした声が受話器から響いてくる。

「ハイサイ、アル！ 例のモノ、出来た？」

「もちろんだよーー 取りにおいでえーー

その日の夕方、琉とロッサはアーデラーに跨り、裏通りへと向か
つた。

「ねえ、琉。“例のアレ”って何？」

「ああ、そんなモン見りや分かるわ。お、着くぜ」

アーデラーを玄関の前に停め、琉は早速インター ホンを鳴らした。

「お、来たね。早速だけど上がつてよー。」

出迎えに来たアルに言われ、琉とロッサは工房に入つて行つた。

「おお！ 一人とも来たね！ 見るよ、この工房も随分キレイになつただろ？」

中でパイルバンカーの整備をしていたゲオが言つた。彼の言つ通り、工房内の銃弾や壊れた機械は撤去してあつた。

「それで、これが頼まれてたバジュラムね」

「バジュラム？ これ、トライデントじゃないの？」

ロッサは首を傾げた。アルが琉に渡したモノ、それは琉の腰に差してあるモノとそっくりな黒い棒であつた。

「バジュラム。トライデントの元になつたモノだ。でも本来工具のトライデントと違い、コイツは立派な武器なんだけどね」

バジュラム。トライデントの原型となつた変形武器で、遺跡時代にはすでに使われていたとされている。変形部（サーべルの刃やチエインの鎖が飛び出る部分のこと）が棒の片方しかないトライデントに対し、このバジュラムは両端に変形部があり左右対称となつている。

「一応テストはしてあるよ。後は音声データを入力するだけだねえ」

「分かつた、ありがとう……。そうだ。明日、帰ることとなつた

琉はバジュラムを仕舞つと、アルとゲオに言つた。

「帰る？ そつか、そういうやもつ、Hリア は全部回つたんだつたな」

「それもあるが……今ハイドロがヤバい」

「ヤバい？」

アルとゲオが同時に声を上げる。

「ハイドロは俺の故郷なのは以前話したよね？ やつぱりというか、最近メンシH教の暴れっぷりがまたひどくなつたそうだ。それで、遂に友人から助けを求められちまつた……」

琉はある程度予想はしていた。オルガネシアの刑務所が襲撃された後、ハイドロ島の警察署がメンシH教徒によつて襲撃を受けていたのである。その後のカズの情報で、襲撃をかけたメンシH教徒は捕まつたといつことだつたのだが、その程度でヘコ垂れるような連中でないことを琉は熟知していた。

「だからこないだ注文してきたのかあ。まあ、バジュラムなら3日で作れるから良いんだけどわ。……でも、無茶はするなよお？」

翌日。朝早くから、アルとゲオが港に来ていた。

「じゃあなあ～！ また来てくれよお～！」

「今度来たなら、また一杯やろつぜ！ それまで元氣でな～！」

二人はカレッタ号が見えなくなるまで、手を振り続けていた。ロッサも後部甲板で手を振っている。

「港まで来てくれてありがとう、アル、ゲオ。今度来るときは、ハイドロの『言いモノ』持つて行くからな！」

琉の別れ際の挨拶。彼は必ず、再会を約束して出航する。船乗りの性なのか、はたまた今回の船出が再び戦いに身を投げるモノだからか。

「お、ロッサ、戻つて来たか。じゃあそろそろ、自動操縦に切り替えるとするかね」

目的地をハイドロ島に設定し、琉は「コービーメーカーのスイッチを入れた。

「ねえ、琉。この間やつてたその……ええーと……」

ロッサは琉に何かを伝えようとしている。しかし、言葉が出てこない。仕方なく、彼女はある動きをし始めた。拳を握り、腰だめに構え、そのまま真っ直ぐに腕を伸ばす。それを見た琉はすぐに分かった。

「ああ、『空手』か。あれはね……」

説明せねばならない。この世界の空手はオルガネシアの格闘技として知られており、特に琉の出身地であるハイドロ島はその本場として知られている。主に身体訓練と健康体操、そしてハルムに対する護身術として、琉はこの術を小さいころから習ってきたのだ。

「まあ、遊び場といつたら近所の道場か裏山の入り口だつたしな。知らず知らずのうちに習慣になつっていたんだ。自慢じゃないけど、島の中では強い方だつたよ。よく裏山の岩や木を蹴つて、変な技編み出して遊んだなあ……。しかしそれが今役に立つてゐるなんてな」

はあ、と溜息をつく琉。

「技つて……飛石粉碎蹴りとか旋風螺旋蹴りとか？」

「そうそう、よう覚えてたね。……そうだ！ ロッサも一つやってみるかい？」

「うん！」

ロッサは元気良くなずいた。一方琉にはある考えが浮かんでいたのである。

（ロッサは、俺より力はあるが戦いそのものに慣れていない。ここで少し技を教え、身のこなしを覚えてくれればこちらとしても少しは安心出来る。そして何より、本人が興味津々だしな）

早速一人は甲板に出たのであつた。

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』序（後書き）

急展開を見せていた話も一段落し、久々のパロディイタイトルです。さて、現在平和なこの船で、一体何が起こるのでしょうか！？

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』 破（前書き）

カレッタ号の一人に平和な日常が訪れた。琉はロッサに空手を教えてやることに。だが、この平和な時間がいかに脆いモノかということを、二人はまだ知らなかつた……。

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』 破

「ハアツ！ ハアツ！…」

「肩の力を抜いて……そつそつそつ。うん、やつぱり覚えが良いね」

カレッタ号甲板。ロッサは普段のドレスから胴着に着替え、琉の指導を受けていた。長い髪を後ろで縛り、キリッとした田つきで拳を振るう姿はいつものイメージとは全く異なるモノであった。なお、彼女の胴着は琉のそれを元に変身能力を使ってドレスを変形させたモノである。

「ロッサ、帯の色は白だ。黒にするにはまだ早い。あと、サラシは腹だけでなく胸にも巻いといてくれ……田のやり場に困る」

……もちろん、琉のモノをそのまま再現したためにこじこじ間違いもあつたのだが。特に琉と同じ格好だと、胸元が極めてきわどいモノとなる。そしてサラシを巻いても、その豊満な胸が押さえ切れてるとは言い難かった。

（うーん、どうしても胸に田が……。しかしロッサ、こないだより背が縮んだか？）

琉はロッサに関して、ある疑問を抱いていた。というのも、オアシスへ向かう途中でイグピオンを捕食して以来、ロッサの背は琉と並ぶくらいに伸びていたのである。地下聖殿潜入中に彼は気付いていたが特に気にしていなかつた。が、その背に比例して胸も大きく、更に髪がひざ裏まで伸びていたのである。……それもこの前日までは。

（やつぱり田の錯覚だったのかな……）

今のロッサは身長も胸も髪も初めて会った時のサイズに戻っている。自分なりに納得いく答えを出し、琉はこのことに関して考えるのをやめた。

「よし、基本はここまでにして、と。ロッサ、君の場合は指先を変形させるのが基本スタイルだったね？」

「ええと、これ？」

ロッサは片手を変形させて見せた。彼女の指先は長い鉤爪状となり、鋭く尖っている。この指はロッサ自身の酵素による溶解作用と相まって、恐るべき切れ味を生み出す仕掛けとなっているのだ。琉はその指を見ると言つた。

「君の場合は拳で突くよりこの指で突く、即ち“貫手”をメインで使つた方が良いと思うんだ。ってなワケで、ちょっと見てくれ」

ロッサの前に出て、琉は姿勢を正すと呼吸を整えた。腰だめに構えた拳をそつと開き、指をそろえて伸ばす。そのまま腕を伸ばし、琉はその指で真っ直ぐに宙を突いた。

「……こんな感じ。君の場合は正拳突きの代わりにこれをメインで使つと良いかな」

「え、琉は使わないの？」

「使わないワケじゃないんだが……あいにくヒト族の指は脆い。硬

い部分にこれをやると逆に「ひが突き指して病院行かれ。や、続
けようか」

琉のマネをして、宙を突くロッサ。徐々にその動きにもキレが出
始める。

「良じぞ、その調子だ！……おつと、もうこんな時間か。ロッサ、
そろそろお風にしよう。シャワー浴びておこど」

一人はそれぞれの部屋に戻り、胴着から普段着に替えるとシャワーを浴びた。琉は早々に着替えとシャワーを済ますと、一足先に食堂に向かった。

「さあて、と。今日は結構運動したしな、スタミナの付くモノが良
いだらうな。とりあえずオオトカゲの缶詰と……あとは野菜か」

琉は棚から缶詰を取り出し、更に冷蔵庫を開けようとした、その時だった。

パリ……シャリ……

冷蔵庫から妙な音がする。それも何かを齧るような……つい、虫
が葉っぱを齧るような音がするのである。

「んー？……嫌な予感しかしねえ、まさかとは思つが……」

琉は近くにあるスプレーを片手に、恐る恐る冷蔵庫を開けた。そして、カレッタ号中に琉の叫び声が響いたのである。

「アキサミヨー（ゲエツ）！ 何だこのでつかいナメクジはあツ！
！ いつの間に侵入しやがつた！？」

そこにいたのは琉の予想を遥かに上回る大きさの、真つ赤でかつベツチャリとした生命体であった。冷蔵庫を急に開けられたにも関わらず、この生物はまだムシャムシャとキャベツを齧つていて。琉はそれを見るなり、生物の付いたキャベツを掴んで引きずり出し、スプレーを噴射した。が、相手はナメクジとは思えぬ身のこなしでキャベツから飛び下り、床を這つて逃れようとしている。

「待ちやがれ！ 汚物は消毒するよに、ナメクジは駆除せねばならん！ タックルス（ぶつ殺してやる）、食らえツー！」

琉は半ばキヤラ崩壊を起こしつつ、スプレーを構えて生物の後を追つた。食堂中を駆け回り、殺虫成分を大量に含んだ白い煙が辺りを飛び回る。

因みにこの世界において、ナメクジという生物は我々が現実世界において目にするナメクジより遥かに大きく、海水に順応しているため塩をかけても死なないというタフさと旺盛な食欲を持ち合せている。そのため一端食糧庫に入ると、特に海の上では貴重なビタミン源となる野菜や果物を食い荒らすという、許すまじき害虫となるのである。そのため琉に限らず船乗りからは田の敵にされているのだ。

なおナメクジというのは俗称で、正確にはイソアワモチの類である。ただこの環境の厳しい世界で生き残るには、それだけの進化をする必要があったのだ。

「さあ、追い詰めたぞ……。しかしさかこの、ナメクジ564を使つ日が来ようとはな……」

それは殺虫スプレーというにはあまりにも大き過ぎた。大きく、分厚く、重く、そして精巧過ぎた。それはまさに拳銃だつた。角に追い詰め、半ば狂気に染まつた顔に自らは気付かず、琉はそのトリガーノズルに指をかけた。

ブシャアアーッ！

拳銃型特大スプレーの先端から、今までにない量の殺虫剤が発射される。これだけの殺虫剤を浴びて生き延びられるナメクジなどいないだろう、そう思われるほどの量を琉は相手に浴びせかけた。

したり顔の琉。口元がニヤリと笑みを浮かべる。しかしその眼は依然鋭く、煙が晴れるのを待つて睨んでいた。死骸を確認せねば安心出来ないからである。が、次の瞬間であつた。

ビシイツ！

「アガツ（痛えツ）！？」

誰が想像出来たであろうか。殺虫剤の煙を貫き、なんとあの生物が飛び出して琉の顔に突進してきたのである。思いきり殴られたような衝撃を頬に感じ、琉はその場で倒れ込んだ。

（何なんだアイツは！？ 本当にナメクジか？ まさか突然変異でも起こしたのか！？）

琉を張り倒し、ナメクジと思われる謎の生物はすぐさま食堂の扉に向かつた。しかし扉は閉まつてゐる。逃げ道などこの生物には用意されていなかつた。

「パルトネール・サーベル……」

サツシユベルトからパルトネールを颶爽と取り出し、サーベルの刃を展開すると、琉は遂に無言となつた。堪忍袋がブチ切れた証拠である。普段のあどけない南国の少年風の顔つきが一変し、世にも恐ろしい鬼の形相と成り果てていた。流石にヤバいと思つたのか、生物の方も逃げるのをやめて琉に向かい始める。琉の眼光が生物に突き刺さり、遂に2体は対峙した！

振り下ろされる琉の刃。颶爽とかわし、再び琉に突つ込む生物の体。軟体状の体が矢の如き形を成し、琉に向かつて来る。それを受け止めるサーベルの刃。しかし生物はその刀身に張り付くと、なんとジワジワと溶かし始めたではないか！ 驚いて生物を振り払う琉。

（恐ろしいヤツだ……。だつたら尚更生きて帰すワケにはいかん！）

再び構成されてゆくサーベルの刀身。トライデントの変形部は、特殊な磁場で金属イオンを吸着しており、溶かされたり欠けたりしてもすぐに再生することが出来る。

「パルト、ヴァニッシュ……」

処刑宣告とばかりに重々しい声でコードを入れる琉。エネルギーが充填され、パルトネールの刃が光り始める。この状態なら、刃は欠けたり溶かされたりすることはない。琉はじつと生物を見据え、剣を構えた。対する生物も壁を伝い、こちらに狙いを定めている。そして次の瞬間！

ズバアツ！ ドゴオツ！

食堂内で交差する琉と生物。琉が着地した瞬間、生物は真つ二つに裂けて床に落ちた。破壊エネルギーを入れられたためか、断面が

光を放つている。

「ざまあねえな……うぐッ！？」

刃の光が収まつた瞬間、琉の脇腹を焼けるような痛みが襲つた。押さえた手を見ると血が滴つており、服の一部が溶かされている。

「チッ、悪あがきかよ……つて何！？」

生物の方を振り向いた琉は信じられぬモノを見た。なんと相手は斬られた断面を自切し、再び体をくつづけていたのである！

「ば、馬鹿な……！？ ひいいつ！…」

すぐに再生した生物に対し、溶けた部分がすぐには収まらない琉。ほとんど一方的にやられたといつても過言ではなかつた。脇腹を押さえつつ、震える手で再び剣を構える琉。

ガチャ

と、そこに扉が開き、空氣を読まずに入つて来る者がいた。

「遅くなつて」めん、「ほん出来た？ ……つて琉！？」

扉が開いたことに気付くなり、生物はすぐさま廊下に向かつて凄まじい速さで這つて行き、入つて來た者 ロッサとすれ違つて出て行つた。それを見たロッサの表情が一変する。

「あれは……まさか！？」

「アギジヤベヒ（へそ）……逃がして……たまるか……」

琉は片手でサーベルを、もう片手で脇腹を押さえつつ後を追い始めた。

「ダメ、そんな体じゃムリよ……それにあれば……」

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』 破(後書き)

琉負傷！ そして謎の生物の正体は！？ そして今回、ネタが結構仕込んでありますw

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』 急(前書き)

食堂内で邂逅した侵入者。ナメクジだと判断した琉は激闘の末に敗れ、ロッサが扉を開けた瞬間に相手は逃げ出してしまった。そしてそれを見たロッサは……。

『リトルシップ・オブ・ホラーズ』急

「あれって……。おい、知ってるのかーー？」

琉は床に崩れつつロッサに聞いた。

「間違いない、あれはわたし！」

「な、何だつてーー？」

衝撃のカミングアウト。ナメクジだと思われた謎の生物の正体は、ロッサの体の一部が分離したモノだったのである。

「最近、特にイグピオンを食べてから体が急に大きくなつて、重くなつて邪魔になつたから、今朝一部を分離して部屋に置いて来て、そしたら軽くなつてスッキリして、でもあんなことになるなんて……」

つまり、琉が前々から感じていた違和感は決して目の錯覚などではなかつたのである。

「待つてーー！ もう一度取りこんで来るーー！」

それだけ言つと、ロッサ自身も液化して後を追い始めた。

「おい、待てー！」

床に血痕を残しつつ、琉はロッサの後を追つた。壁を伝い、ガタガタと走る琉。サッシュベルトをほどいて傷口に当てて押さえつけ、

なんとか血を止めようとしていた。だが、ある程度進んだ所で琉はある重大な事実に気付いたのである。

（しまつた！ こまま行けばエンジンルーム、こままじゅエンジンもロッサも……！）

稼働中のエンジンルームはあちこちに電流が走っており、ロッサが侵入すればあつとう間に消滅することとなる。更にロッサの消化酵素は強力で、エンジンを溶かされたらカレッタ号は止まってしまう。琉は壁に張り付いて緊急スイッチを探し、カバーを外すと音声コードを入れた。

「エンジンルーム・シャットアウト！」

ガタン、といつ音が奥から響く。琉がその場に向かうと、案の定エンジンルームの障壁の前でロッサとその一部が対峙していた。

「間に会つたか！」

安堵の表情を見せる琉。一方のロッサも自身の一部を捕まえ、取り込もうとしていた。だが、思いもよらぬ結果が彼女を襲つたのである。

「うそ……。わたしが、わたしに拒否された……？」

「拒否い？ てことはまさか……」

ロッサの手から逃れた一部は、壁の隅で小さく震えている。それもまるで、怯えた小動物のようだ。

「ロッサ。『ロイツはすでに君自身ではない。君の体から生まれて、独立した意思を持つた全く新しい個体。即ち、君の“子供”とでも言つべき存在だ。……ん？ 子供……？』

琉は痛みをこらえつつロッサに言つた。そして言つた直後、琉はあることに気付いた。そう、これは即ち……。

「ロッサは“母”になれた……つてことなのか！？」

啞然としつつ、琉は言つた。ロッサもイマイチ自覚が出来ない。こんな偶然に、命とは誕生するモノなのか。

「わたしが“母”に？ でも、いきなりそんなこと……」

「自覚はないかもしれない、でも君が新しい命を生みだしたのは事実なんだ。そして生み出した以上、君はその子の“母”となる……はずなんだが」

ロッサはかつての自分の一部 即ち“子供”の方を向いた。

「ロッサ。何度も言つが、あれは君の子だ。それも生まれたばかりの……つてロッサ！？」

琉はすぐに気が付いた。ロッサの手は先端から赤黒く染まり、あの戦いや狩りに使う形へと変貌を遂げていたのである。それだけではない、彼女の眉間が裂け、あの第3の目が開いていたのである。

「ロッサ、一体何をする気だ！？ 相手は同族、それも自分の子供だぞ！？」

琉の脳裏に浮かんだモノ。それは、今までハルムやメンシェ教徒と対峙した時のロッサの様子であった。本来の捕食者としての狩猟本能、そして身の危機を感じた時の防衛本能。どちらを発現した時も彼女の腕は染まり、目を取り戻して以来は額が開いていたのである。

（初めて子を産んだ動物は、子供を我が子と認識出来ずに殺してしまうことがあるという。ましてやロッサからしてみれば、あの細胞片は本体と共存することを拒んだ、いわばガン細胞とでも言つべき存在……そういうことか…）

琉は考えた。ロッサは異物と化した自分の一部を殺すつもりなのだと。自分の体に馴染まなくなつたこの細胞片は、彼女自身を脅かすと考へたのだと。

「ロッサ、バカな真似はよせ！……しまつた！？」

時すでに遅し。琉が言つよりも早く、ロッサの指は我が子の体を貫いていた。

「そんな……」

愕然とする琉。さつきまで殺す気だった相手に、今は同情を覚えていた。だが、ロッサの一部には思いもよらぬ変化が起き始めたのである。

通常、ロッサの指で刺されたモノは、彼女の持つ消化酵素によって内部から溶かされてしまう。そのため、今回も刺された細胞片はそのまま委縮してしまいかと思われた。だがどうだろう、かつてロッサの一部だったこの生命体は委縮するどころか急激に大きくなり始めたのである。

「え……？」

その場から動けぬまま、琉は声を漏らした。彼にとって、さつきから起きている事象は想定の範囲外のオンパレード。脳内は既にパニック状態にあった。

そんな琉を差し置いて、ロッサの“子”は見る見るひびきのトビテに姿を成し始めた。ロッサが指を抜くと、大きくなつた“子”的に色が着いてゆく。やがてただの細胞片だった“それ”は、ロッサをそのまま幼くしたような4～5歳の女の子へと姿を変えたのである。

「ロッサ、一体何が起こつたんだ？」

「取り込めなかつたから、新しくあげることにした。何だか、そうしたくなつたから」

なんと、ロッサは自分の子供に体の一部を分け与えたのである。ロッサのドレスに似た赤いワンピースを着ており、ブルネットの髪は前で切りそろえた形となつていて。ヒトの姿をもつたロッサの娘は、おぼつかない足取りで琉に近付いて来た。そのつぶらな赤い瞳に、琉の青い目が映つていて。“子”は琉に向かつて、そつと手を差し出した。

「仲直り、かな？……さつきは『メン

琉はその場でしゃがんで目線を合わせ、同じよひに手を差し出した。が、次の瞬間である。

デュクシ！

「アツガアーツ（痛えーツ）！？」

無防備に差し出された琉の右手。それを見た“子”はその指を鋭く尖らせ、琉の手の平を貫いたのである。琉はすぐに手を引き、見ると手の平には見事な穴が空いていた。それを見たロッサ、自分の娘の背後からそっと手を伸ばすと、

「デユクシー！」

「いり、ダメでしょ！」

「つて、ロッサ！ 何やつてんだ！？ DVにも程があるぞ！！」

何を考えたのか、ロッサは娘の後頭部に指を伸ばし、刺し貫いたのである！ 思わず痛みを忘れて叫ぶ琉。だがロッサの指が引き抜かれると、娘はハツとした様子で琉の方に向かった。そして、

「いたいことをして、ごめんなさい」

「あ、いや、その……。いづちいづちゴメン」

ロッサは、娘にゲル分を与えることで直接言葉を教えたのであった。しかしそれを見慣れぬ琉にはあまりに衝撃的な光景である。

「とりあえずロッサ、それ人前でやるなよ？ まあとにかく、飯にしようぜ……つづく！？」

食堂に引き返そうとした琉。だが今までショックによつて忘れていた痛みが、ホツとした瞬間に襲い掛かつて来た。ガックリと崩れ

落ちる琉。

「琉！ 大丈夫！？」

「悪い、作れそうにないぜ……。そうだ、今日はロッサが作ってくれないかい？ 大丈夫、やり方なら教えるから……」

ロッサの肩を借りて食堂に向かつた琉。包帯を巻きつつ、琉はロッサに包丁の使い方やフライパンでの炒め方を教えた。ロッサのモノ覚えが良いのか琉のレシピがシンプルだからなのか、料理は案外あつさりと出来上がるのこととなつた。

「やはり親の手料理つてモノを、子供には食べさせないとな。……そう、食べさせられるつむにな……」

「ひしてカレッタ号に内における事件は幕を閉じたのであつた。

『航海日誌×月 日。今日はこのカレッタ号に新たな船員が加わった』

その晩、琉は航海日誌を付けていた。隣の部屋では、ロッサが我が子を抱いて眠つてゐる。そして琉のケガだが、晩になるころには血が止まつており、時折消毒をしながら包帯を取り換えてゐる。しかし脇腹をやられたためか、寝がえりを打つとたちまち痛みが走つた。

『……糸余曲折あつたが、ロッサの子は何とか「ミニミニケーション」がとれるようになった。しかしヴァリアブルが単為生殖をする生物だったとは予想外である。これまで男のヴァリアブルを探して棺を漁つていたが、これはどうも間違いだつたようだ』

片手でキーを打つため、いつもより記録に時間がかかる。それでも彼は打ち続けた。

『……問題は島に着いた後である。幸い私は両利きだ、左手でも武器を扱うことは可能だが、脇腹のダメージがどうにも気になる。やはりバジュラムを頼んでおいて正解だったかもしない』

『……さて、ロッサの娘だが、ロッサは“名前”を付けたことがない。そこで私が名付け親となることに決まった。一応ロッサの名前のパターンに則り、古代語で付けることに私は決めた』

生まれた子には、名前を付けねばならない。いつまでも“子”では正直呼称し辛いモノがある。

『……候補は3つ上がった。そこで私はそれぞれ名前の元になつたモノを生まれたばかりの子に見せ、選んだモノの名前にすることにした。用意したのは一輪の花、遺跡で拾つた宝石、そして夜空に輝く星である』

部屋に戻る前、琉は二人を甲板に呼び出した。そして部屋に飾つてあつた花と売りモノのルビー、そして甲板から見える星空を子供に見せたのである。

『彼女が選んだのは花であつた。選んで早速花を食つてたため、單純に食物だと判断したのかもしれない。実際彼女は食いしん坊だつた。しかし花を選んだという事実には変わらないだろう。そこで私は花を意味する言葉からとつて、この子に“フローラ”という名を付けることに決めたのであつた……』

『リトルシップ・オブ・ホーラーズ』 急(後書き)

新キャラ登場！ そしてロッサが子持ちになつてしましました！ w
新しく誕生したフローラ、果たしてそれからどう活躍するのでしょうか？

♪次回予告♪

「カズ、コレを使えッ！」

「ハイドロが、沈む！？」

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』序（前書き）

（前回までのあらすじ）

アルカリアでの調査をやめ、オルガネシア領のハイドロ島に帰還することとなつた琉とロッサ。その途中でロッサの体の一部が分離、トラブルを起こす。独立した意思を持ったそれはすでにロッサの体の一部ではなく、立派な別個体のヴァリアブルとなつていた。ロッサは囁らズも新たな命を生み出し、“母”となつていたのである。琉によつて、その個体は「フローラ」と名付けられることとなり、更にロッサに体の一部を分け「えられる」とことで成長、少女の姿をとつたのであつた……。

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』序

『航海日誌 × 月 日 明日の朝にはハイドロ島に到着する』

アルカリ亞を出て、フローラが誕生して4日が経つた。琉のケガは快方に向かっているとはいえたとは言えず、右手はなんとか使えるまでいったモノの脇腹の表皮は再生しきつてはいなかつた。

『生まれてから4日で、フローラは随分と大人しくなつた。舌つ足らずとはいえそこそこ喋れるようになり、最初に食堂で出くわした時と比べてかなり変わつたといえるだろ?』

あの時、一步間違えれば琉はフローラを殺していたか、逆に殺されていたかもしれない。ましてや成体のヴァリアブールであるロッサが本氣を出せばどうなるか、琉は嫌でも知ることとなつた。

『メンシェ教徒は、彼女らを魔と称して付け狙つてゐる。だがそれは、本当に単なるスケープゴートとしてなのだろうか? 親の“教育”を受けていない幼体のヴァリアブールは本能のみに従う欲望の塊であり、かなりの危険性を秘めているといふことが今回判明した。ヤツらがヴァリアブールを目の敵にする理由、それにはもつと深い根がありそうである』

それだけ打ち終わると、琉は布団の中に潜り込んだ。彼の脇腹は寝がえりを打つても痛くはならない程度には回復している。

(皆、待つてくれ。明日の朝には着くからな)

翌朝。操舵室には3人。舵を握る琉と、外を見るロッサとフロー

ラ。やがて琉とロッサにとつて、懐かしの風景が目に入る。

「フローラ、ここがハイドロ島。琉の生まれた所だよ。……そういえば、わたしが目覚めてから初めて上がったのも、この島だったね」

「そういうやうだな。……まあ、これでヤツらがいなければな」

カレッタ号がハイドロ島の港に入つてゆく。船の固定装置が港の機械と結び着き、カレッタ号は無事港に到着した。

「ハイサイ、カズ。いきなりだが着いたぜ」

着いて早速、琉は電話をかけた。が、その返事は驚くべきモノだつた。

「丁度良い所に来たなおい！……ぜえ、ぜえ」

電話の向かうから聞こえて来るカズの声は息が上がりおり、バタバタと足音まで聞こえて来る。琉は不審に思い、聞いた。

「ん、どうした。いつもはハアハア言つてるアンタが、今日はゼエゼエかい？」

「とにかく島に降りる。今港に向かつて逃げている。……田を付けられた！」

琉が甲板に出ると、港の方に走つて来る男が見えた。頭の黄色いバンダナが目立つてゐる。その後ろに、ぞろぞろと茶色いフード付きのロープの団体が見えた。

「分かつたすぐ行く！ 待つてよ……ロッサーー！」

ロッサを呼んだ琉。階段を展開し、素早く駆け降りると今度はパルトネールを取り出した。

「ロッサ、先に行つてヤツらの目を引きつけてくれ！ こっちもすぐに行くから！ …… チェインジ！ マシン・アードラーーーー！」

カレッタ号の船底にある格納庫が開き、アードラーが海上に姿を現した。そして陸上に飛び出すとそのヒレを畳み、瞬く間にバイクへと姿を変えたのである。琉はアードラーに跨ると、そのままアクセルを鳴らしてカズの方へと向かつた。

「待て！ 貴様は異端者の知り合いだということは知つている、大人しく我々と同行しろ！」

「アキサミニヨー（なんてこつた）！！ 嫌なこつた、パンナコッタ！ どうせ質問と称して拷問する気なんだろ、それくらい調査済みなんだよ！ てか琉はまだかアーツ！？」

メンシェ教徒に追われるカズ。あちこちにあるモノを利用して散々逃げ回る彼であったが、特殊な訓練どころか1日中PCに向かうオタクがドーピングしたメンシェ教徒達に体力でかなうはずがなく、徐々に差を詰められつつあつた。

「この先は海だ！ もう逃げられはせん、大人しく……ゴフツ！？」

赤い影がメンシェ教徒に飛びかかり、その場から弾き飛ばした。そしてカズの前に立ちはだかるように移動すると、たちまち人の姿をとり始めた。真っ白な肌、赤みがかった黒髪、豊満かつ妖艶な体

つき。振り返ればほのかに光る真っ赤な瞳。それを見た途端、カズの顔がほころびだした。

「カズ、久しぶり」

「もしやその声は……ロッサ様！？ 帰つていらした！ ああロッサ様、相変わらずお美しい……」

その後ろから空氣を読まない爆音が響く。

「ようカズ、相変わらずだな！ そしてそんなにロッサが好きか」

「琉！ やつと来たか！」

琉は片眉をぴくりと上げると、今度は起き上がるうとしているメンシェ教徒の方を睨みつつ、サッシュベルトに差しているパルトネールを取り出した。同時に懐からトリガーパーツを取り出し、セツトする。ガシャン、という音と共にパルトネールの変形部が開いた。

「メンシェ教徒の諸君、お土産だぜ！ パラライザー……！」

容赦なく注がれるパラライザーの赤い閃光が、追手のメンシェ教徒達の額に突き刺さつてゆく。追手だったメンシェ教徒は誰一人動かなくなってしまった。

「ロッサ、そいつらを縛つて連れてくぞ。本拠地を聞き出さんとな

メンシェ教徒達が目を覚ますと、そこは見知らぬ風景の中にいた。

「お目覚めかい？」

背後からふと声がある。声の方を向くと、そこには男がいた。まるで鬼を思わせる筋肉質な体に浅黒い肌、怒髪天を突く黒髪、狂気を秘めた青い目。忘れるはずもない、その姿はポスターや映像で見たあの男そのものであった。

「や、彩田琉之助！ 何故こんな所に！？」

「アンタ達が俺の故郷を荒らしていると聞いてね、帰つて来たワケや！」

飛びかかるうとするメンシェ教徒。しかし全員手を後ろで縛られており、動くことが出来ない。

「なあ琉、『イイヅらは本当にそんなこと吐くのか？』

部屋にはもう一人、黄色いバンダナを頭に巻いた眼鏡の男が入つて来る。さつきまで追つていた身が、今では逆に囚われの身となつていたのであった。

「ロッサ、また頼むよ」

琉の背後から現れたのは女であった。鮮血を思わせるその瞳を見て、メンシェ教徒達は戦慄する。その女は何を隠そう、彼らが悪魔として憎み恐れて来た存在であるからである。

「！」これが悪魔……！ おい貴様、自分が何をやつてるのか、分かつてるのか！？」

「決まつてるだろ？ 今からお前達に、彼女の栄養分となつてもら

「う

琉がそのセリフを言つた途端にメンシェ教徒達、並びに傍らで聞いていたカズの背筋が凍りついた。

「ちょ、琉！？ 一体ロッサ様に何を……」

言いかけたカズの口を琉の手が押さえつけた。

「……しかし良いことを教えてやろう。俺はこの四人の中で、一人だけは生きて帰してやろうと思つてゐる。こちらとしても、同族が眼前で食われる様といつのは見たくないモノだからな」

平凡と言ひ放つ琉。彼が言つとロッサは艶めかしく舌舐めずりをし、メンシェ教徒達を震え上がらせた。

「ただし条件がある。こゝを出してほしくばお前達の本拠地を喋つてもうう。良いな！？ ロッサ、^{ヨリ}そつなのを選んでて良いぞ」

琉はロッサにそう言つと、カズを連れて部屋を出た。

「琉！？ アンタ、ロッサ様にヒトを食わせてたのか！？」

「嘘に決まつてるだろカズ。良いか、アイツらはロッサを悪魔と認識させるためにあることないこと吹きこまれてゐる。俺は単にそれを逆手に取つて利用してゐるだけ、あつちが勝手にビビってるんだぜ。……だからカズ、余計なことは言つな。それに……」

琉が扉の方を顎で指した。すると、

「ふふふ……貴方も美味しそうねえ……」

「い、いやあ～ッ！？ や、や、やめてくれー！ あ、ああ、メンシHの神よ、どうかお助けを……」

扉からはメンシH教徒達の悲鳴と、ロッサの声が聞こえて來た。

「……聞いて分かると思うが、ロッサは演技が非常に上手い。相手も笑える程に引っかかってくれるからこの手段を取っているのさ」

琉は何処か自慢気に話した。この男、中々に狡猾である。

「口、ロッサ様にならむしろ食べられたいかも……」

「ハア、お前は何を言つているんだ……。……ん？ 待てよ……」

琉は何かを考え始めた。そしてポン、と手を叩くとカズに向かつて言った。

「良いことを思ついた。カズ、ちょっと耳を貸せ……」

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』序（後書き）

遂に帰つてきました！ そして常に電話の向こうで喋つていたカズ
が、久々に姿を現しましたね～ w にしてもコイツ、変態だな w (　
お前が言つか)

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』 破(前書き)

ハイドロに帰つた琉を待つていたのは、メンシェ教徒に追われる旧友の姿だった。そこで琉はカズを救出し、同時にメンシェ教徒を捕えることに成功する。

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』 破

琉がカズと外に出てる間、ロツサはメンシエ教徒達に“齋し”をかけていた。

「ひいっ、やだ、死ぬなんてやだ……！」

「ふふふ、本音が出ちゃつてるわね。今まで食べて來た子達はもつと強情だつたわよ？ でも良いわあ、もっと怯えてちうつだい……！」

…

ついつい演技に熱の入るロツサ。誰も知らない第三者から見れば、まさしく悪魔としか言いようがないだろう。だが、メンシエ教徒は思わぬ方法に出た。一人があることに気が付き、ひそひそと話始めたのである。

「あらあ、内緒話？ そんな隠しじとなんてしてないでわたしにも聞かせてよお！」

それに氣付いたロツサは高圧的に問い合わせた。しかし相手の反応は、ロツサが今まで見た者の誰よりも異端なモノであった。

「おい貴様、何であの男を食わないんだ？ 我々よりかはずつといと思うんだが」

ロツサの顔が一瞬歪む。この男、何を考えているのだろうか。ロツサには分からなかつた。

「変なこと聞くわねえ？ あの人は食べないわよ、だつて拾つて

くれた……」

「拾ってくれた恩があるから食わない？ おかしいぞ、悪魔だつたら田観めて早々にあの男を食らつてもおかしくないはずだ。……そもそもあの男に守られてる時点で、悪魔は実はヒトを食えないんじやないか？」

微妙に曲解されるとほいえ、彼らの言うことはあながち間違つていなかつた。ロッサはメンシェ教徒の多用するスタンガン、即ち電撃に弱い。そして例え相手がメンシェ教徒でも命を奪うことまでは琉によって止められている。ハルムを見つけた時のように攻撃することはほぼ不可能なのだ。

「ロッサ、白状するヤツはいたか？」

「何とも良いタイミングで、琉とカズが扉を開けて入つて來た。

「おい貴様！ こんなことしてタダで済むと思つなよー。」

「そう言えど、何で貴様は一緒にいるにも関わらず食われないんだ

「…？」

「こじぞとばかりに噛み付くメンシェ教徒達。ロッサは目を潤ませた状態で琉に言つた。

「うう、相手がいきなり強くなつたよー！ しかも大したことないつて言われたよー……」

「そつか。だが安心してくれ、ひそひそひそ……」

琉はロッサに何かを吹きこんだ。そしてメンシエ教徒に向かうと
こう言ったのだ。

「アンタ達、ロツサをカン違いしてたみたいだな。だつたら田にモノノくれてやるぜ。ロツサ、オードブルだ。カズを食え」

琉がそういうつてカズに目を向けると、ロッサはたちまち液化してカズに飛び掛かつた。

「お、おい琉！ 何を考えてるんだ、早く彼女を止めて……」

「ふふふ、逃げちゃダメよお……」

カズは素早くロッサを振り払い、部屋から出て行つた。だがロッサの追撃は止むことがなく、ロッサが廊下に出てわずか十数秒。悲鳴が上がつた。

「口、ロッサ様じりかお許しを……みぞやああああああー!?」「あくべつ、溶かしてあげる……」

声を聞き、震え上がるメンシェ教徒達。琉はそれを半分笑いをこらえつつ眺めていた。

（ロッサがすごいのは分かつていたが、カズがかなりの演技派だつたとはな。こりやホラー映画かなんかの被害者役で一儲け出来るぞ）

琉が心の中で呟いている、そんな中でも一人の演技は続いた。

「どういふ? 田舎が回りなへなつてあけやつたでしょいふ。」

「あひいつー？ らめえ溶けちゃうのぉおツー！」

思わずため息をつく琉。カズによる迫真の演技は、カレッタ号中に響き渡っていた。

（流石にやりすぎだろ常識的に考えて……。まあ、「イシラが本氣でビビってるからアリとしようか）

やがてカズの声は徐々に小さくなつてゆき、遂には聞こえなくなつた。この加減の仕方も、まさに役者とでも言いたくなるモノであった。

「ふふふ……」じらじらつわも。美味しかったわよ、カズ」

ロッサは遂にカズを食らい尽した、そうメンシェ教徒達は思いこんで戦慄した。

「狂つてる！ 貴様は友人をも悪魔にささげるのかッ！？」

「……だとすれば、ましてや敵対しているアンタ達は尚更、ねえ？」

毒々しくセリフを吐く琉。ギロリ、と彼の目が4人を一瞥した。

「わ、分かった言つ！ 言つからこの私は助けてくれーー！」

「貴様！ 裏切る氣か！？ だつたら私が言つてやるーー！」

揉め始めた4人。さつきまでカズを追い詰めていたチームワークは何処へやら、今度は自分が助かりたいために言い始めた。

「まさに極限状態つてヤツだな。良いだらつ、早い者勝ちだぜ。今から3数えるからな、数え終わつたらさつさと吐けよーーー。」

「ゴクリ、と唾を呑む4人。琉はメンシェ教徒を睨みつけたまま、口を開いた。

「3、2、1、ハイーー！」

「ハイドロ湾の海底だ！ そこに我々の基地があるーーー。」

多少の時間差はあつたモノの、4人はそろつて“ハイドロ湾内の海底”と答えた。それを聞いた琉は驚愕し、同時に強い猜疑心を抱いて更に問い合わせした。

「海底だと！？ ふざけるなコラ、ラング装者を敵に回したアンタ達に、そんな技術があつてたまるか！ーーー！」

一方その頃廊下では、見事な演技を見せた役者一人がひそひそと話していた。

「うふふふー！ アイツらすっかり引っかかつただろうなーーー！」

「そうね。じゃあ作戦の続き、わたしの部屋に隠れよっか

カズはロッサの部屋に入った。琉の部屋と比べてあまりモノを置いておらず、中はスッキリしている。そんな部屋でも、カズは有頂天だった。

「ヒヤツハー、ロッサ様の部屋だーー！ 何だか良い匂いがするぞー

「...」

小声ながらも歓喜の声を上げるカズ。女性の部屋に入ったことがなく、ましてや今いるのは憧れの巨乳美女の部屋である。ムリもない。

「あれー？ おかあさん、このひとだれー？」

「あ、じゅうフローラ！ 出できちゃダメじゃない...！」

部屋の隅で壁に擬態していたフローラが、カズの声に気付いてひょっこりと現れた。すぐに注意を始めるロッサ。

「え？ 今のは、誰？ って、えええッー？」

声に気付いて周りをきょろきょろするカズ。するとカズの目に、憧れの女性そっくりの幼女が映り込んだではないか！ 当然のことながら、彼はびっくり仰天であった。

「ああ『』めん、まだ話してなかつたね。この子はフローラ、わたしの子なの」

「ロッサ様の子供、ってことは...」

ロッサの言つたことが、カズの脳内で反響する。そして彼の常識の範囲内で得られる結論はただ一つ。

「琉ウーッー！ あの野郎、シャイボーアだと思つてや抜け駆けして“作り”やがつたなあッ！？ あとで小1時間問い合わせてやるッ！...」

「……カズ、どうしたの？ ワケが分からないよ」

地団太を踏むカズ。それを疑問の目で見つめるロッサとフローラ。単為生殖をする彼女らには分からぬ話である。

「さて、わたしはもう一回行つて来る。今度は舐められないよつこしないとね！」

「……完ツ全にアイツに毒されてる。ここのまおじやロッサ様が……わあツ！？」

突如揺れ出した船。よろける3人。

「アギジャビヨー（どうなつてんだ）！？ ここは仮にも湾内だ、こんなに揺れるワケが……！？」

カズとロッサは扉を開いて廊下に出た。湾内でここまで揺れるなら、海はすでに大荒れであり、一刻も早く陸に上がらねばならない。だが予想をしていなかつた事態が、ロッサとカズに遅いかかつた！

バーン！！

途端に響きだす銃声。カズは慌てて扉を締め直して、言った。

「やばツ！？ 何でメンシェ教徒が入つて来てんだ！？」

「フローラ、カズ、隠れて！ やつつけてくる！？」

ロッサが指を鳴らすとその体はたちまち液化し、扉の隙間から流

れ始めた。そして……

「ぎゃあああああーー?」

突如上がる悲鳴。ロッサの奇襲を食らつたらしい。扉が開き、ロッサが顔を出した。

「やつづけて来た! でもまだいるーー!」

「分かった、オレも行こうー。これでも一応空手が出来る、ロッサ様一人に任せたら男が廃るしなーー!」

カズはそう言つと、ロッサに着いて出て行つた。そして倒れたメンシヒ教徒を拾つて盾に使い始める。これで銃弾は防げるはずである。

「ロッサ様に傷は付けさせん! 」の和雅が相手をしてやるーー! ーー!

「それより早く!」のことを琉に伝えないとー。先に行つてーー! ーー!

「……はーい。やっぱオレは戦力外か……」

人質を抱えつつ見栄を切るカズに、冷静にツツ「むロッサ。渋々承諾し、カズは琉が尋問を行つてゐる部屋、作業室へと向かつたのであつた。

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』 破（後書き）

カズとフローラがばつたり出くわしてしまいました。確かに、普通ならそうやって考えますね。しかし一難去つてまた一難、琉達はこの危機を脱することは出来るのでありますか！？

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』急（前書き）

カズを追つて來たメンシェ教徒を、逆に捕えた琉とロッサ。迫真の演技ではぐらかしたカズとロッサだったが、メンシェ教徒の襲撃が始まつた！

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』急

「本當だ！ 我々の基地はハイドロ湾の底にある……嘘など付いていない！……」

必死で自白するメンシエ教徒。琉は表情を歪めたまま、その証言を聞いている。しかし相手の手に握られた、妙な機械には気が付いていなかつた。

「じゃあ聞こいつ。海底に基地を作り、一体何をやつてゐる？ 何も隠すんだったら他の場所があるだろ？ が」

「それは……」

「これ以上は言えないのだろうか。メンシエ教徒達は口を閉ざし、うつむき始めた。どうやら海底に基地を作つたのは、姿を隠す以外にも目的があるらしい。」

「これ以上は言えないか、じゃあ別なことを聞かせてもらひぜ。どうやつて基地を作つた？ ラング装者や他の種族の力を借りず、どうやつて海底に基地を作つたんだ！？」

琉にとつて、これは最大の疑問であった。これらの勢力を敵に回すメンシエ教に、そんな技術などあるワケない。そう思つていたからだ。

「……別に貴様らの力など借りなくとも、海底基地くらいなら作れるだ」

「まつ？」

返つて来た言葉は若干反抗的なモノであつた。琉は一瞬豆鉄砲を食らつたような表情をしたモノの、すぐに平静さを装つた。

「なるほど、そちらはそちらで中々に優れた技術を持っていたのか……」

「当たり前だ！ いつまでも異種族の技術にしがみ付いている貴様らとは違う！ 貴様自身も分かつてることだろう、ヒト族が何故大洪水の後に海を制覇し、全ての陸地を発見出来たか！ それはヒトが神に選ばれし優秀な種族だからだ！」

琉の言葉に対し、メンシェ教徒は噛み付くようにセリフを吐いた。琉はそれを黙つて聞き続ける。

「弱き種族は我々に屈して大人しくしていれば良いのだ！ 我々は最も優れた種族、即ちこの世界の頂点に立つべき存在。その中でも神の力を受けた我々はヒトの中でも上位に立つべき存在なのだ！」

「本音が漏れたな。要するにこの世界のテッペンに立ちたいだけなんだろ？ そしてそのために他の種族をダシに使い、ロツサ達を迫害する。そういうことなんだろ？！」

作業室の中で繰り広げられる押し問答。琉の語氣が徐々に強まつてゆく。だが琉がセリフを放つた直後のことであつた！

ガタン！

「ん！？ 何だ今のは？」

波が起るには強い、妙な揺れ方。湾内である港で、ここまでの大波が起るはずがない。琉はすぐにメンシェ教徒の方を睨んだ。そして気付いたのである。

「おい、それを見せる！」

琉は、メンシェ教徒の一人が持つているモノを見つけて取りあげた。

「追跡「イン！？ そうか、仲間を呼んだな！！」

「気付いたところで手遅れだ！」この船はハイドロ湾の底に沈む！」

間もなく廊下から銃声が上がる。このままではロッサとカズ、場合によつてはフローラが危ない！

「アギジャベツ（くそッ）！」

琉はパルトネールをシユーターに変形させると扉に向かつて走つた。

「琉、メンシェ教のヤツらが……アガツ（痛ツ）！？」

「カズ！？ 大丈夫かしつかりしろ！…」

偶然にも扉の前に来ていたカズが琉にぶつかつた。

「つてえー！ ハツ、それより琉、メンシェのヤツらが」

「分かつてゐる。あん中に一人コインを持つてゐるヤツがいて、呼び出しあがつた。行くぞ！」

琉が走ると、ロッサが自室の前でメンシエ教徒を相手取つてゐた。華麗でかつ素早い動きを駆使してメンシエ教徒を翻弄するロッサだが、スタンガンを使用する敵を前に防戦一方となつてゐた。

「パラライザー！！」

赤い閃光がメンシエ教徒に突き刺さる。倒れ込む敵を見て、ロッサの顔に安堵の表情が浮かんだ。

「琉！　来ててくれた！？」

「ロッサ、ヤツらを外へ！　このままじや船」とやうやくれるぞ！

琉はロッサを片手でかばい、メンシエ教徒の前に立ちはだかつた。

「しかしフローラは！？」

「ヤツらを、フローラから遠ざけるんだ！　……なるほど、後部甲板から入つて来たんだな」

琉はロッサに小声で伝えつつ、メンシエ教徒と対峙した。幅の狭い廊下で、一体ずつ相手にする琉。パラライザーを撃ちつつ、後部甲板の方向へと突き進んでゆく。

「琉！　後ろ後ろ！！」

「何イ！？」

メンシェ教徒の攻撃は予想外に早く、表の甲板からも侵入された。ロッサの部屋の前で、挟み打ちにされる三人。このままではパルトネールはもとより三人の体力がもたない。万事休す。しかし琉にはまだ、残された手段があつた。

「カズ、コレを使えッ！」

琉は懐から棒状の道具を取り出し、カズに手渡した。

「コレは……バジュラム！？ しかしこんなんオレに使えるのか！？」

「良いから“バジュラム・バトルフォーム”と叫んで引き延ばせ！ アンタでも使える形のヤツだから……チツ！」

知恵を付けたのか、メンシェ教徒はパラライザーを食らつた仲間を盾にして突き進んできた。これではいくら撃つても止められず、むしろパラライザーの受け過ぎで心臓が止まつて死に至る危険性すらある。琉はトリガーパーツを悉々外し、素のパルトネールを構えて激突した。

「……分かった、やつてみるよ。バジュラム・バトルフォーム！」

カズは琉に言われた通りにバジュラムを引き延ばした。するとバジュラムの両端から、光と共に金属で出来た棒が出現した。その根本には鉤状の突起がそれぞれ一本ずつ付いており、見た目は三叉の鉤のようになつている。

「そいつを真ん中で引き離せ！ そうすりやカズにとって、馴染みのある形になるはずだから……！」

相手のナイフをパルトネールで受け止めつつ、琉はカズに向かってアドバイスをした。早速カズはバジュラムを一つに分離した。

「ふん。たかが武器を持った所で、神の力を受けてない貴様に何が出来る？」

カズをあざ笑うメンシェ教徒。しかし、そのカズの顔は何処か余裕ともとれる表情を浮かべていた。

「へつ、言つたな？ ジゃあその目でしつかり見るが良いさー。」

一本のバジュラムを回し、鉤状の部位に指をかけ、逆手で構えるカズ。途端にキレを増したその動きを見て、メンシェ教徒は警戒し始めた。

「琉、カズは戦えるの？」

「アーツはな、情報屋であると同時に“釵術”の達人でもあるんだ。ただ、何か得物がないと弱気になるだけでね……」

カズ目がけて切りつけるメンシェ教徒。迫り来る刃を、釵に変形したバジュラムの鉤が受け止める。一瞬の隙を見て、片割れのバジュラムの柄がメンシェ教徒の鳩尾を捉えた。思わずナイフを落とすメンシェ教徒。更にカズはバジュラムを逆手から順手に持ち替え、首筋を打ちつけて気絶させた。

「カズ、後ろのヤツは頼んだぜ！」

「おう、分かつた！ オラオラ、やられたいヤツは前へ出る、ロツサ様には指一本触れさせねえ！！」

「こゝぞとばかりにバジュラムを振るうカズ。単純に好戦的になつたのもあるが、同時にロツサに良い所を見せたいというのが彼の戦う原動力となつていた。

一方で後部甲板への道を開けようとしていた琉は、トコロテンのように入つて来るメンシエ教徒にイラ立ちと焦りを感じていた。

「ええいキリがないな、だつたらこゝだ！ カズ、場所変わつくれ！」

「了解ッ！」

琉は隙を見てカズと場所を交代、カズが道を開けることとなつた。琉は後ろに回るとメンシエ教徒のナイフをパルトネールで受け止め、そのまま押し返す。

「琉、こゝはわたしが！」

「待てロツサ、今こゝで眼を使うのはよせ！ 狹い場所でアレをやつたら俺とカズまで巻き添えになる……」

ロツサを止め、琉は相手の刃を受けつつ蹴りを入れた。吹つ飛んだ敵が後ろの連中を巻き込んで倒れてゆく。倒れた同胞を踏みつけて、メンシエ教徒は尚も突き進んできた。

「琉、外に出られるぞ！ 早く来い！！」

「よつしゃ、でかした！！ ロッサ、準備だけしといてくれ

カズが後部甲板への出口を切り開いたのを確認すると、琉はパルトネールを引き延ばして折り曲げ、パルトブーメランを発動させてそのまま扉に向かつて走った。

「よし、戻つて来た。ロッサ、今だッ！！

琉がパルトネールをキヤッチし、ロッサに合図を出す。ロッサが扉の前に立ちはだかると、その眉間にグワツと開いて“眼”が出現した。そして一端額に手をかざし、払うような仕草を取るとたちまち赤い光がカレッタ号の中に照射された。

「う、うわーッ！？」

狭い船内に密集していたメンシェ教徒達はロッサの催眠眼光から逃れることができず、意識を失いバタバタと倒れ込んでいった。

「残りは外の連中だな！ ロッサ、今のうちに中で倒れてる連中を船の外に出しといてくれ。起きないうちにな！」

再びトリガーパーツを取り出した琉。一方でカズは港で多数のメンシェ教徒を相手に応戦していた。目にも止まらぬ釘裁きが、迫りくる刃を受け止め、更に敵の体を打ちすえる。

「馬鹿な！ ヤツは神の恵みを受けていない上に、異端者のよつこ装者でもないはずだぞ！？」

神の恵みを受けたはずの同胞が、よりもよつて一般人にねじ伏せられてゆく。メンシェ教徒にとつて、これは悪夢以外の何モノで

もなかつた。

「くそッ、」こうなれば……！」

先程発言したメンシェ教徒が、拳銃を取り出して狙いを定める。カズは目の前の敵を迎え打つのが精一杯で気付かない。しめた、とばかりに引き金に指を置くメンシェ教徒。しかしそれに気付いた琉の、パルトネールの先端が火を噴いた。

「うがッ！？ 馬鹿な……！」

背後から迫る赤い閃光が、銃を持ったメンシェ教徒に突き刺さつた。その手に持った拳銃が、空にむかって虚しく吠える。相手が増え、混乱するメンシェ教徒に向かい、琉は一喝した。

「良く聞け！ 薬物に頼り切つてゐようつなヤツはな、自分で訓練したヤツに勝てるワケがねえんだよ！……」

銃声に気付いて振り向いたカズ。すぐに状況を把握すると、琉に向かってサムズアップを出しつつ言つた。

「琉、良いこと言つじやねえか！」

「照れるぜカズ。まあ良いや、久々に一人で大暴れといこうぜ！……」

琉はパルトネールからトリガーパーツを外して懷にしまつと、通常形態のパルトネールを持ち直し、見栄を切るようにして構えた。ナイフを構えて迫るメンシェ教徒。ナイフの刃をパルトネールが受け止め、弾く。武器を弾かれうろたえる敵に、琉の脚が追い打ちをかける。吹き飛ばされた敵は周りのメンシェ教徒を巻きこみつつ倒

れ込んだ。

カズは手に持ったバジュラムの柄の先端を交差させ、呼吸を整えていた。次の瞬間、カズはメンシェ教徒の眼前で飛び上がり、太陽をバツクに睨みつける。カズを目追いしたメンシェ教徒は太陽を口に見てしまい、思わず目を覆った。

「必殺・十文字陽炎裂き！」

叫びと共に釘と化したバジュラムを持ち替え、目を覆う教徒達目がけて舞い降りるカズ。落下と共に振り下ろしたバジュラムが敵の額を捉え、更にもう一本のバジュラムが腹部を直撃した。崩れ落ちるメンシェ教徒に目もくれず、カズのバジュラムは次なる得物にその先端を向ける。

「数が多いな……パルトブーメラン！」

敵を一体打ち倒し、琉は一端群れから離れるとパルトネールを引き延ばしてブーメランを起動、投げつけた。回転しながら相手をなぎ倒してゆくパルトネール。それに便乗し、琉は素手のまま構えると再びメンシェ教徒達の中に突っ込んでいった。彼の拳が、彼の手刀が、確実に相手の頭数を減らしてゆく。

「まずい、退け！！ くそッ、これだけ投入してもダメなのか！？」

流石に勝ち目がないと悟ったのか、メンシェ教徒が撤退し始めた。仲間を抱え上げ、次々に小型艇に乗り込んで去つてゆくメンシェ教徒達。追い打ちをかけようとしたカズを、琉は片手で止めた。

「今日は見逃してやるう……だがな！ 神の怒りに触れたこの島は明日の夜、大地の叫びと共に海の底に沈む！！ 覚悟しろよ……」

「何い？ ふざけたことを……」

琉が噛み付いたその瞬間、突如地面が揺れて一人はよろめきだした。

「どうなつてやがる……今のはタイミングが良すぎるだろー？ それにハイドロが、沈む！？」

カズが声を漏らす。

「最初に船が揺れたのはヤツらの小型艇がぶつかって来たからだが……今のは一体何だつたんだ！？ まさかヤツら、自在に地震を起こすことが出来るとか、そういうふざけた技術を持つてるんじゃあるまいな！？」

琉は考えた。メンシェ教徒が海底に基地を作った理由、それはこの島に何らかの技術を用いて、脅しをかけるのが目的なのだと。しかしそれが何なのか、彼には全く予想がつかなかつた。

「まあ良いや、どうせハッタリだろう。この島の真下には火山帯のマグマが流れている、いまの地震ならちょくちょくじゃないか？ それにせつかくだし、カレッタでゆっくりしてつてくれや」

『ハイドロよ、琉は帰つて來た』急（後書き）

旧友との再会。これは一人に何をもたらすのか。そしてこの邂逅編ですが、一三章で一端完結してまた新たに始めようと画策しております。

（次回予告）

「正氣か、お前達は！？」

「なんとしても止めてみせる……！」

『メンシェの予言が当たる時』序（前書き）

（前回までのあらすじ）

アルカリアから帰還した琉とロッサ。途中で誕生したロッサの娘フローラと共にハイドロ島に着いた一行を待ち受けていたのはメンシェ教徒と、それに追われるカズであった。何とかメンシェ教徒を退けた一行であったが、去り際に“この島は明日の夜、大地の叫びと共に海の底に沈む”という不吉な予言を放つたのであつた……。

『メンシユの予言が当たる時』序

「へえ、島民を拉致して兵器作りとは……。メンシユもバカにならんことをやるんだねえ……」

「しかも毒ガス実験のオマケ付きや。下手すれば得意先の職人達が全員あの世行きになつてた所だぜ」

ハイドロに帰還したその日の昼下がり、琉はカレッタ号の船内にてアルカリ亞での出来事を話していた。

「しかしあ、無事に帰れたからまだしも……。しかしそのリベルつてヤツがロッサの記憶の鍵になるのか」

「ああ、恐らくな。しかし肝心な史料が出て来ない。流石に、遺跡から一個人を特定するのは難しいぜ……」

ロッサの記憶に関わる重要人物、リベル・ドラゴニア。彼がいかにしてロッサと出会い、関わることとなつたのか。それは未だに深海の闇に隠されたままであつた。

「それより何より今思い出したんだが……。琉、お前いつの間に“仕込み”やがつた?」

「はい? “仕込む”って、味噌か?」

琉には分からなかつた。いや、いきなりこう言わされて分かる人はそうそういないだろ?。

「とほけんじやねー！ さつき会つたぜ、ロッサ様の“御子”にな
！！」

「“御子”！？ …… フローラのことか！！」

やつと理解出来た琉。しかしカズの表情は“妬み”によつてどん
どんねじ曲がりつつあつた。

「良いよな、お前は！ ぬけがけして、ロッサ様に初めての相手を
してもらつて、あの豊満な体を堪能しまくりながら……」

「そこまでだ。カズ、昼間つから“ノクターン”な発言をしそぎだ
ぜ、ちよつとは自重しろ！ つかお前、何か勘違いしてないか？」

琉はカズの勘違いをすぐに見抜いた。恐らく、琉とカズが立場が逆
でも、同じ勘違いをしていたであろう。

「良いかよく聞け。彼女らは単為生殖、フローラは彼女の余つた細
胞から生まれた子だ。どうもヴァリアブールに“男”はいないらし
いことが分かつた」

「い、御冗談を！？」

カズからすれば極めて残念な話である。いや、そもそもヒトとヴァ
リアブールは別種の生物であり、間に子供が生まれる方がおかし
いのだが。

「残念だつたな、色んな意味で。そしてカズが、ロッサと何がした
いのかがよく分かつたぜ」

「うう……」

カズの顔がたちまち真っ赤に染まつてゆく。今にも耳から湯気が、顔から火が出そうな勢いであつた。

「琉、連れて來たよ~」

そこにはフローラを連れたロッサが入つて來た。

「おお！ 子持ちになつてもそのボディを維持し続けるなんて……ロッサ様素晴らしいです！！ そしてフローラたんもママに似て可愛い……」

「おい、仮にも子供の前だ、少しほは自重しろよカズ……！？」

琉がまたツツコもうとした時、突如船が揺れ始めた。

「つとと、これで4回目だぜ！？ ここは真下にマグマが流れているとはいえ、いくらなんでも多くないか？」

「なあ琉、やつぱヤシらの言つたことは本当なのかなあ？」

カズが弱氣な声を上げる。メンシエ教徒を追い返したこの日、ハイドロでは不審な地震が頻発していた。そしてその度に、メンシエ教徒の捨てゼリフである“大地の叫びとともに海の底に沈む”という言葉が脳内で響くのである。

「ねえ琉、あの4人はどうしたの？ もう一回聞きだそつよー」

「ロッサ、アイツらならさつきの連中が回収していったぜ。いうな

「いや……」

琉はある案を思いついた。

「今からここの湾に潜る。遅かれ早かれ乗りこむつもりだつたからな、ヤツらの持つてた追跡コインを、ちゃつかりこちらのヤツにすりかえておいた。これで基地の場所が特定出来るぜ」

琉は得意げに携帯電話を取り出し、レーダーを表示した。それをカズとロッサ、そしてフローラが興味津々に覗きこむ。

「ここの水面にあるのがカレッタ号。そしてここのポインターがヤツらなんだが……」

「とりあえず追いかけよ! 島が沈んでからじや遅い! …」

舵を切ろうとする琉。しかし彼はその手を止め、言った。

「ロッサ、ちょっとこいつちへ」

琉はロッサを呼んだ。

「ロッサは行くだらうが……フローラはどうする? カズに預けようと思つんだが」

海の中はプロの世界。生まれたばかりのフローラと素人のカズを海底に連れて行くのは、これからやることの危険性を熟知している琉にとつて許されぬことであつた。

「……うん、そうする。カズなら、安心して任せられるから

「ありがとう、ロッサ」

生まれたばかりの子を母親と引き離すことにして、琉は抵抗を感じていた。しかしロッサはそれを承諾したため、琉は決心が付いたのである。

「カズ、島に残ってくれないか？」

琉は思い切ってカズに言った。

「何だつて！？ オレだってハイドロの人間だ、なのにアンタ一人に任せてオレは島で待機だあ？ ふざけてんじやねえぞ、オレも行く！」

案の定、カズは琉に突っ掛かった。島民として、故郷を救いたいのはカズも同じであり、それは琉にもよく分かっていることだった。

「！」のフリムンがッ！…

それでも琉はカズを一喝した。メンシェ教徒相手に放つような剣幕が、船内に反響する。あまりの迫力に、流石のカズも黙りこくり、ロッサとフローラは抱き合って引いていた。

「……すまん、つい大声出しちまった。あのな、こういうことに素人さんを巻き添えにするのは、俺のプライドが許さないんだ。それに……」

琉はフローラの方をチラと見た後、続けた。

「フローラを、預かってほしいんだ。アンタだからこそ安心して預けられる、だから島で待機して欲しかったんだ」

「……だつたら仕方ない。この子のためだ、オレは島に残るぜ……」

カズとフローラをハイドロの港に残し、カレッタ号は湾の海底に潜つて行く。確信は持てなくとも、琉は遅かれ早かれ突入するつもりであった。

「ヤツらが向かつたのは水深250m。つまり、この湾の最深部つてことか」

レーダーを確認しつつ、琉は呟いた。追跡コインの軌跡を辿り、潜水形態となつたカレッタ号がその地点へと向かつて行く。と、その時だつた。

ガタン！

サーチライトの向こうの闇の中から、カレッタ号目がけて一筋の光が放たれたのである。不意撃ちによる衝撃が、琉とロッサを襲つた。

「うわッ！？ やりやがつたなこの……ん？」

すぐに迎撃の準備をしようとした琉。だがその時、琉の手元から呼び出し音が鳴り始めたのである。

「大体の想像は付くが……」ちらりカレッタ号ー」

「飛んで火にいる夏の虫とはまさに貴様のことだな、彩田琉之助」

相手からの第一声。琉はそれを挑発ととった。いや、挑発としか
とれなかつたと言つた方が良いだろつ。すぐにツインレーザーのレ
バーに手をかけて、琉は答えた。

「あいにく、火を吹くのはこっちだぜ。基地」と吹つ飛ばされたく
なければ、大人しくハイドロ島から撤退することをお勧めしようか
！」

「貴様がこの基地を撃てば、貴様の船も吹き飛ぶこととなるぞ？
それでも良いかな？」

「何イ！？ ビウ！ いつ」とだ、まさか爆弾でも詰めてんじゃなかろ
うな！」

相手は、何処か余裕ともとれる口調で話した。一方の琉は動搖を
隠せない。

「彩田琉之助。貴様の船は既に包囲されている、大人しく武装を解
除せよ」

「包囲？ ふざけるな、レーダーにもサーチライトにも引っかかる
ない船なんているワケ……」

ガタン！ ！

一度目の衝撃。言葉の途中でよろける琉とロッサ。

「琉、気を付けて！ 周りに他の船が一つ一つ……六つはいる！」

それも急に出て来た……

「何、それは本当か！？ …… アギジヤベツ（くそツ）……」

悔しさを吐く琉。やむなくツインレーザーを仕舞い込んだ。

「それで良い、そのまま」ちらの船と共に来てもらおう。我々メンシェ教の開発した高性能擬態戦艦“ハリバット”的能力、思い知つたか！」

ハリバット。高性能なステルス装置を搭載した、メンシェ教側の新たな戦力である。流石の琉とロッサも、これを察知することは出来なかつた。何故なら本来この世界では完全に戦闘向けの船など作られておらず、ましてやステルス装置など作られているワケがないためである。しかも相手は6隻、本来探索用であり戦闘に特化したワケではないカレッタ号に、勝ち目は全くと言つて良い程なかつた。連行されるカレッタ号。六つのビーム砲に囲まれ、ヘタに動けばたちまち新たな遺跡に変えられてしまつ。通信を切り、琉は痛感していた。自分は罠にハメられた、相手は最初から自分達をおびき出すのが目的だつたのだと。

「琉、どうするのー？」

ロッサの不安そうな声。琉がそつと彼女の肩を抱くと、かすかに震えているのが分かる。琉は少し目を閉じ、言つた。

「とりあえず、話は基地に入り込んでからだ。ロッサは身を隠してくれ。とにかく、今のうちに案を練らなきゃな……」

『メンシヒのアレが当たる壁』序（後書き）

今回登場したメンシヒのメカニック“ハリバット”。名前の元はヒラメの英名となっております。さて、既にハマつた琉とロッサはどう対処するのでしょうか…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2630u/>

Mystic Lady ~邂逅編~

2011年12月1日20時50分発行